

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第39集
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書 第22集

しも おお た
下 太 田 遺 跡

2003

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
豊北町教育委員会



空から見た下太田遺跡全景（南から）

序

山口県では、恵まれた自然環境を保全しつつ、豊かな地域環境の創造に向け、農業基盤整備事業などの諸施策が推進されています。

地域によっては、こうした開発事業に伴い地下に埋もれている歴史的遺産である遺跡等の消失が危惧されることから、当県では、関係機関との調整を図りながら、必要な範囲について事前に発掘調査を行い、その結果を記録にとどめ、郷土を築いてきた先人の足跡を後世に残すこととしております。

本書は、豊北町田耕地区の国営農地再編整備事業に先立ち、同地区内に所在する下太田遺跡について、財団法人山口県教育財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、中世の集落跡が発見され、土師器をはじめとする数多くの土器類や石製品などが出土しました。さらに弥生時代から古墳時代にかけての遺構や遺物も出土しました。これらの資料は当時の人々の暮らしを考える上できわめて貴重な資料で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史の基礎資料として、広く活用されることを願うものであります。

おわりに、当発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたり、御指導・御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人山口県教育財団

理事長 牛見 正彦

序

国指定史跡「土井ヶ浜遺跡」を擁し、自然と歴史に恵まれた豊北町では、2001年度(平成13年度)から、国営農地再編整備事業を行っています。この事業に先立って、遺跡の有無を確かめるために試掘調査を実施し、その結果に基づいて遺跡の発掘調査を行ってきました。2002年度(平成14年度)には、田耕・下太田遺跡を含めて8遺跡の発掘調査を行いました。下太田遺跡では、中世の掘立柱建物跡や弥生時代から古墳時代にわたる遺物が出土するなど、予想以上の成果を上げることができました。田耕地区で行われた遺跡の発掘調査は、甲殿遺跡に続いて本遺跡がまだ2例目ですが、今後豊北町の歴史を明らかにする際の貴重な遺跡のひとつになるものと期待されます。

このような埋蔵文化財は、私たちが住んでいる地域の歴史を内容豊かに復元するために欠くことのできない文化遺産です。従って、本書が学術関係者だけでなく、地域の社会教育・学校教育などの分野でも広く活用されることを願っております。

なお、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力・ご援助いただきました関係各位、地元の皆様方に深く感謝いたします。

2003年(平成15年)3月

豊北町教育委員会

教育長 隅 田 忠

例 言

- 1 本書は、山口県豊北町大字田耕に所在する下太田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国営農地再編整備事業に伴い、財団法人山口県教育財団が中国四国農政局の委託を受け、また、一部は豊北町教育委員会が平成14年度国庫補助事業として、共同で実施したものである。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体	財団法人山口県教育財団	山口県埋蔵文化財センター		
	豊北町教育委員会			
調査担当	山口県埋蔵文化財センター	指導主事	内山雅司	
	山口県埋蔵文化財センター	指導主事	桑原豪夫	
	山口県埋蔵文化財センター	指導主事	城島史朗	
	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム	学芸員	小林善也	
- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、中国四国農政局、豊北町農村整備課並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は、豊北町役場が、国土地理院発行の5万分の1地形図を使用して作成した「豊北町全図」、第2図は、中国四国農政局提供の地図を複製使用したものである。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（世界標準系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 出土遺物のうち、石器の石材鑑定（表面観察による）については、山口大学理学部地球科学教室教授 今岡照喜氏、山口県立山口博物館 専門学芸員 亀谷敦氏の助言を得た。
- 8 本書に使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

S B	: 建物跡	S K	: 土坑	S A	: 柵列	S D	: 溝	S P	: 柱穴	S X	: 用途不明遺構
-----	-------	-----	------	-----	------	-----	-----	-----	------	-----	----------
- 11 本書の作成・執筆は、内山・桑原・城島・小林が共同で行い、編集は内山が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	調査の成果	
1	住居跡	11
①	① 竪穴住居	11
	竪穴住居出土遺物	12
②	② 掘立柱建物	12
	掘立柱建物出土遺物	22
2	溝状遺構と柵列	22
	溝状遺構出土遺物	23
3	土坑	25
	1 地区土坑出土遺物	25
	2 地区土坑出土遺物	29
4	柱穴	30
	1 地区柱穴出土遺物	30
	2・3地区柱穴出土遺物	31
5	遺物包含層	31
	1地区遺物包含層出土遺物	31
	2地区遺物包含層出土遺物	33
6	石組遺構	34
7	その他の遺構	35
8	遺構外出土遺物	36
IV	まとめ	37

図版目次

巻頭図版 空から見た下太田遺跡全景（南から）

図版 1	1 地区全景 (東から)	図版11	S K 5・6・14・18・22・23・24・29
	1 地区①中央部 (東から)	図版12	S P 29・40・61・64・74・87・90
	1 地区③東側 (東から)	図版13	石組遺構検出状況 集石遺構 1 検出状況 集石遺構 1 トレンチ土層 S X 1 検出状況
図版 2	2 地区全景 (東から)	図版14	1 地区遺物包含層検出状況 1 地区遺物包含層内トレンチ土層 1 地区遺物包含層遺物出土状況
	2 地区中央部 (東から)	図版15	2 地区遺物包含層遺物出土状況 2 地区下段土層壁 3 地区東端部検出状況 1 地区杭列検出状況
図版 3	3 地区全景 (南から)	図版16	S B 1 出土遺物 掘立柱建物出土遺物 溝状遺構出土遺物
	3 地区中央部 (南から)	図版17	1 地区土坑出土遺物 2 地区土坑出土遺物 1 地区柱穴出土遺物
図版 4	2・3 地区遠景 (東から)	図版18	2・3 地区柱穴出土遺物 1 地区遺物包含層出土遺物①
	1 地区②全景 (東から)	図版19	1 地区遺物包含層出土遺物②
図版 5	S B 1 S B 1 遺物出土状況	図版20	2 地区遺物包含層出土遺物
図版 6	S B 2 S B 3 S P 17・27内柱痕検出状況	図版21	遺構外出土遺物
図版 7	S B 7・S A 1・2・S D 3・4 S B 10・11・13		
図版 8	S B 14 S B 18		
図版 9	S B 19 S D 2・3・4合流部遺物出土状況		
図版10	S D 3・4 S D 8		

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	2
第2図	調査区設定図	4
第3図	1地区遺構配置図	5・6
第4図	2地区遺構配置図	7・8
第5図	1・2・3地区土層断面図	7・8
第6図	3地区遺構配置図	9・10
第7図	S B 1実測図	11
第8図	S B 1出土遺物実測図	11
第9図	S B 2実測図	12
第10図	S B 3・4・5実測図	13
第11図	S B 6・7実測図	14
第12図	S B 8・9実測図	15
第13図	S B 10・11・12実測図	16
第14図	S B 13実測図	17
第15図	S B 14実測図	18
第16図	S B 15・16実測図	19
第17図	S B 17・18実測図	20
第18図	S B 19実測図	21
第19図	掘立柱建物出土遺物実測図	22
第20図	S D 3・4, S A 1実測図	23
第21図	溝状遺構出土遺物実測図	23
第22図	S K 4・5・6・14・35実測図	24
第23図	1地区土坑出土遺物実測図	25
第24図	S K 16・17・18・19実測図	26
第25図	S K 20・21・22・23・36実測図	27
第26図	S K 24・26実測図	28
第27図	S K 25・29・30実測図	28
第28図	2地区土坑出土遺物実測図	29
第29図	S K 32・33実測図	29
第30図	S P 29・40・61実測図	30
第31図	1地区柱穴出土遺物実測図	30
第32図	S P 64・74・87・90実測図	31
第33図	2・3地区柱穴出土遺物実測図	31
第34図	1地区遺物包含層出土遺物実測図	32
第35図	2地区遺物包含層出土遺物実測図	34
第36図	石組遺構実測図	35
第37図	集石遺構1実測図	35
第38図	S X 1実測図	36
第39図	遺構外出土遺物実測図	36
第40図	山口県内 鍋B類出土遺跡	38

I 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

下太田遺跡は、豊浦郡豊北町大字田耕字下太田に所在する、弥生時代終末から古墳時代初頭および中世に営まれた集落跡である。

豊北町は、山口県の中で最も西の端に位置する。北東部にザレ山(390.3m)、東部に城山(375.8m)南部に狗留孫山(616.3m)などがあり、丘陵が多く平坦地に恵まれないが、耕地はおおむね土壌肥沃で水利に富む。豊田町に流れを発する粟野川が、田耕地区で太田川を始めとした支流を集め、川幅を広げて、南西部から中央部を流れ、さらに北に転じて粟野を経て油谷湾に注ぐ。平均気温は15.5～16.0℃で、冬期も対馬海流の影響を受け比較的温暖である。

下太田遺跡のある田耕地区は、豊北町の南東部に位置し、広さは東西に約7 km、南北に約7.5km、面積約38km²の盆地である。北方には中国山地の脊梁にあたる白滝山系、南には狗留孫山からの支脈があり、全地区が山稜に囲まれている。粟野川と多くの支流の沿岸には、水田を主体にした肥沃な耕地が広がる。この肥沃な耕地が田耕と名づけられた所以である。海岸線より山稜によって隔てられた内陸部に位置するため、気候は海岸部よりやや寒暖の差が大きく、雨量も多い。

下太田地区は、田耕地区のほぼ中央部に位置する。狗留孫山支脈の北東裾部にあたり、狗留孫山に水源を発する太田川下流域の河岸段丘および谷底平野部にある。太田川は、今回のほ場整備事業と並行して行われている河川改修事業によって流域の整備が行われているが、それ以前は現在より川底が高いところを流れ、氾濫することも少なくなかったといわれている。本遺跡は、太田川沿いの水辺から少し小高い河岸段丘部にかけて立地し、そこに住む人々は豊かな水と肥沃な土壌を生かし、河川の氾濫と闘いながら生活を営んでいたと考えられる。

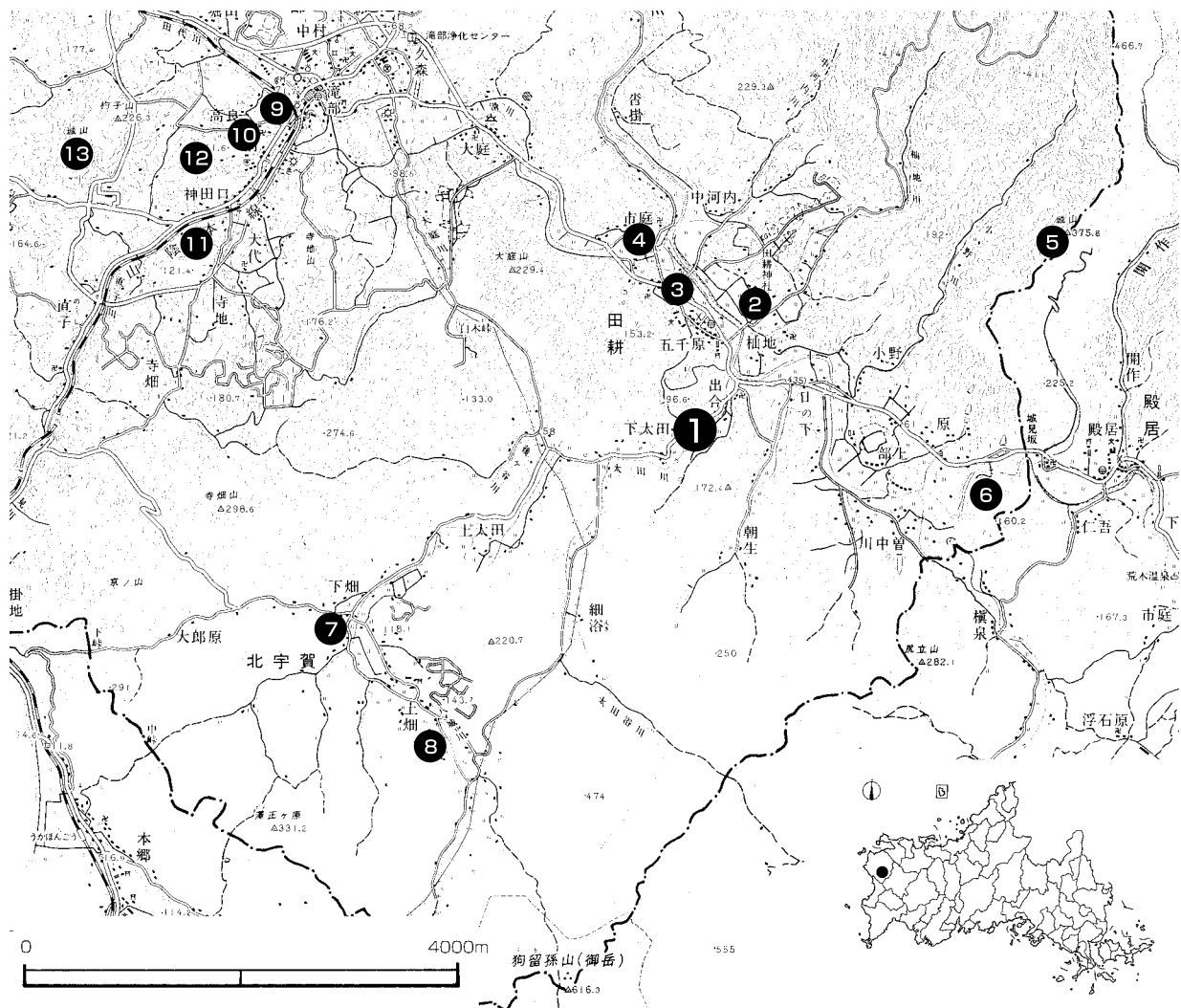
2 歴史的環境

豊北町では、土井ヶ浜遺跡に代表されるように、海岸部を中心に弥生時代の遺跡が多く確認されている。内陸部にも弥生時代から中世にかけての遺跡が確認されているものの、本格的な調査が行われた遺跡としては、数カ所を数えるのみである。

下太田の地名は、1300年代にこの地の領主であった、大田民部亮秀正に由来する。秀正は領田約52町(約52ha)を保有し、他所に移っていた神社の御神体をこの地に再び移し直すなど、大きな勢力を誇っていた。

下太田地区から北東に約1.2kmのところには、弥生時代前期末から古墳時代初頭にかけての集落跡である甲殿遺跡がある。この遺跡からは、竪穴住居18軒、掘立柱建物20棟を始めとする遺構と、在地の土器の他に九州系・山陰系の弥生土器が検出された。また、中国戦国時代の系譜を引くガラス製トンボ玉が出土している。このことから、甲殿遺跡は田耕地区の拠点集落と考えられ、この時期に山陰圏を始め、九州圏・大陸との交流があったことがうかがえる。この遺跡から粟野川を挟んで北西方向500mのところには、室町時代後期から江戸時代の集落跡である肥後屋敷遺跡がある。この遺跡からは、掘立柱建物20棟と室町時代後期を主体とする土師器や瓦質土器、江戸時代の陶磁器類が検出された。

南西方向に太田川の上流約6 kmのところには、八城遺跡がある。この遺跡は、土豪居所を中心と



- 1 下太田遺跡 2 甲殿遺跡 3 肥後屋敷遺跡 4 市庭遺跡 5 竜山城跡 6 原釜跡 7 下畑石棺
 8 八城遺跡 9 末光遺跡 10 浴ヶ追遺跡 11 榎ノ木山石棺 12 東正寺遺跡 13 城山城跡

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

した中世の集落跡と考えられ、掘立柱建物1棟とそれに伴うと考えられる溝等の遺構が検出された。出土遺物としては、土師器の皿や坏、11世紀初頭に鑄造された契丹銭などが挙げられる。

また、田耕地区の東方豊田町殿居との境の城山(375.8m)には、竜山城がある。築城者は明確ではないが、遺構の状況から中世後期のものであると考えられる。豊臣秀吉の九州征伐の際には、軍事拠点として毛利氏の一族が駐留していた。

中世を通じて、いろいろな武将や豪族の勢力下にあった田耕は、関ヶ原の戦の後、毛利氏が防長二国に削封されて以後、江戸時代には長府藩領となる。1747年当時の人口は2,248名で、豊北地方で最多を誇り、農村として繁栄していたことを示す。また、1646年に約2,000石であった石高が、約100年後には約5,000石に達しており、江戸時代の盛んな新田開発の様子を物語る。今回の発掘調査においても、当時の耕地整理にあたる「町だおし」の跡があったり、遺構面の削平が見られたりしたが、当時の新田開発の様子と符合する。

本遺跡は、周知された遺跡の希薄な豊北町の内陸部において、中世を中心とした集落跡であることが判明した。今回の調査によって、当地域の歴史を解き明かすための貴重な資料を得ることとなった。

参考文献

豊北町史編纂委員会	『豊北町史二』	1994	山口県文書館	『防長風土注進案 編外 豊浦藩村浦明細書』	1965
山口県地方史学会	『防長地下上申』	1979	山口県文化財愛護協会	「八城遺跡」『山口県文化財 第9号』	1979
山口県埋蔵文化財センター	『甲殿遺跡』	1993	山口県埋蔵文化財センター	「肥後屋敷遺跡」『陶垣 第14号』	2001
『角川日本地名大辞典』編纂委員会	『角川日本地名大辞典 35 山口県』	1988			

Ⅱ 調査の経緯と概要

豊北町で始まった国営農地再編整備事業豊北地区区画整理工事に際し、山口県教育委員会は、当該地域の耕地について豊北町教育委員会と分担して試掘による事前調査を行い、その結果下太田地区において遺跡の埋存が確認された。これを受けて山口県教育委員会では、中国四国農政局豊北農地整備事業所および豊北町教育委員会と協議を行い、基盤整備の施工上削平が避けられない範囲について発掘調査を行うこととなった。調査に当たっては財団法人山口県教育財団が中国四国農政局から委託を受けて豊北町教育委員会と共同で行うこととなった。

まず、発掘調査対象地域が分散しているため、便宜上、南から1・2・3地区と設定した。(第2図)その後、山口県教育財団と中国四国農政局および豊北町農村整備課との協議によって、基盤整備工事の都合上、調査面積5,500㎡のうち県道南側の調査区(1地区)については、調査を他に先駆けて行うこととした。また、1地区中央部に仮設道が通っていたため、1地区①および③の発掘調査が終わり次第、仮設道の下を調査することとなった(図版1および図版4)。

平成14年4月下旬に作業員説明会、プレハブ設置等の諸準備を行い、5月1日から調査を開始した。

まず遺構面を確認するため、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムが行った予察調査のデータをもとに人力によるトレンチ調査を行った。その結果、1地区では盤土の直下に、2地区では遺物包含層を挟んで遺構面が確認された。3地区は中央部が客土層に広く覆われており、東部で青灰色層、西部で礫層の広がり認められ、明瞭な遺構は確認できなかったが、遺構面と思われる層の直上から石包丁の破片が出土した。トレンチの設定数は各地区合計22本に及び、5月28日のトレンチ調査終了までに各地区で土師器や足鍋、陶磁器などの破片が出土した。

これらの結果を踏まえ、5月24日から6月19日にかけて表土除去を行った。当初の予定に基づき1地区から重機を使って表土を取り除いたが、1地区は県道の路肩に面した場所にあり、崩落の恐れもあったため、調査区の道路側約1mを残して表土除去を行うことにした。5月28日からは1地区の遺構検出作業に入り、6月6日には遺構の掘り込みを開始した。6月19日に国土座標杭を設置するまでの間、仮杭を使って遺構の実測を進めた。遺構の掘り込みは7月初旬に終了し、7月9日にはラジコンヘリによる空撮を行い、その後8月中旬まで3地区の調査と並行してグリッド実測を行った。8月26日には1地区を通る仮設道の付け替え工事がなされ、同時に道路下(1地区②)の表土除去を行った。その後1地区②の遺構検出、掘り込み、実測を行い、9月11日には1地区の調査を全て終了した。この調査区においては、柱穴、溝、土坑などが数多く検出された。また、



重機による表土除去

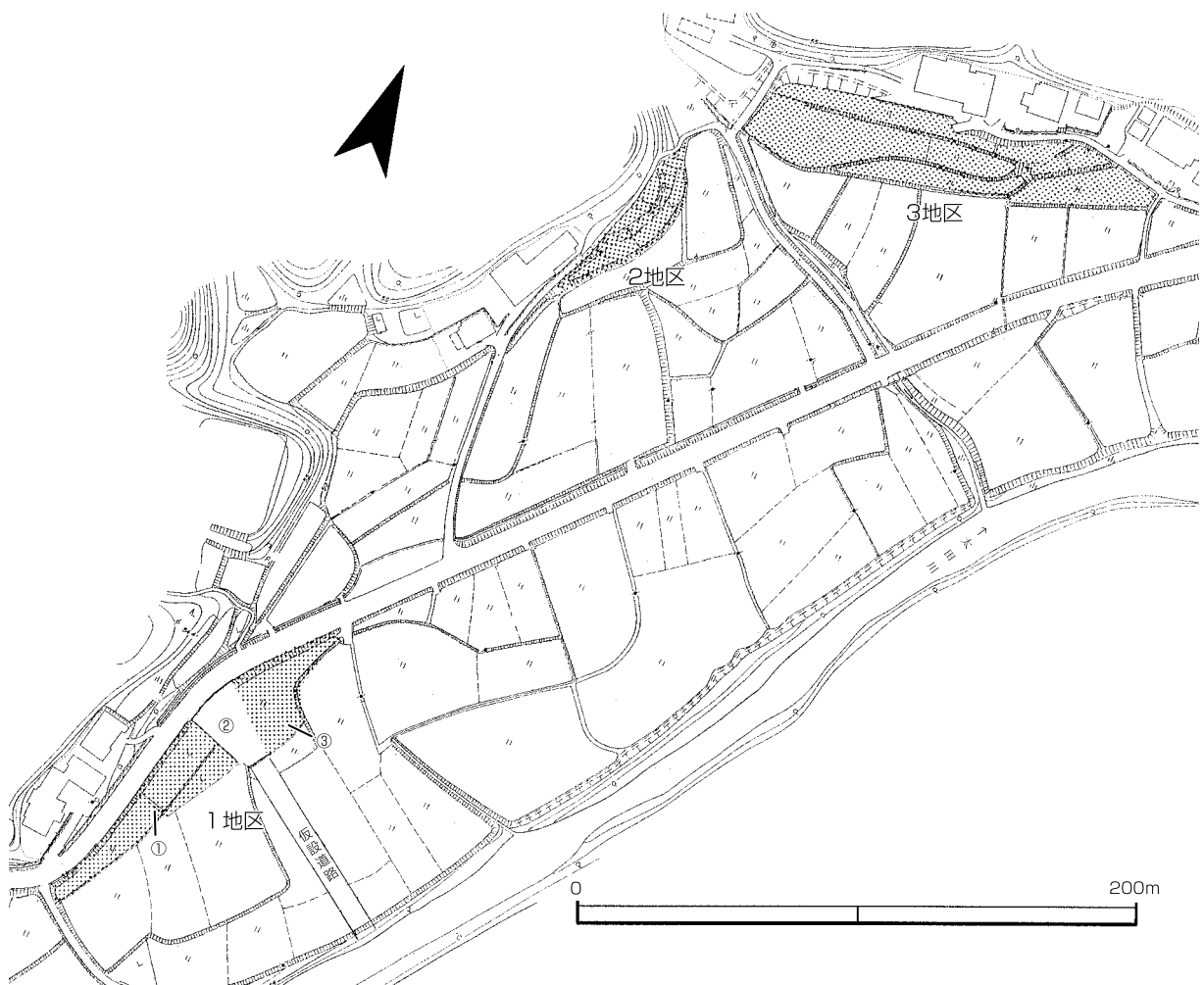


発掘体験学習

試掘調査で確認されていた暗灰黄色の粘質土の広がり、沼や川の淀みといった湿地帯であつたらしいことが確認された。この湿地帯は、南北50m以上の規模があり、深さも1m以上のところがあるため、重機を併用してトレンチを東西および南北に掘り込んで、調査を実施した。

3地区の調査は7月18日より開始した。東端より遺構検出を進めた。柵田の造成に伴う客土層を除去しながらの作業であったが、予想に反して遺構は少なく、竪穴住居1軒、掘立柱建物2棟、土坑4基等が検出されたのみであった。8月19日には小学生など22名が参加して豊北町歴史民俗資料館主催の発掘体験学習が行われ、その後9月9日からは3地区の作業と2地区の遺構検出を並行して行った。2地区については3地区と同様客土層の除去を行ったが、下段に包含層の存在が確認されていたため、この層の広がりをおぼろげながら遺構検出を行った。3地区の作業が集中的に行われた9月末から10月初めにかけて中断した後、包含層及び遺構の掘り込みを進めたが、最終遺構面と考えられた層の下位からも遺物が見つかったため、この層を第2包含層として空撮後に可能な範囲で第2包含層下の遺構検出を行うことにした。10月25日に2・3地区の空撮を行い、その後2地区の第2包含層の除去と、その下から検出された遺構の実測、2・3地区のグリッド実測を並行して進め、11月20日には現地での調査は全て完了した。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料の整理、出土遺物の復元と実測、写真の撮影を行い、この報告書を刊行するに至った。



第2図 調査区設定図

Ⅲ 調査の成果

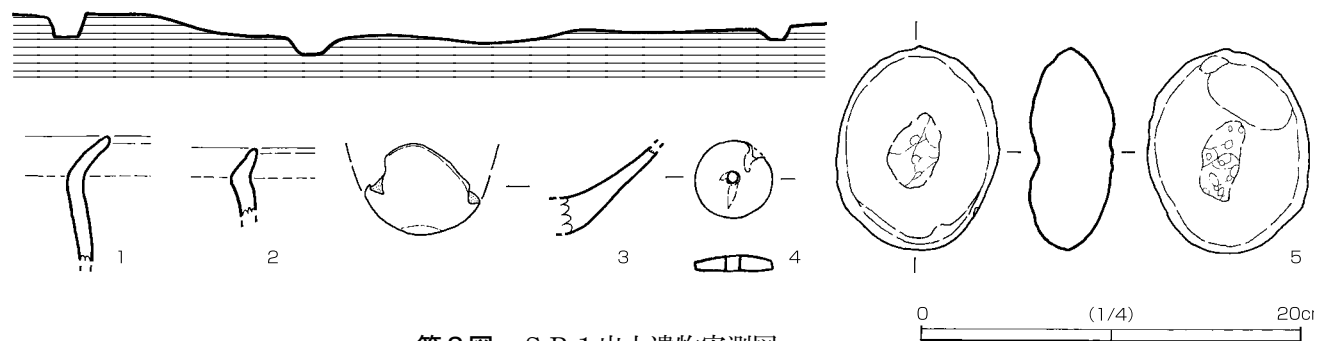
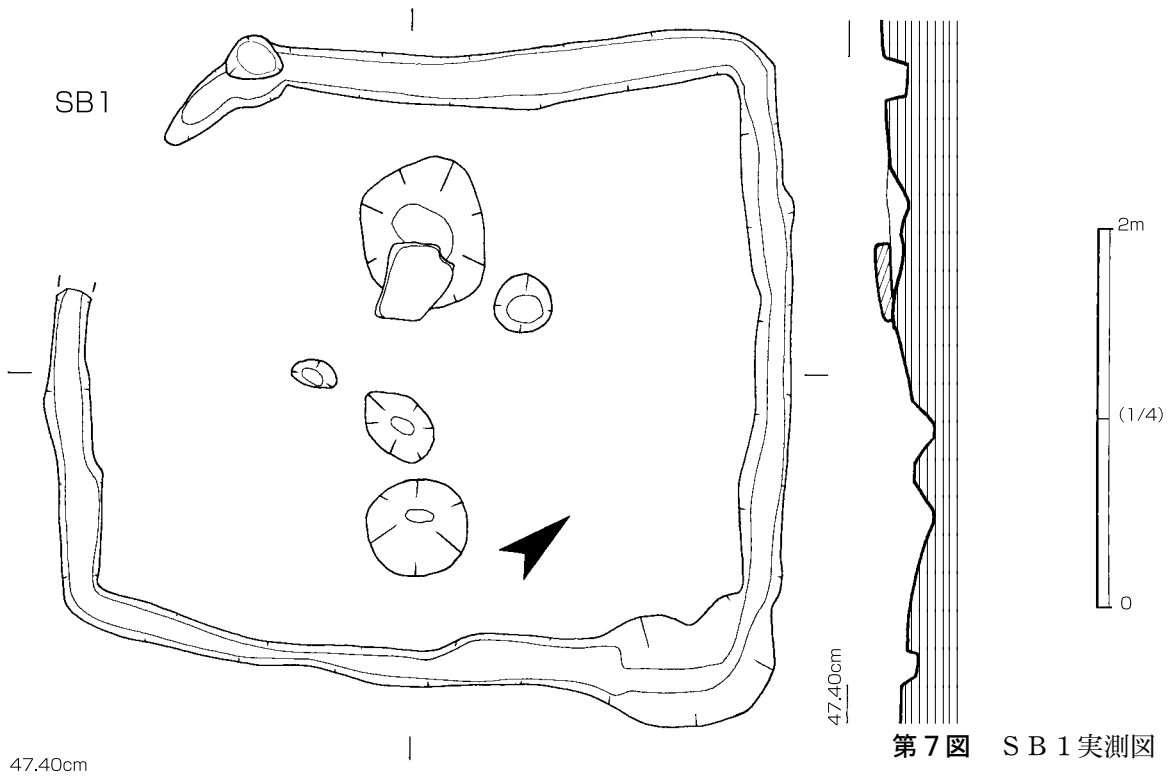
今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居1軒、掘立柱建物18棟、溝状遺構12条、柵列2条、土坑36基、土坑墓1基、用途不明遺構1基等である。これらの遺構は、出土遺物から大半が中世を中心とする時期に属すると思われる。ただし、3地区中央部で検出された竪穴住居や弥生土器・石包丁等の出土からみて、弥生時代以降、断続的に遺跡が形成されたことが伺える。

各遺構は、近世の水田開発によりかなりの削平を受けており、残存状況は良好なものではなかった。なお、1地区と3地区では、近世以降の湿地帯跡に伴うと思われる杭列も検出され、3地区西端部では河川の氾濫跡とみられる礫の堆積層を確認した。以下、遺構と遺物について記す。

1 住居跡

① 竪穴住居

SB1 (第7図 図版5) 3地区中央部南側に位置する。方形の竪穴住居で、一辺の長さは、東西で3.9m、南北で3.6mの規模を持ち、床面までの残存する深さ28cm。壁下には周溝がめぐる。支柱穴は2本である。残存する周溝は幅10~32cm、深さ7~11cmである。床面の中央部からは台石が検出された。住居内からは、弥生土器片3点、石製紡錘車1点、凹石1点が出土した。(第8図)



第8図 SB1出土遺物実測図

SB1 出土遺物 (第8図 図版16)

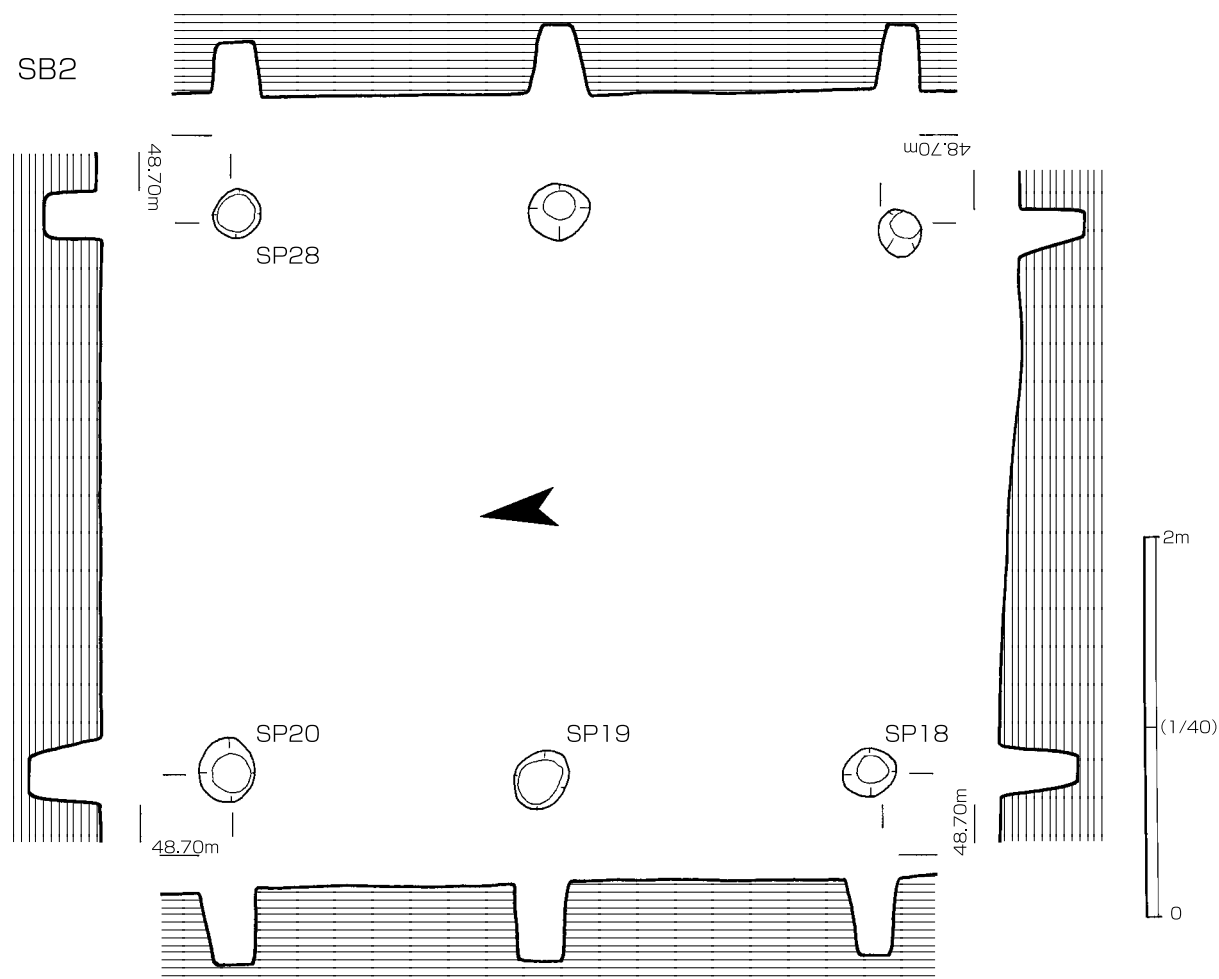
1・2は、弥生土器の甕の口縁部で、ゆるやかに外反する。1・2とも内外面の器面剥離が激しく調整は不明。胎土は粗く石英・長石粒を多く含む。焼成は良好で、色調は1は橙色・2は明黄褐色である。3は、壺の底部で尖底。器面剥離が激しく調整は不明。胎土は粗く砂粒を多く含む。焼成は良好で色調はにぶい黄橙色。4は石製紡錘車で直径4.1cm、厚さ0.8cm、孔径0.7cm。5は凹石で、表裏の中央部に使用痕の窪みがある。これらの遺物からSB1は、弥生時代終末～古墳時代初頭頃にかけての住居跡と推定される。

② 掘立柱建物 (第9図～第18図 図版6～9)

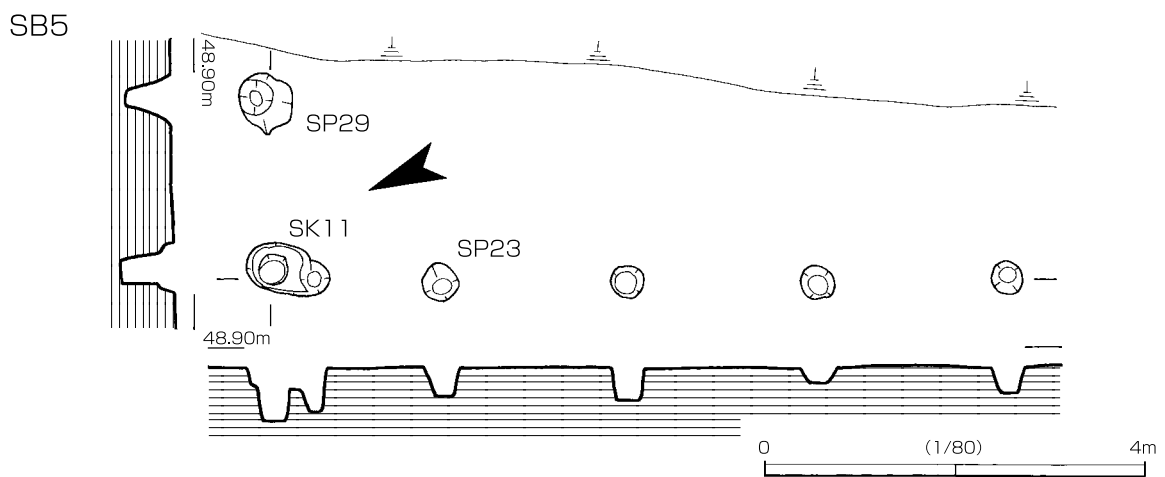
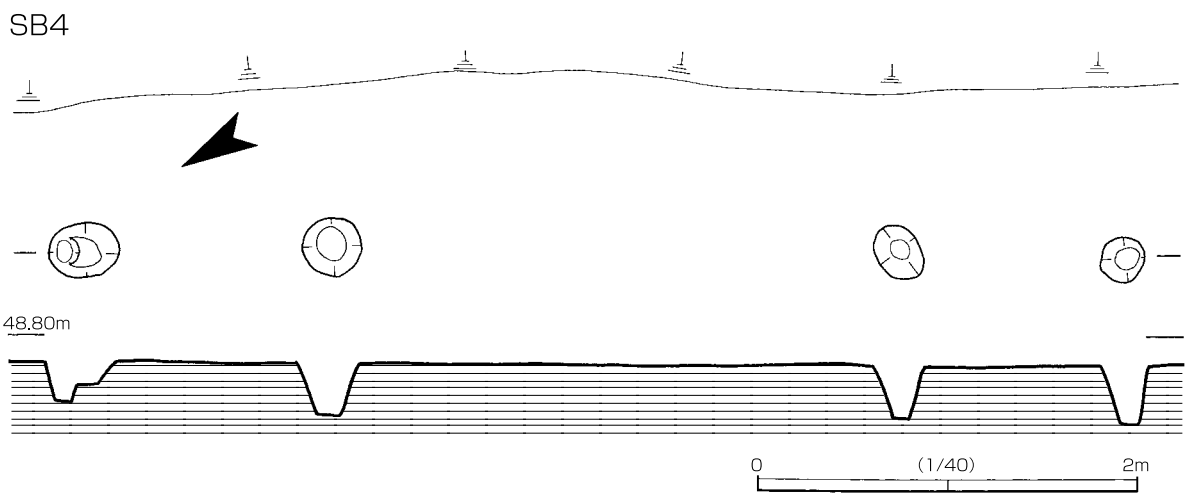
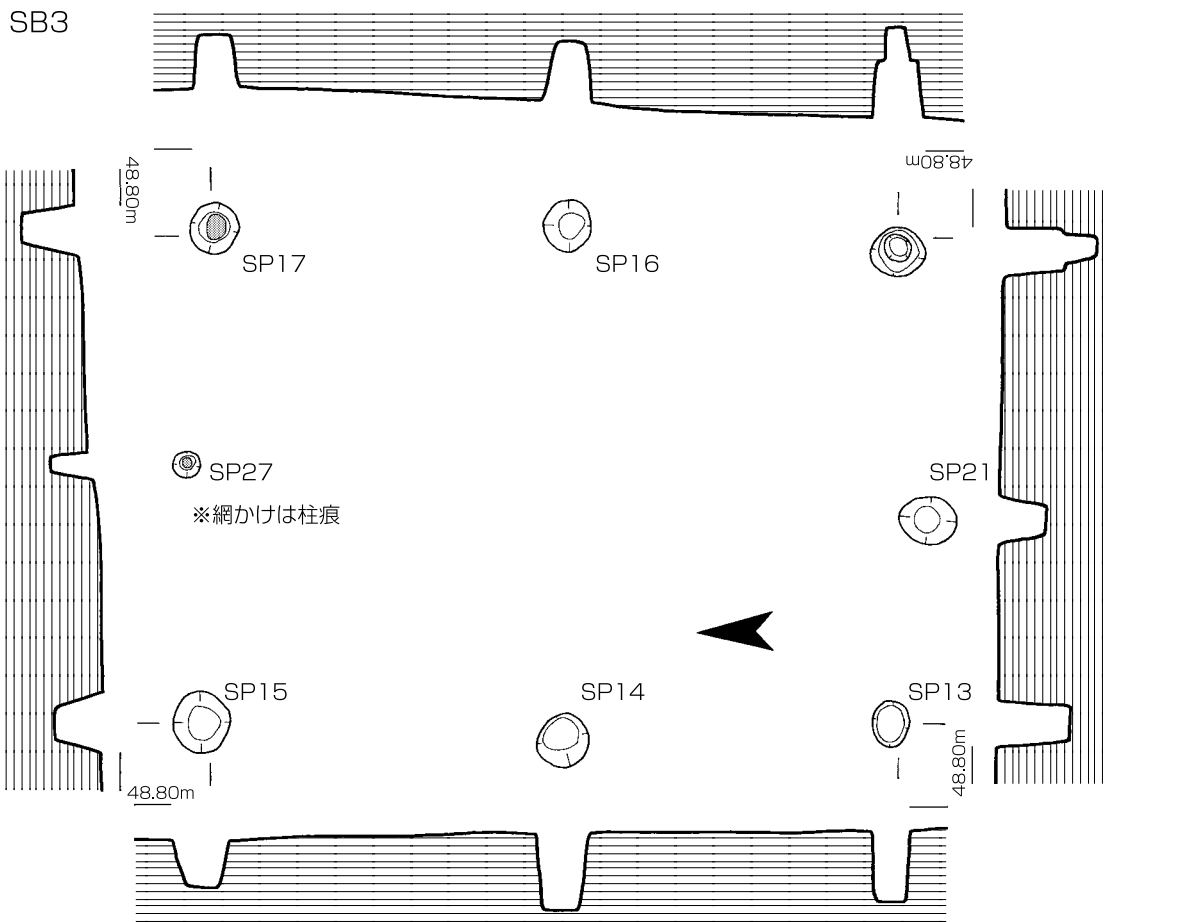
調査区内からは、多数の柱穴が検出されたが、そのうち18棟が復元できた。そのうち12棟は1地区に集中し、2地区では4棟、3地区では2棟にとどまる。1地区では、柵列が付設されたものもある。建物跡は1間×1間、2間×2間の比較的小規模のものが多い。棟方向は、N 1° E～N30° Eのものが約半数を占めており、比較的近接した時期の建物群である可能性が高い。建物群の時期は、出土遺物からみて大半が14～15世紀代に属するものと推定される。

SB2 (第9図 図版6) 1地区の中央に位置する2間×1間の建物である。棟方向は、N 7° E。桁行長3.4m、梁行長3.0mの規模をもち、6本の柱で構成される。柱穴は、直径25～35cm、深さ30～40cm。SP18・19・20からは、柱痕片が検出された。

SB3 (第10図 図版6) 1地区の中央に位置する2間×2間の建物である。棟方向は、N 1° E。



第9図 SB2実測図



第10図 SB3・4・5実測図

桁行長3.6m、梁行長2.6mの規模をもち、8本の柱で構成される。柱穴は、直径14~34cm、深さ22~48cm。S P 17・27からは、柱痕が検出された。また、S P 13・14・15・16からは、土師器片が出土している。

SB 4 (第10図) 1地区の中央部東側に位置する3間×2間と推定される建物で、北側と南側が庇付きの建物とみられる。東側は、調査区外のため確認できなかったが、周囲の建物の状況と棟方向、この建物の西側に対応する柱穴が確認できなかったことから、梁方向は東に延びるものと推定される。棟方向はN30° E。桁行長は5.6mを測る。柱穴は、直径22~37cm、深さ20~30cm。

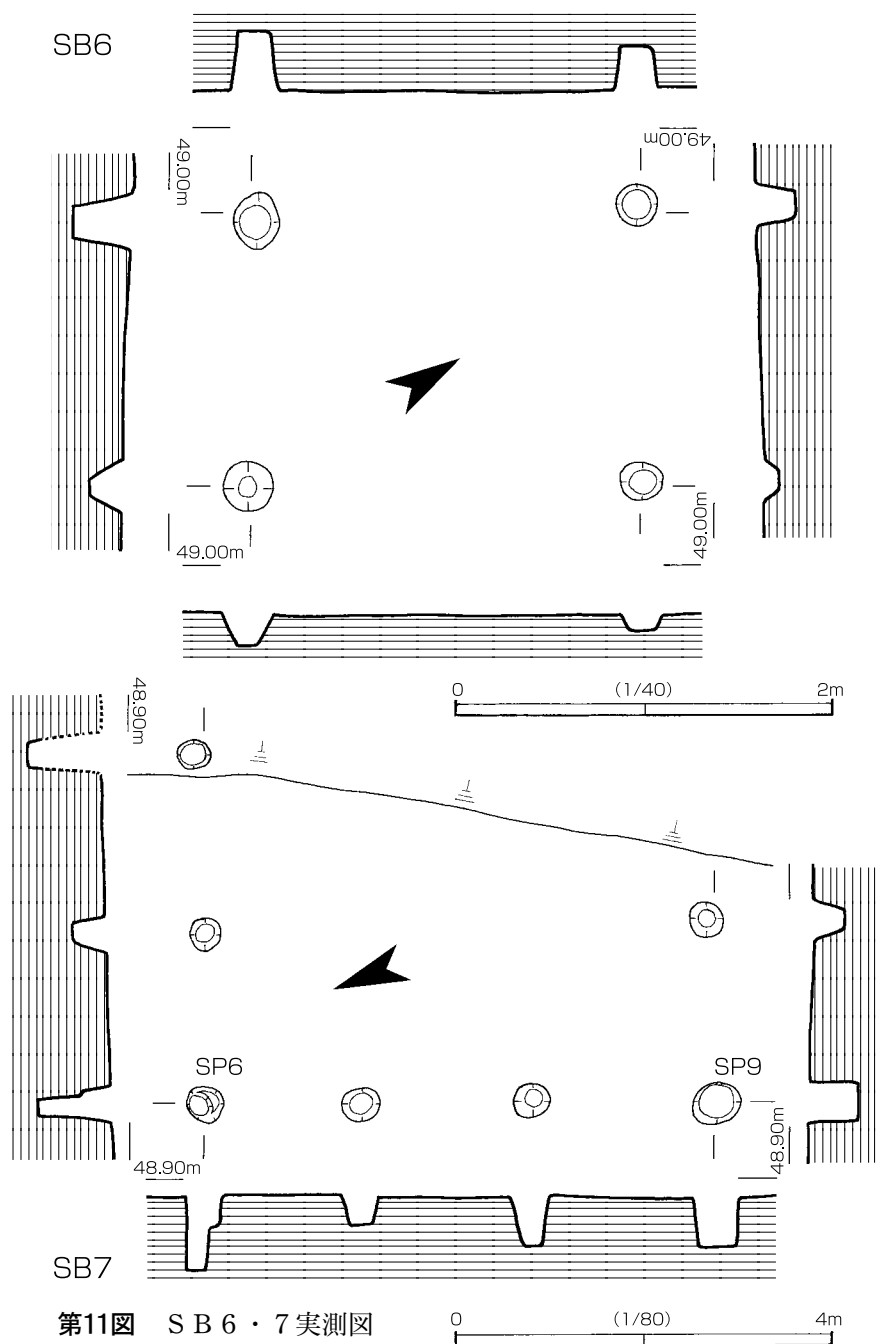
SB 5 (第10図) SB 4と重複する建物で、SB 4と同様に調査区外に梁方向はのびていくものと思われる。確認できた柱穴から4間×1間以上の建物である。棟方向は、N24° E。桁行長7.6m、梁行長1.8m以上の規模をもつ。柱穴は、直径35~60cm、深さ18~57cm。S P 23からは土師器の坏片、S P 29からは土師器の皿(第19図6)が出土した。

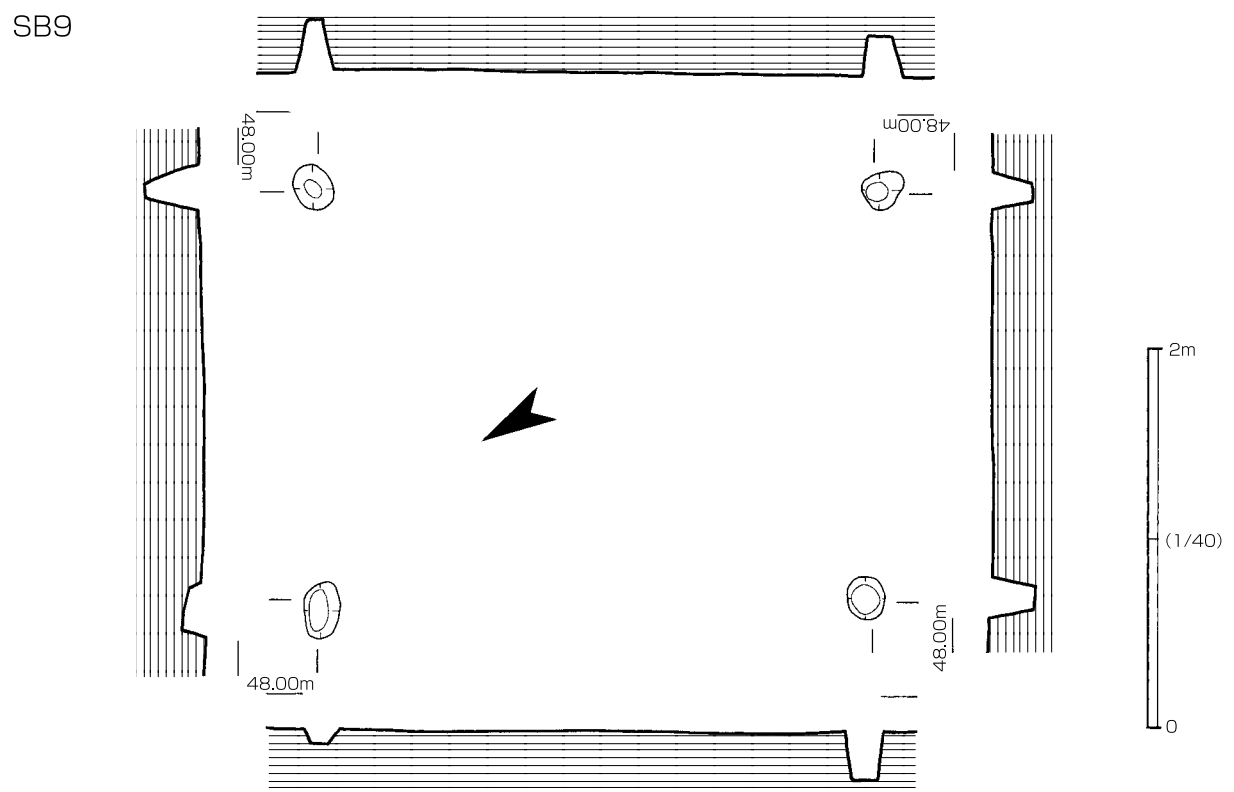
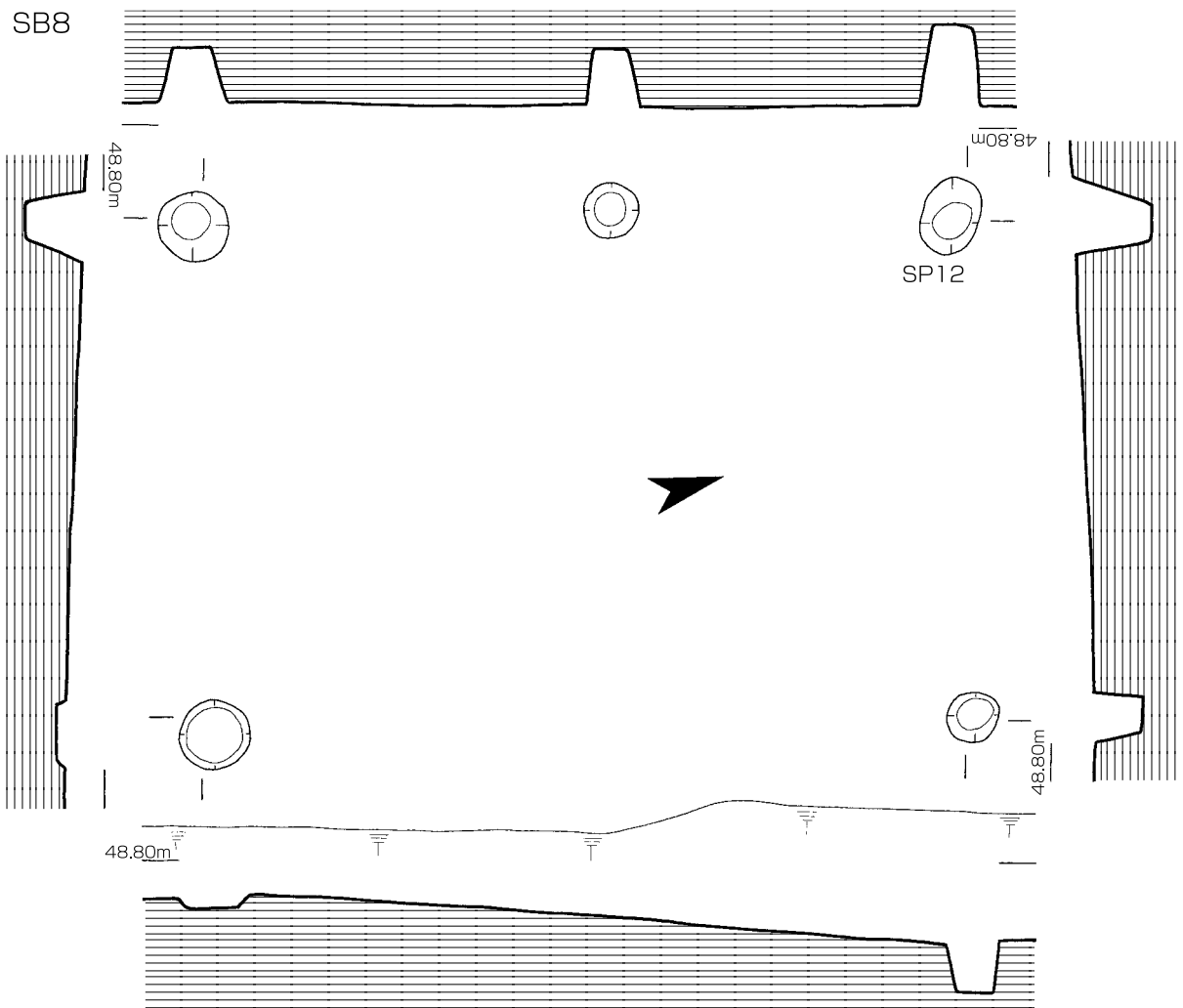
SB 6 (第11図)

1地区の中央に位置する1間×1間の建物である。棟方向は、N31° E。桁行長2.0m、梁行長1.7mの規模をもち、4本の柱で構成される。柱穴は、直径22~30cm、深さ8~32cm。

SB 7 (第11図 図版7)

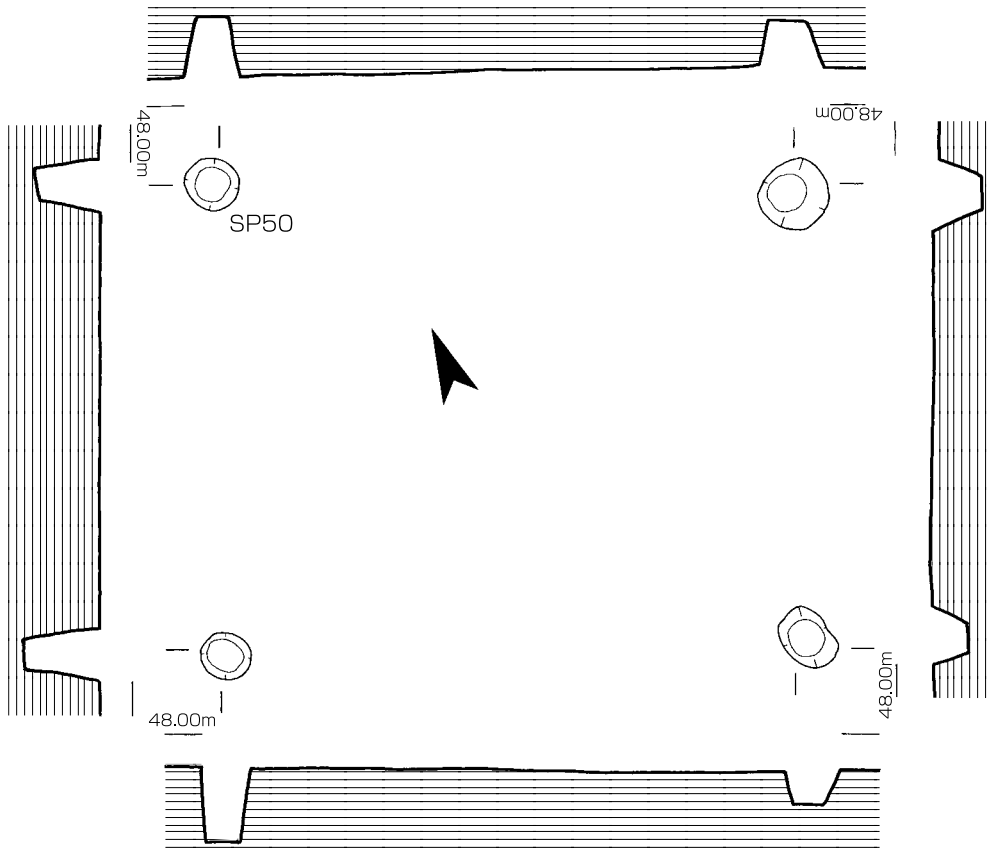
1地区の中央東側に位置する建物である。柱穴の一部は、調査区外にあたる。確認できた範囲で建物規模は、3間×2間と推定される。棟方向は、N22° E。桁行長5.6m、梁行長3.8mの規模をもつ。柱穴は、直径35~54cm、深さ30~80cm。S P 6と9からは、土師器片が出土した。建物の北側には溝SD 3・4があり、建物と溝の間に堀とみられるSA 1が付設される。





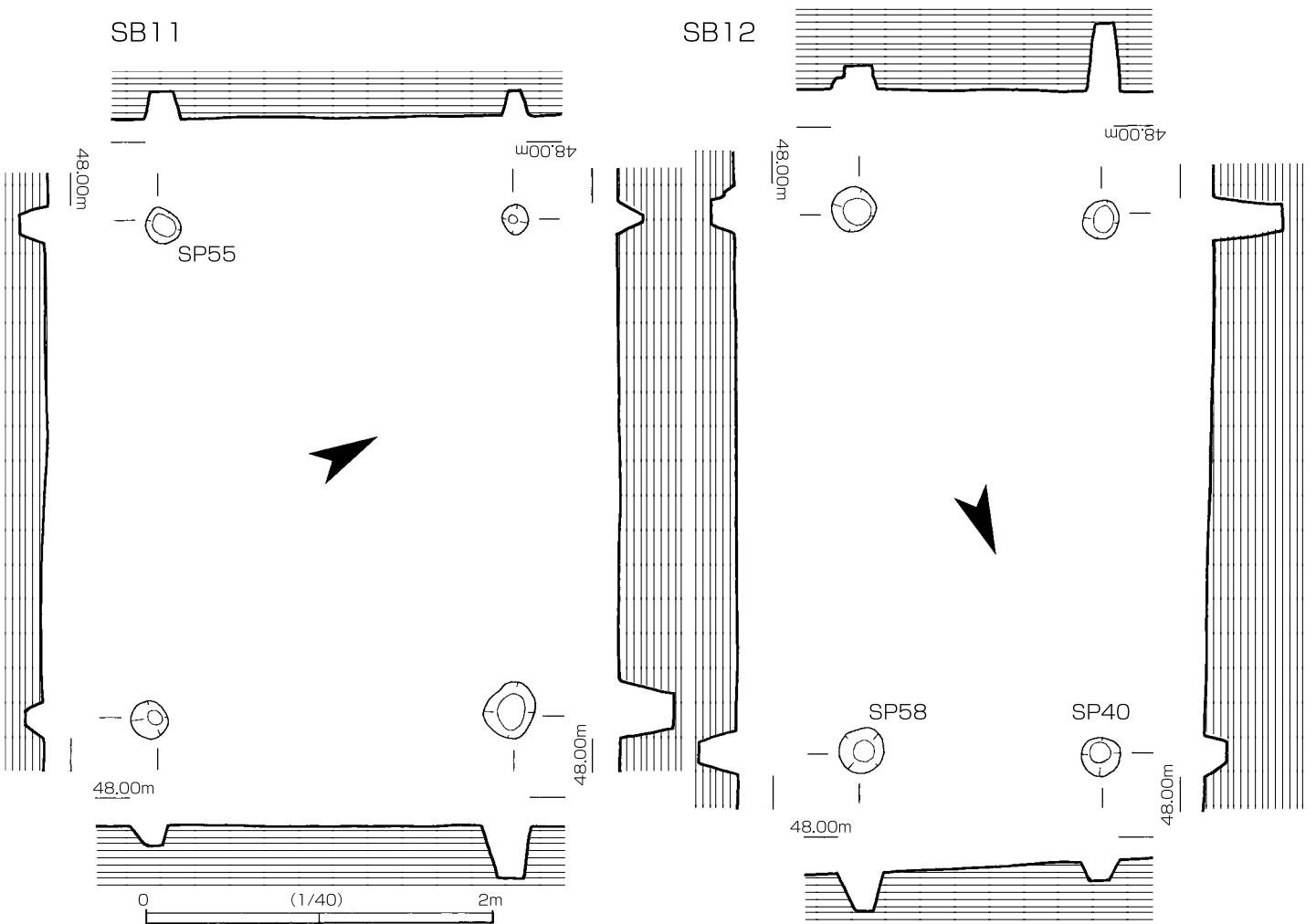
第12图 SB8・9実测图

SB10



SB11

SB12



第13图 SB10·11·12实测图

SB8 (第12図) 1地区の中央部に位置する2間×1間とみられる建物である。建物は、柱穴の配置状況から調査区東側へと伸びる可能性もある。棟方向は、N16° E。桁行長4.0m、梁行長2.8mの規模をもつ。柱穴は、直径28~42cm、深さ8~42cm。

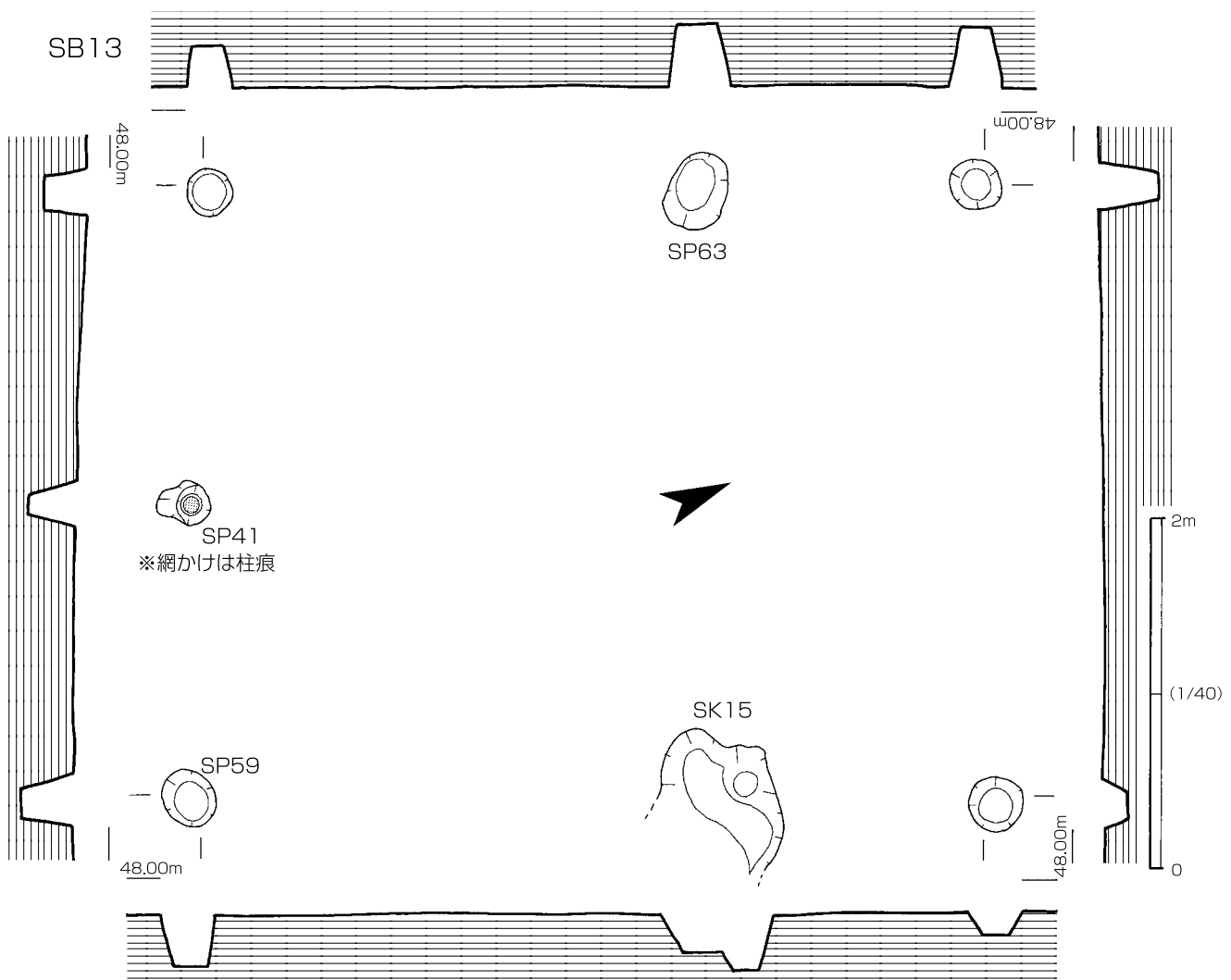
SB9 (第12図) 1地区の北側に位置する、1間×1間の建物である。棟方向は、N30° E。桁行長3.0m、梁行長2.2mの規模をもち、4本の柱で構成される。柱穴は、直径22~30cm、深さ8~30cm。

SB10 (第13図 図版7) 1地区の北側に位置する、1間×1間の建物である。棟方向は、N67° W。桁行長3.0m、梁行長2.2mの規模をもち、4本の柱で構成される。柱穴は、直径26~38cm、深さ20~40cm。SP50からは、土師器の坏片が出土した。

SB11 (第13図 図版7) SB10の西側に位置する1間×1間の建物である。棟方向は、N63° W。桁行長2.8m、梁行長2.0mの規模をもち、4本の柱で構成される。柱穴は、直径16~34cm、深さ16~32cm。SP55から土師器片が出土した。

SB12 (第13図) 1地区の北側に位置する、1間×1間の建物である。棟方向は、N24° E。桁行長3.1m、梁行長1.4mの規模をもち、4本の柱で構成される。柱穴は、直径23~26cm、深さ12~40cm。SP40から土師器の皿(第19図7)、SP55から土師器片が出土した。

SB13 (第14図 図版7) 1地区のSB12の北側に位置する、2間×2間の建物である。棟方向は、N24° E。桁行長4.6m、梁行長3.6mの規模をもつ建物である。柱穴は、直径26~44cm、深さ14~



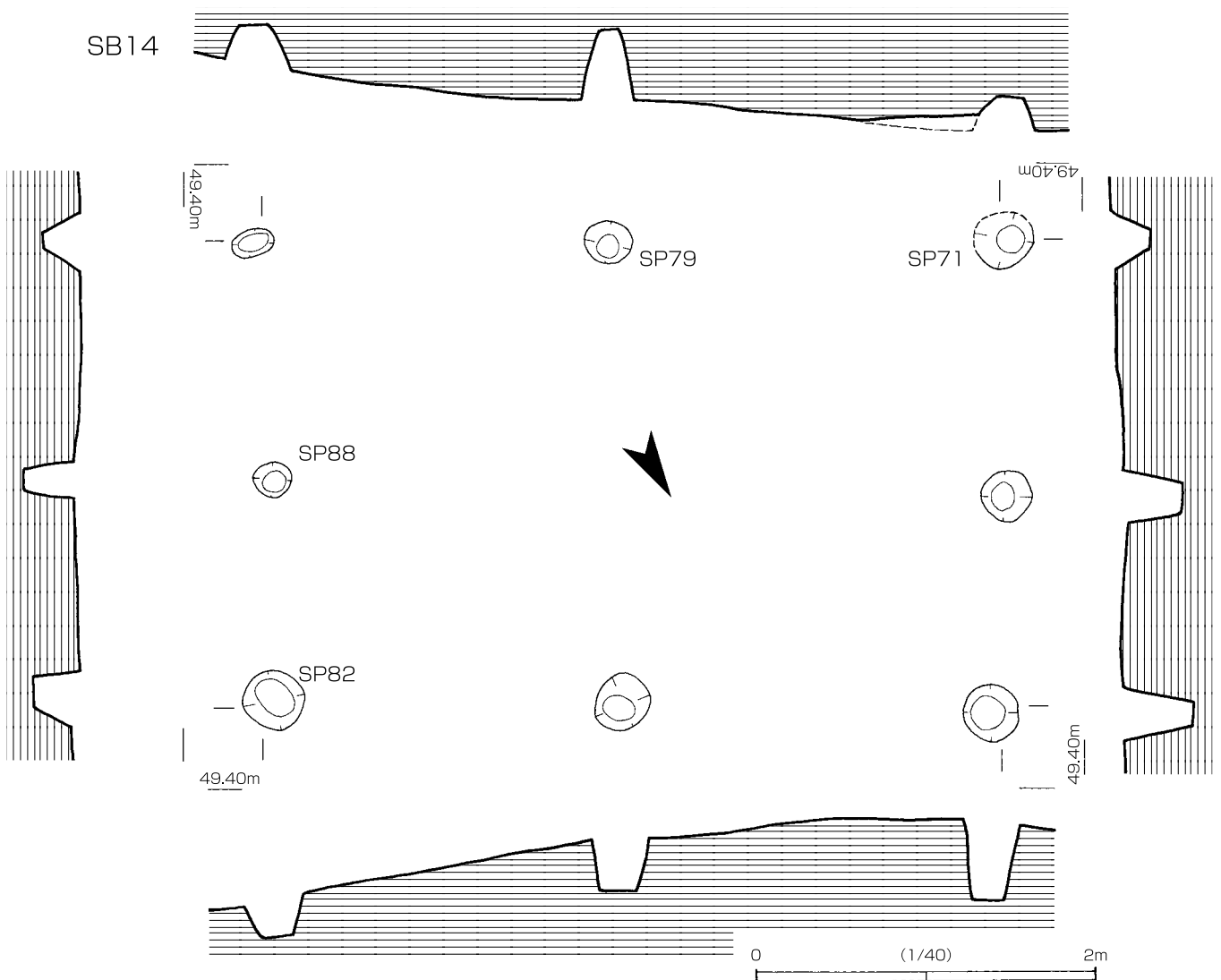
第14図 SB13実測図

37cm。S P 41には柱痕が残っていた。また、S P 63からは土師器の坏片が、S P 59からは砥石（第19図10）が出土した。東側中央の柱穴は、S K 15によって削平されている。

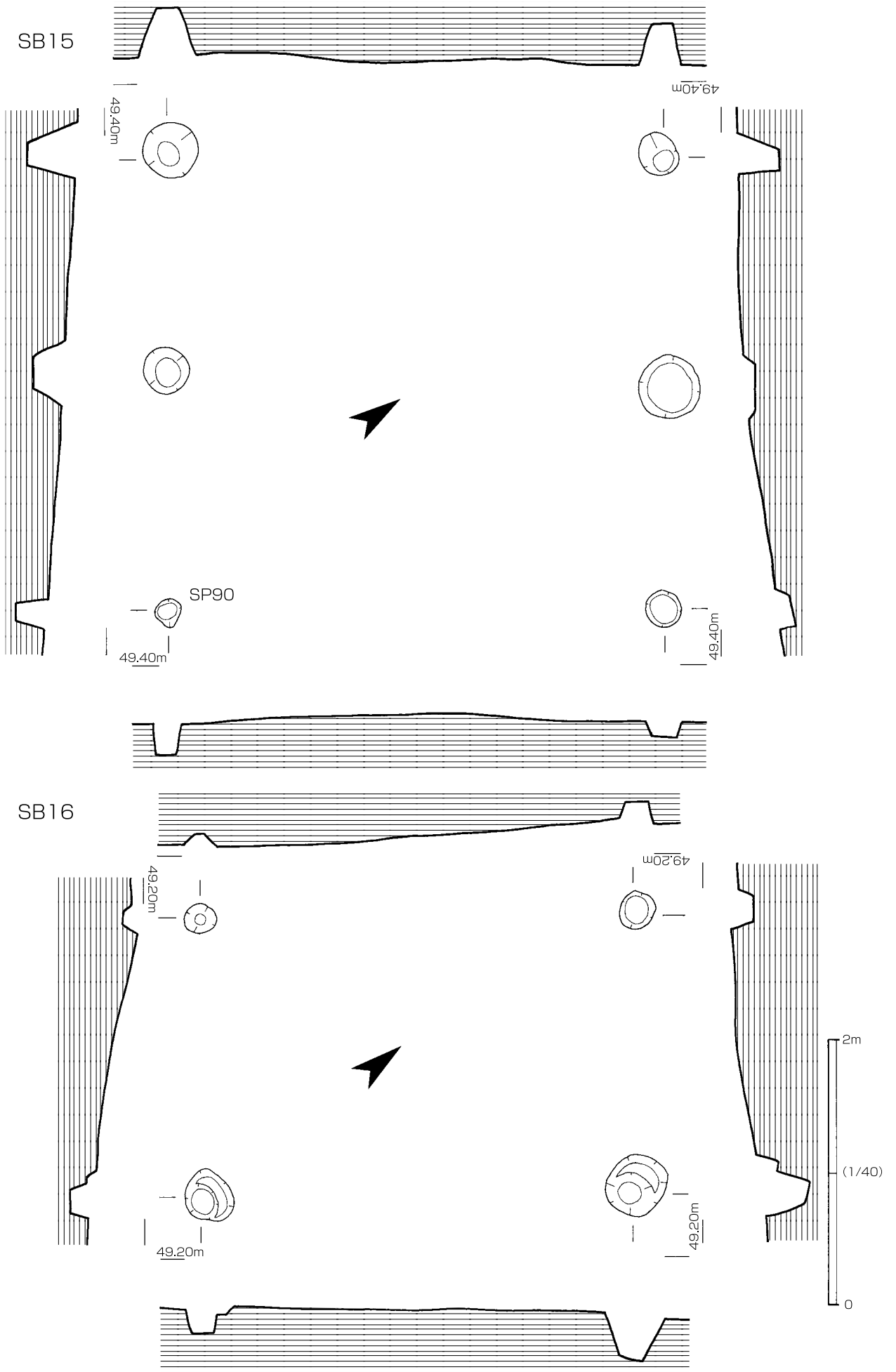
S B 14（第15図 図版 8） 2地区の中央に位置する、2間×2間の建物である。棟方向は、N59° W。桁行長4.4m、梁行長2.8mの規模をもち、8本の柱で構成される。床面は北西から南東方向に緩やかに傾斜し約40cmの高低差がある。建物の周辺の状況や遺構面の上に遺物包含層が堆積していた状況から、2地区に建てられた建物は、この高低差に関係なく建てられていたと思われる。柱穴は、直径22~36cm、深さ20~42cm。S P 71と79からは、土師器片が出土した。

S B 15（第16図） S B 14を建て替えて作られた可能性のある2間×1間の建物である。棟方向は、N57° W。桁行長3.8m、梁行長3.6mの規模をもち、柱穴は、直径20~48cm、深さ8~38cm。S P 90からは、土師器の皿と坏（第19図8・9）が出土した。

S B 16（第16図） 2地区のS B 15の南側に位置する、1間×1間の建物である。棟方向は、N54° W。桁行長3.3m、梁行長2.2mの建物である。柱穴は、直径20~46cm、深さ10~40cm。北側に隣接するS B 14やS B 15の規模・棟方向から、この建物は、南東方向の調査区外へ広がる可能性がある。



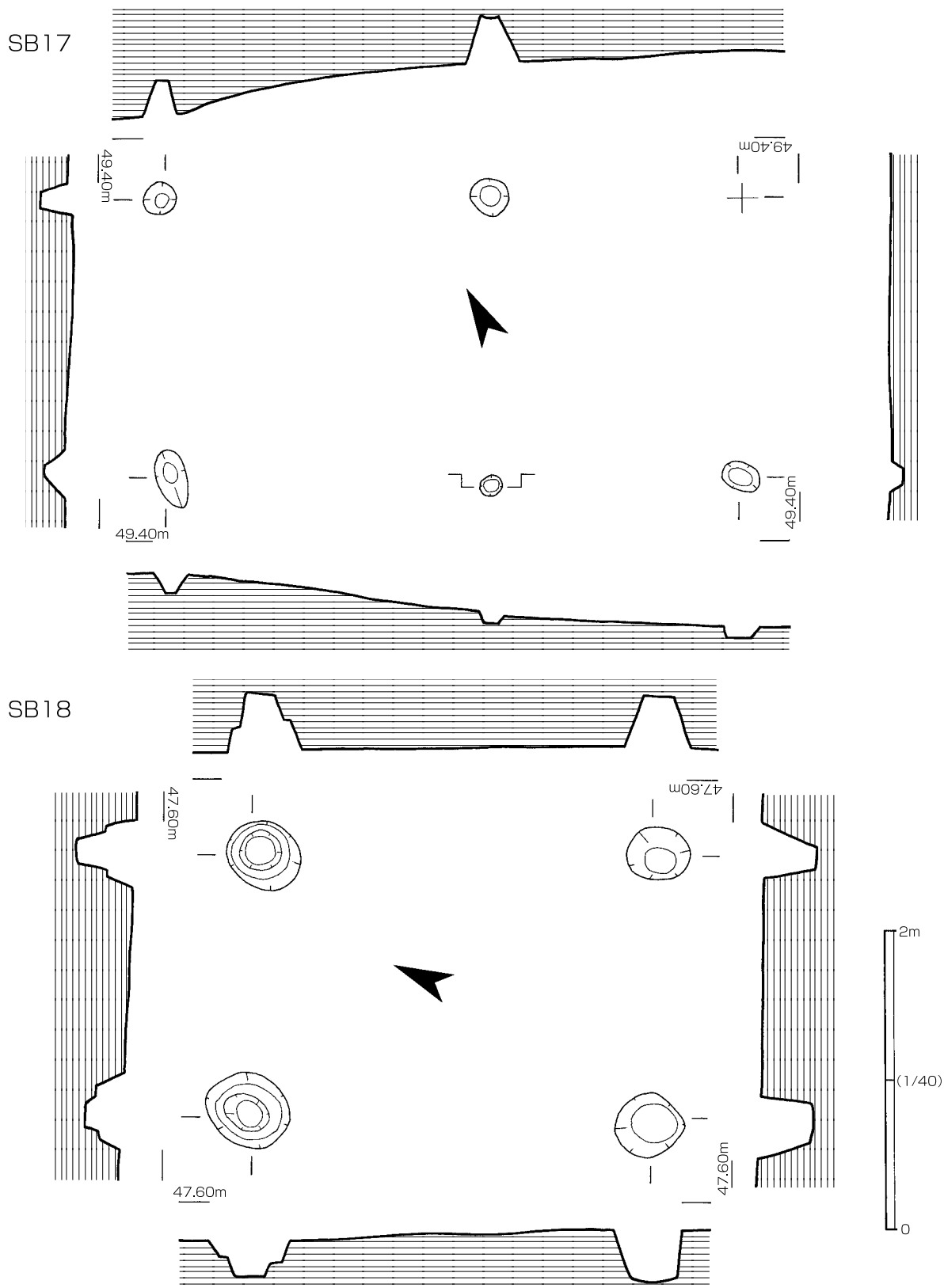
第15図 S B 14実測図



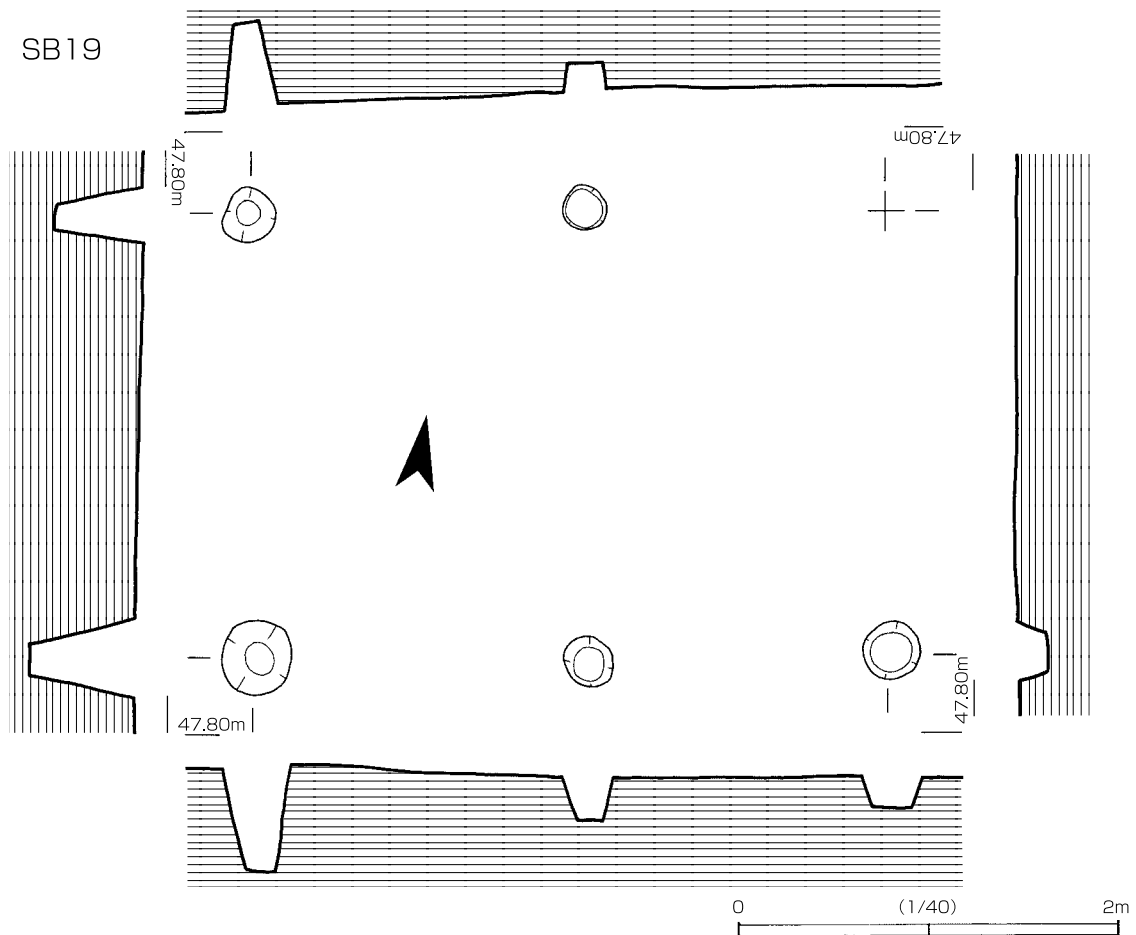
第16図 S B15・16実測図

SB17 (第17図) 2地区の中央北寄りに位置する。東北隅の柱穴1個が確認できなかったが、2間×1間の建物と推定される。棟方向は、 $N61^{\circ}W$ 。桁行長3.8m、梁行長1.8mの建物である。柱穴は、直径16~40cm、深さ8~30cm。

SB18 (第17図 図版8) 3地区の西側に位置する、1間×1間の建物である。棟方向は、 $N24^{\circ}W$ 。桁行長2.6m、梁行長1.8mの規模をもつ建物である。柱穴は、直径32~58cm、深さ26~40cm。北



第17図 SB17・18実測図



第18図 SB19実測図

西隅の柱穴からは、柱支えと思われる根石が検出された。この建物の東側にある、竪穴住居SB1に伴う高床式倉庫の可能性はある。

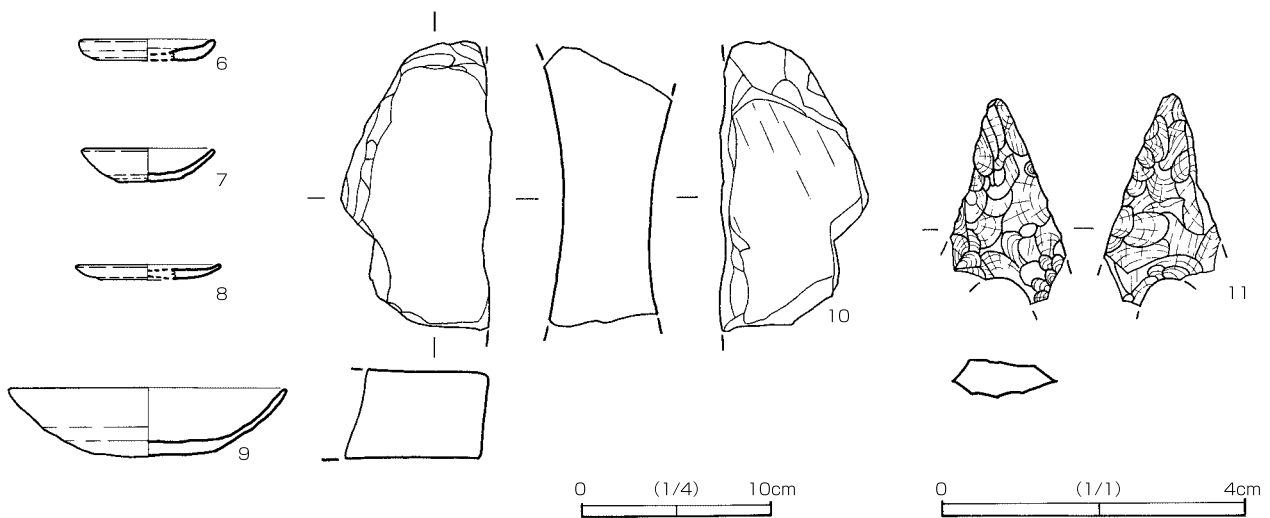
SB19 (第18図 図版9) 3地区のSB1の北側に位置する。北東隅の柱穴は確認できなかったが、2間×1間の建物と推定される。棟方向は、N81°E。桁行長3.3m、梁行長2.4mの規模をもつ。柱穴は、直径22~40cm、深さ16~58cm。

なお、これまで個々にとりあげてきた掘立柱建物群について、全体的にみても、1地区南半におけるSB4・5・7・8は、同時期に並存あるいは比較的近い時期で建て替えられたものと思われる。また、SB6は、SB4か5に伴う付属棟の可能性はある。1地区北側では、5棟の掘立柱建物を復元できたが、周囲には柱痕の残る柱穴がまだあることから、非常に狭い範囲の中で何度も建て替えが行われたものと思われる。

2地区の掘立柱建物群は、北西から南東方向への地山面の緩やかな傾斜に対して、棟方向が平行する形で建てられている。高低差は30~50cmあるが、地山整形の痕跡は認められず、高低差に関係なく、柱の長さで調整するなどして、自然地形をそのまま利用して建てられていたものと思われる。SB14とSB15は、新旧関係は確定できないが、建て替えられたものであると思われる。南東側の調査区外は、後世の水田開発により現状で約2mの段差があり、遺構面は削平を受けているものと思われる。建物群の主体は、この南東側に広がっていた可能性があるものとみられよう。

掘立柱建物出土遺物（第19図 図版16）

6は土師器の皿で内外面ナデ、外面底部に回転糸切り痕。器壁は厚い。1地区のSB5（SP29）から出土。7も土師器の皿で、内外面ナデ、外面底部に回転糸切り痕。器壁は薄く器高は他の土師皿よりも高い。1地区のSB12（SP40）から出土。8は土師器の皿、9は土師器の坏で、ともに内外面ナデ、外面底部に回転糸切り痕。2地区のSB15（SP90）から出土。10は砂岩製の砥石。上下面の摩滅が激しいが、下面にのみ明確な使用痕が残る。1地区のSB13（SP59）から出土。11は、黒曜石の凹基無茎式石鏃。基部は両側とも欠損。残存部の長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重量1.5gを測る。3地区のSB18の床面より出土。



第19図 掘立柱建物出土遺物実測図

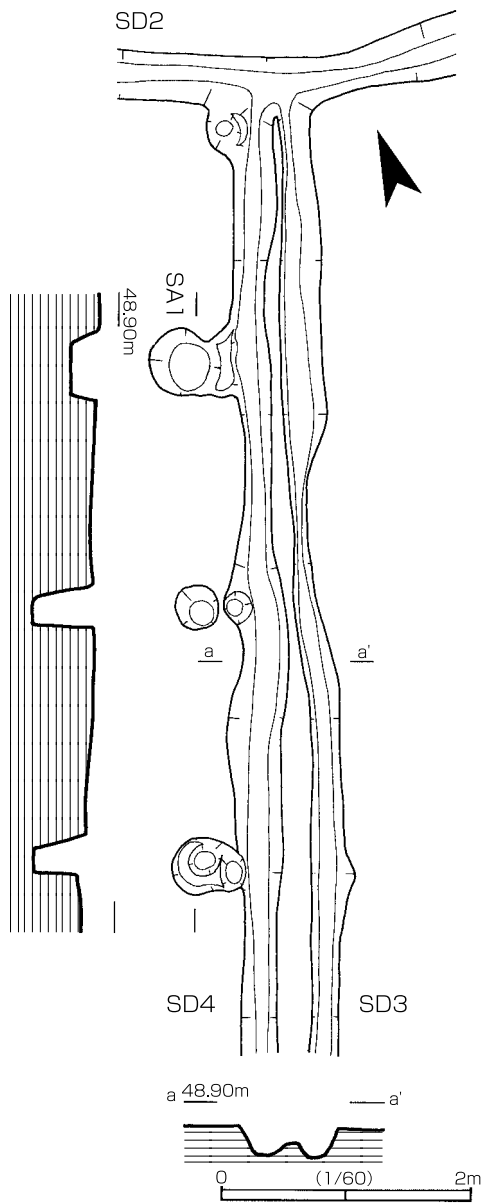
2 溝状遺構と柵列（第3・20図 図版7・9・10）

調査区内から検出された溝は、全部で12条である。そのうちの9条が1地区の南半に集中している。全体的に、後世の耕地化などのため削平が多く、深さは浅い。特に1地区で検出された溝は、掘立柱建物跡群を区画するような形で巡っている。その中で、SD3・4はSA1を伴い、SD2によってSB3・4・5・6の建物群を取り囲んでいる。SD3・4は東側調査区外へと続いており、SB3・4・6が同様に東側調査区外への広がりを含んでいることから、調査区の東側に建物群の主体部が開いているものと推定される。

SD1（第3図） 1地区中央部に位置し、北端部は集石1から始まり、わずかに蛇行しながら南に向かって流れている。幅は26～140cm、深さは7～23cmと全体的に浅い。集石より南側では溝の西側に杭列が並ぶ。南西側の建物群から北端部集石1の北側に広がる湿地帯へ向けての水路跡と思われる。

SD2（第3図 図版9） 1地区中央南西よりの調査区外から始まり、北北東に向け10m走り、SD3・4との合流点で北向きにゆるやかに屈曲している。SD3・4との合流点から10mで途切れる。幅は14～66cm、深さは3～13cm。SD3・4との合流点の南側では、SA2を伴う。SD2の北側から土師器の皿、坏片と瓦質土器の鍋の口縁部と脚部（第21図12・13）が出土した。

SD3・4（第20図 図版10） SD2の南半部と直交し、東南東に約8m走り調査区東端に達する。SD3と4の新旧関係は、SD3が古くSD4によって切られる。SD3の幅は14～66cm、深さ



第20図 SD 3・4.SA 1 実測図

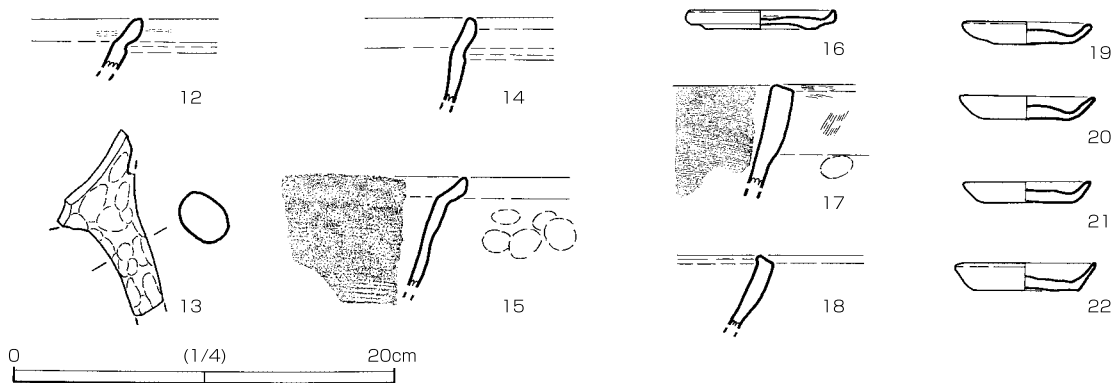
は3～13cm。SD 4の幅は20～46cm、深さは9～19cm。
SD 3から土師質の鍋の口縁部(第21図14・15)、SD 4からは土師器の皿(第21図16)が出土した。

SA 1 (第20図 図版7) 3個の柱穴からなり、
主軸はN22° E。柱間寸法は南西隅から2.0・2.0m。柱
穴の直径は35～45cm、深さは20～40cm、土師器の坏片
が出土。SA 1の南にあるSB 7に付設された柵列と
推定される。SB 7やSD 3・4同様、東側調査区外
へとのびる可能性がある。

SA 2 (第3図 図版7) 3個の柱穴からなり、
主軸はN69° W。柱間寸法は南西隅から2.0・2.2m。柱
穴の直径は35～55cm、深さは35～37cm、土師器の坏片
が出土した。

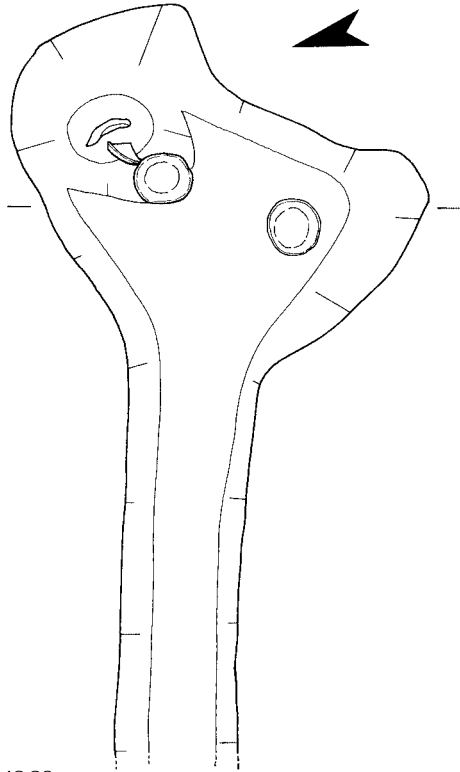
溝状遺構出土遺物 (第21図 図版16)

12は瓦質土器の鍋の口縁部で、内外面ハケのちナデ。
13は足鍋の足。SD 2から出土。14は土師質の鍋の口
縁部で、内外面とも器面剥離が激しく調整は不明。15
も土師質の鍋の口縁部で、外面に指頭圧痕、内面に横
方向のハケメ。SD 3から出土。16は土師器の皿で、
内外面ナデ、外面底部に回転糸切り痕。SD 4から出
土。17は土師質の甕の口縁部で、ハケのちナデ。内面
に斜め方向のハケメ。18は瓦質土器の鍋の口縁部で、
口縁端内部をつまみ出す。SD 8から出土。19～22は
土師器の皿で、内外面ナデ、外面底部に回転糸切り痕。
2地区のSD 10から出土。22のみ底部より直線的に立
ち上がり器壁は薄い。

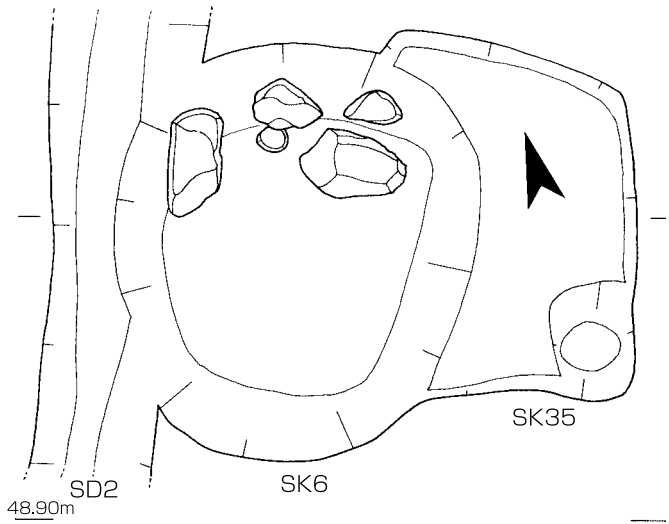
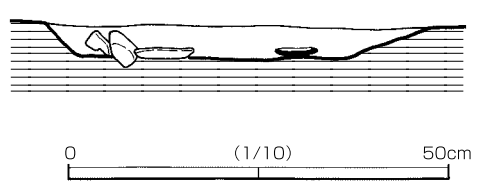


第21図 溝状遺構出土遺物実測図

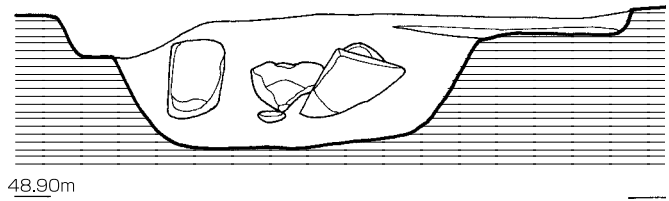
SK4



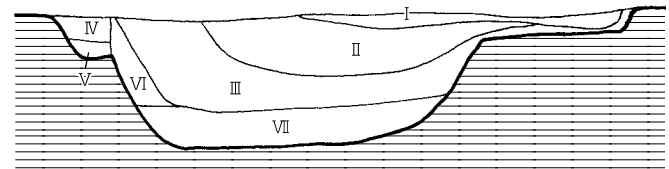
48.80m



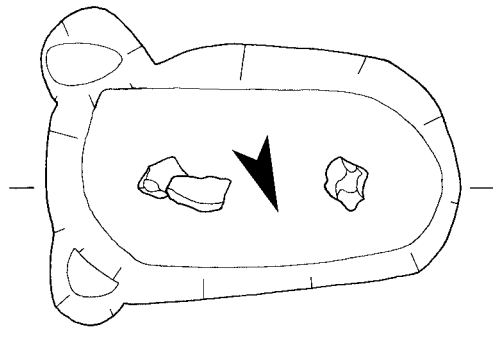
48.90m



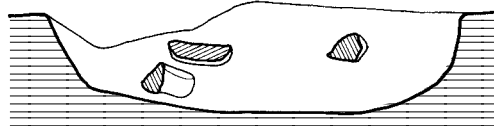
48.90m



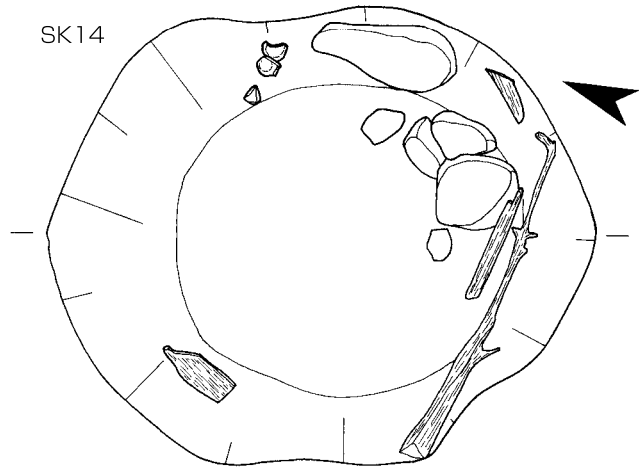
SK5



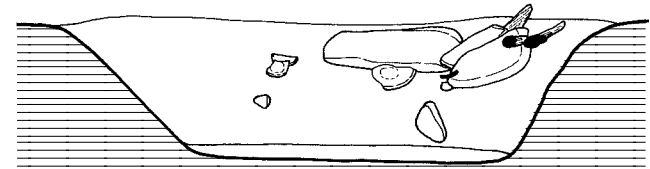
48.90m



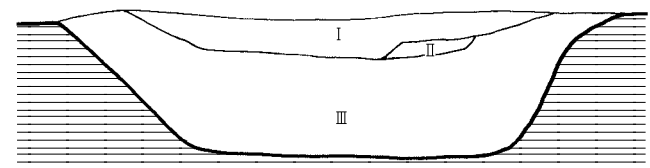
SK14



47.90m



47.90m



土層凡例

- SK6 I 褐色(10YR4/4)粘質土
 II 暗灰黄色(2.5Y4/2)弱粘質土
 III 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土
 IV 黄褐色(10YR5/6)弱粘質土
 V にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土
 VI 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質土
 VII 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土
- SK14 I 暗黄灰色(2.5Y4/2)粘質土
 II 黄褐色(10YR5/8)粘質土
 III 褐灰色(10YR4/1)強粘質土

0 (1/20) 1m

第22図 SK4・5・6・14・35実測図

3 土坑（第22・24～27・29図 図版11）

今回の調査では、36基の土坑を検出した。平面形は、長円形・円形のもの22基、方形・隅丸方形のものが4基、不整形のものが8基である。後世の開発により、上面がかなり削平されたものが多く、深さは平均で約27cm、最も深いものでも78cmであった。全体の約6割の土坑から遺物が出土しており、時期が明らかな土坑については、大半が14～15世紀代のものである。以下、主な土坑について述べる。

SK4（第22図） 1地区の南西部に位置する。西端部でSD2と接する状態で検出された。平面形は不整形。規模は、長軸56cm、短軸40cm。深さは最深部で12cm。土師器の皿（第23図23・24）と坏（第23図25）が出土した。

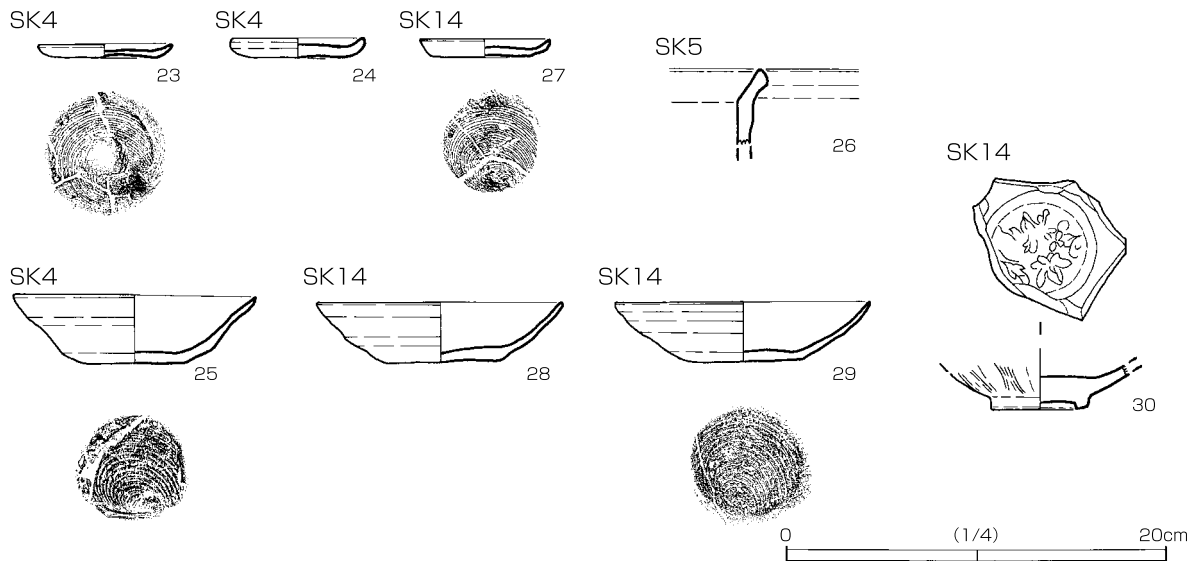
SK5（第22図 図版11） 1地区の南西部に位置する。SD2の北端部と接する状態で検出された。平面形は長円形。規模は、長軸109cm、短軸67cm。深さは最深部で30cm。埋土は、にぶい黄灰色粘質土の単層である。瓦質土器の鍋片（第23図26）と土師器片が出土した。

SK6（第22図 図版11） 1地区の南西部に位置する。西端でSD2を切った状態で検出された。南側にステージ状にSK35をもつ。平面形は長円形。規模は、長軸110cm、短軸95cm。深さは最深部で36cm。埋土は、褐色粘質土、暗灰黄色弱粘質土、灰黄褐色粘質土、暗灰黄色粘質土、黄灰色粘質土の5層である。土師器の皿片と坏片、瓦質土器片が出土した。

SK14（第22図 図版11） 1地区の中央部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸140cm、短軸120cm。深さは最深部で39cm。埋土は、暗黄灰色粘質土、黄褐色粘質土、褐灰色強粘質土の3層である。土師器の皿（第23図27）と坏が2点（第23図28・29）、青磁の椀片（第23図30）が出土した。

1地区土坑出土遺物（第23図 図版17）

23・24・27は土師器の皿、25・28・29は土師器の坏であり、底部に回転糸切りの痕跡を残す。26は瓦質土器の鍋口縁部で、内・外面ともにハケのちナデ。砂粒を多く含む。30は龍泉窯系青磁椀の底部である。色は明緑灰色。削り出し高台で、外面底部以外に釉が施されている。外面に鑄蓮弁文、見込み部分に劃華文をもつ。



第23図 1地区土坑出土遺物実測図

SK16 (第24図) 2地区下段の中央部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸80cm、短軸68cm。深さは、最深部で9cm。土師器の坏片と皿片が出土した。

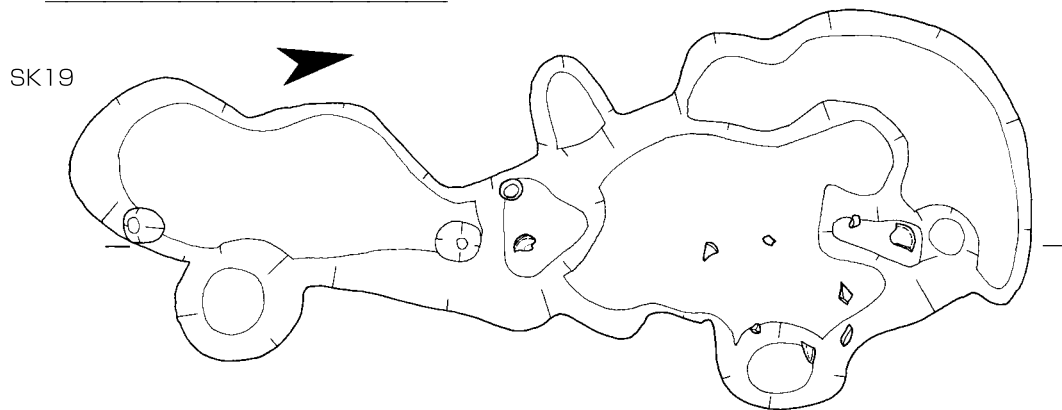
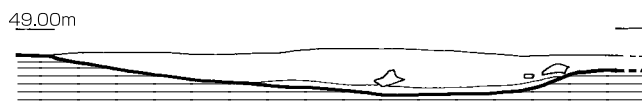
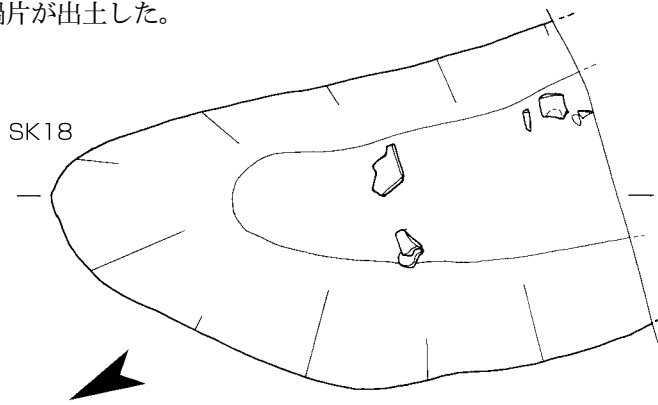
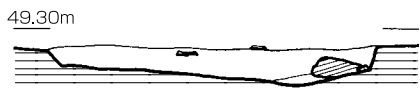
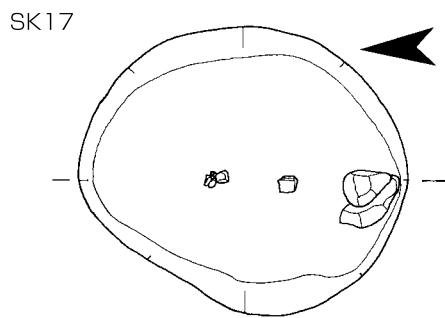
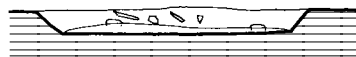
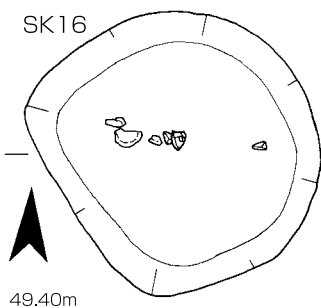
SK17 (第24図) 2地区下段の南西部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸88cm、短軸72cm。深さは、最深部で13cm。土師器の坏片と土師器片、木片が出土した。

SK18 (第24図 図版11) 2地区下段の北東部に位置する。平面形は長円形で、南端部をトレンチによって切られる。規模は、長軸110cm (残存部)、短軸84cm。深さは最深部で17cm。土師器の坏 (第28図31)、瓦質土器の鍋片 (第28図32) が出土した。

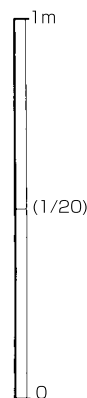
SK19 (第24図) 2地区下段の北東部に位置する。平面形は不整形。規模は、長軸254cm、短軸90cm。深さは最深部で24cm。土師器の皿が2点 (第28図33・34) 出土した。

SK20 (第25図) 2地区下段の北東部に位置する。平面形は不整形で、3個の柱穴に切られている。規模は、長軸54cm、短軸33cm。深さは最深部で11cm。土師器の皿 (第28図35) が出土した。

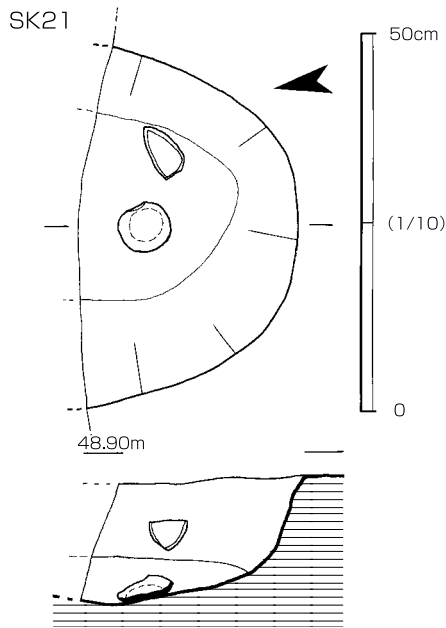
SK21 (第25図) 2地区下段の北東部に位置する。北半分をトレンチによって切られており、平面形は推定で長円形。規模は長軸29cm (残存部)、短軸47cm。深さは、最深部で17cm。土師器の皿 (第28図36) と瓦質土器の鍋片が出土した。



49.10m

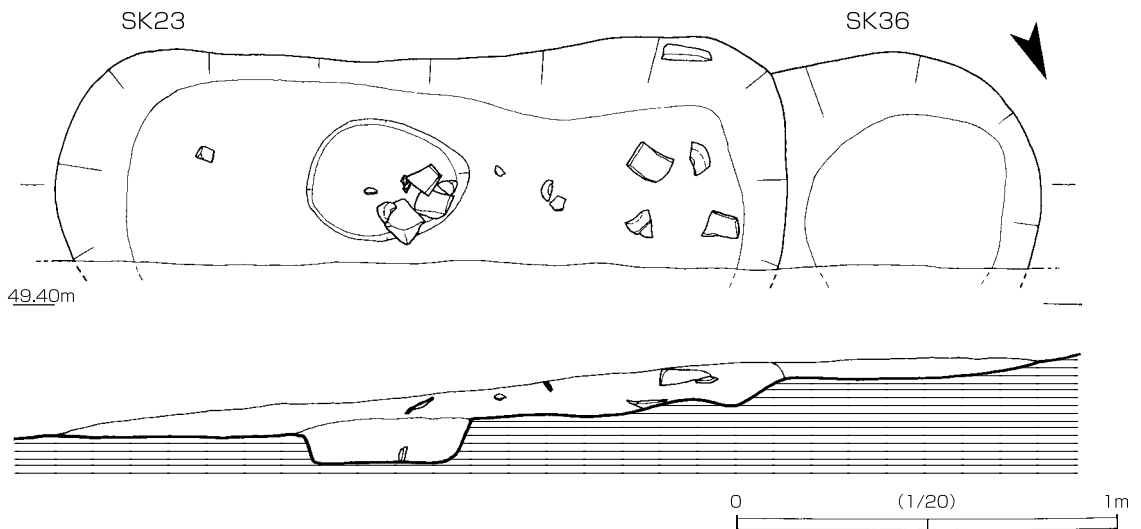
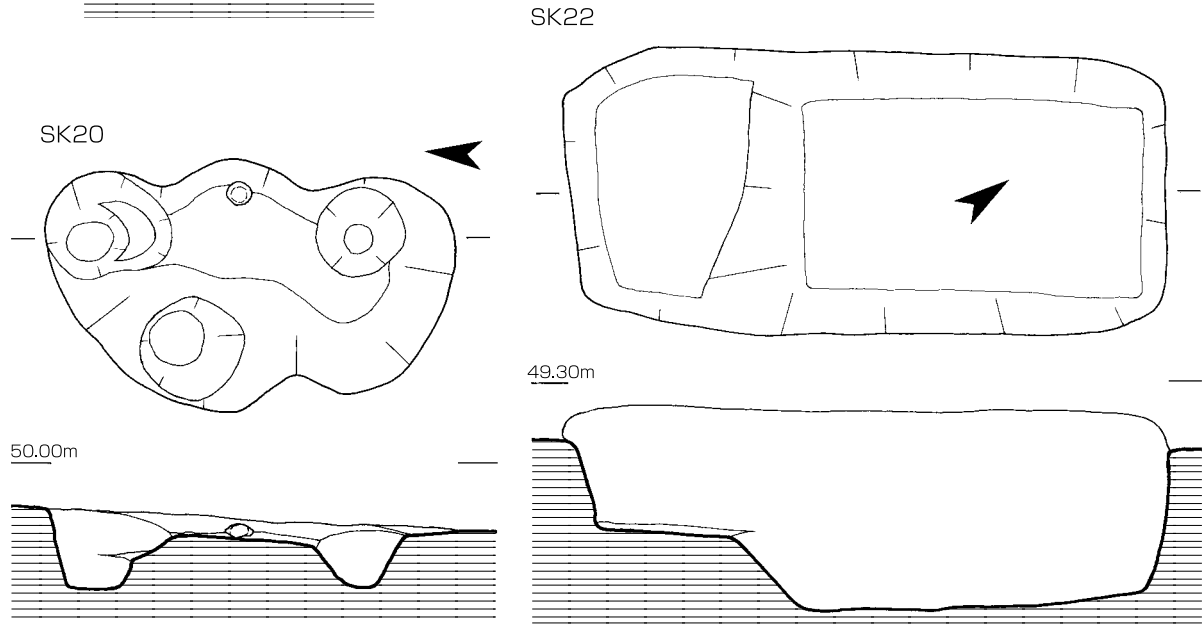


第24図 SK16・17・18・19実測図



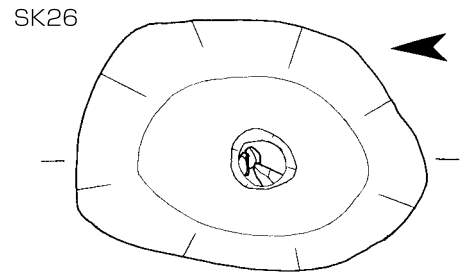
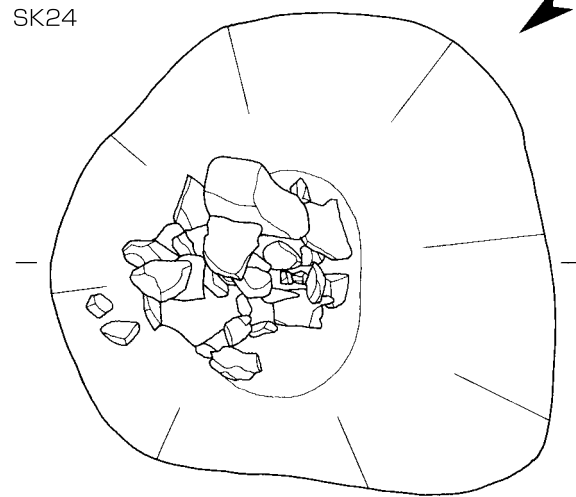
SK22 (第25図 図版11) 2地区下段の南西部に位置する。平面形は長方形。規模は、長軸160cm、短軸75cm。深さは最深部で57cm。南側でテラス状の段をつくり床面となる。埋土は、褐色粘質土に灰オリーブ色土が少量混じる。土師器の坏片が出土した。

SK23 (第25図 図版11) 2地区下段の南西部に位置する。西端部でSK36を切り、中央部にSP80が重複する。北半分をトレンチにより切られており、平面形は推定で隅丸長方形。規模は、長軸260cm、短軸60cm(残存部)。深さは最深部で25cm。土師質の鍋片が2点(第28図37・38)と土師器の坏片が出土した。

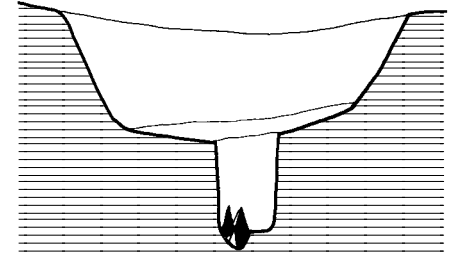


第25図 SK20・21・22・23・36実測図

SK24(第26図 図版11) 2地区下段の南西部に位置する。平面形は不整円形。規模は、長軸140cm、短軸125cm。深さは最深部で78cm。遺物は出土しなかった。



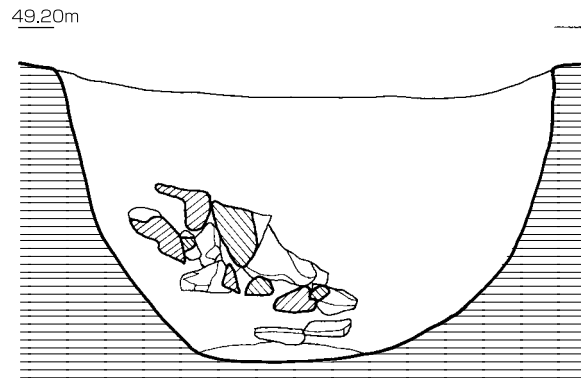
49.40m



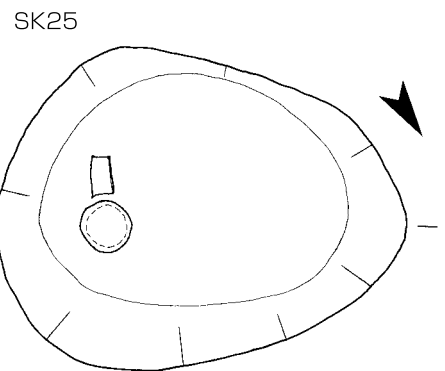
0 (1/20) 1m

第26図 SK24・26実測図

SK25 (第27図) 2地区下段の北東部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸54cm、短軸42cm。深さは最深部で8cm。北西から南東に向けて緩やかに傾斜する。土師器の皿(第28図39)が出土した。

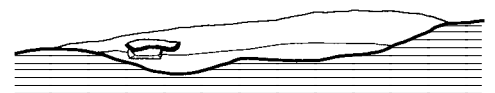


49.20m



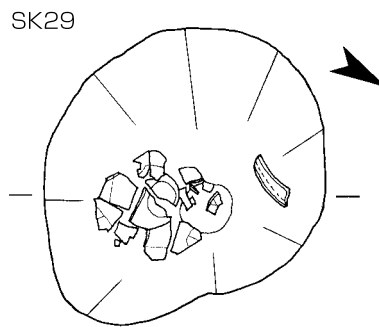
SK25

48.90m



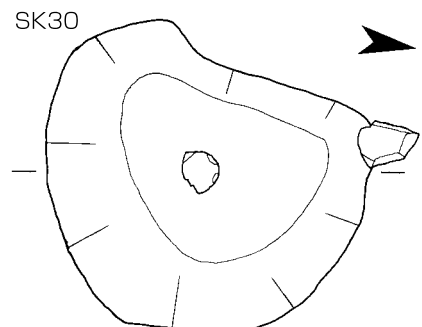
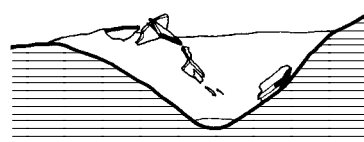
SK26 (第26図) 2地区下段の北東部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸91cm、短軸65cm。深さは最深部で34cm。中央部に、柱痕をもつ柱穴を有する。遺物は出土しなかった。

SK29 (第27図 図版11) 2地区下段の中央部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸43cm、短軸35cm。深さは最深部で14cm。石鍋の口縁片(第28図40)と土師器の坏が出土した。



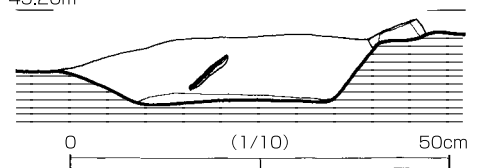
SK29

49.30m



SK30

49.20m



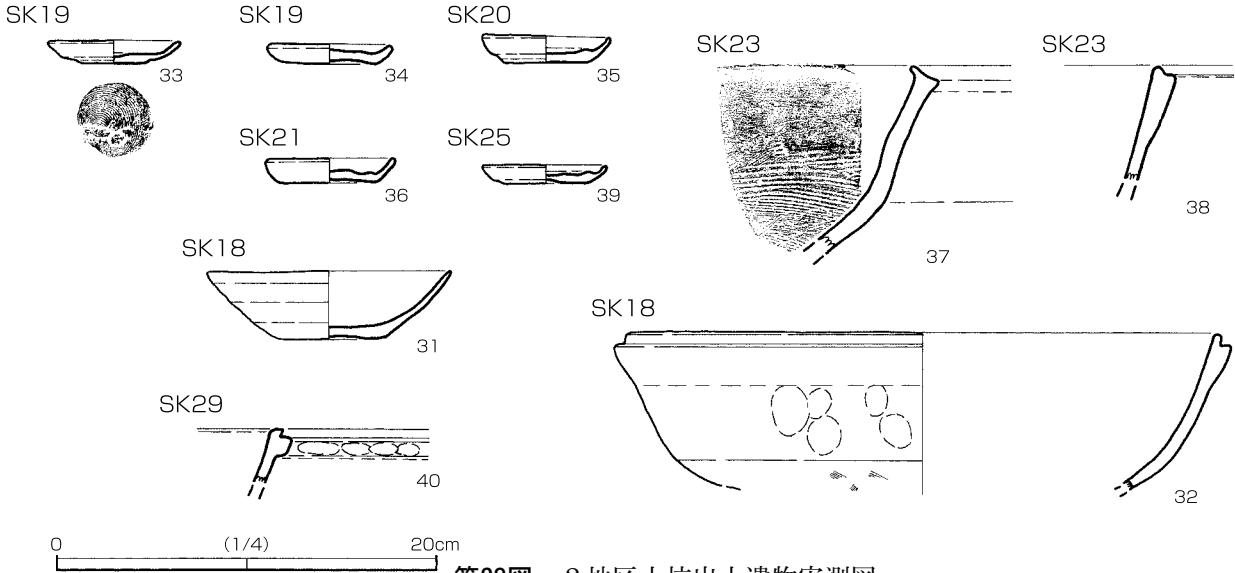
0 (1/10) 50cm

SK30 (第27図) 2地区下段の南西部に位置する。平面形は長円形。規模は、長軸43cm、短軸40cm。深さは最深部で9cm。土師器の皿が出土した。

第27図 SK25・29・30実測図

2 地区土坑出土遺物 (第28図 図版17)

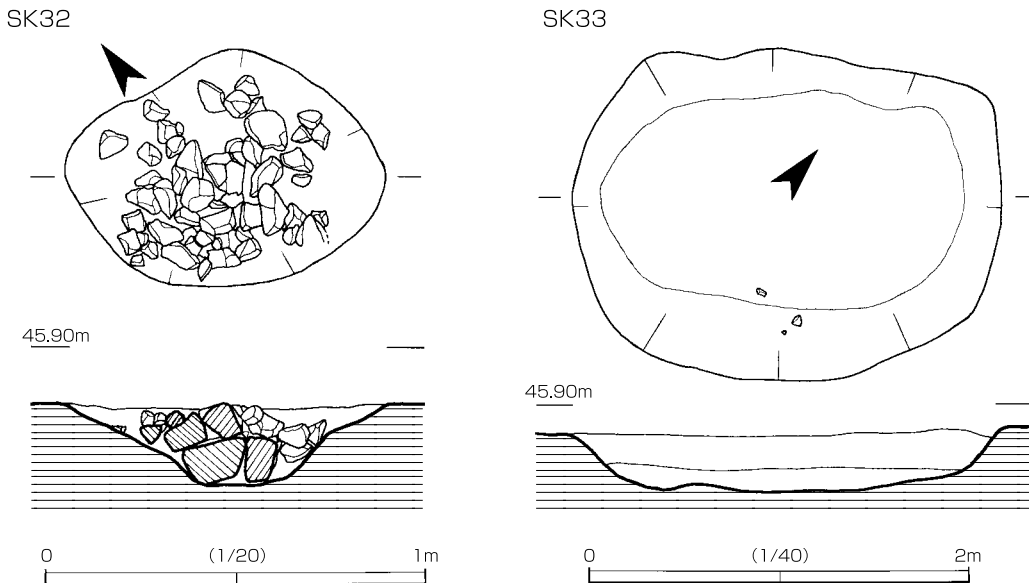
33・34・35・36・39は土師器の皿、31は土師器の坏であり、底部に回転糸切りの痕跡を残す。32は瓦質土器の口縁部を含む鍋。内外面ともにハケのちナデ。外面中央部に指頭圧痕がみられる。37・38は土師質の鍋の口縁部。37は口縁端部がわずかに内傾している。内面は口縁に近い部分は横ナデ、くびれ部より下はハケ調整。外面はハケのちナデ。38は、内外面ともにナデ。40は、石鍋の口縁部。表面が研磨されているが、突帯部にノミ痕が残る。



第28図 2地区土坑出土遺物実測図

SK32・33 (第29図) これらの遺構は、3地区東端部に位置する。後世に削平を受けて底面近くが残っている状態と思われる。埋土にこぶし大前後の礫を多く含む共通した特徴をもつ。

SK32の平面形は長円形。規模は、長軸85cm、短軸62cm。深さは最深部で22cm。遺物は出土しなかった。SK33の平面形は長円形。規模は、長軸225cm、短軸175cm。深さは最深部で34cm。埋土は、灰色粘質土に、明褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土が混ざっている。陶器片、足鍋の足、挿鉢片、土師器片が出土した。



第29図 SK32・33実測図

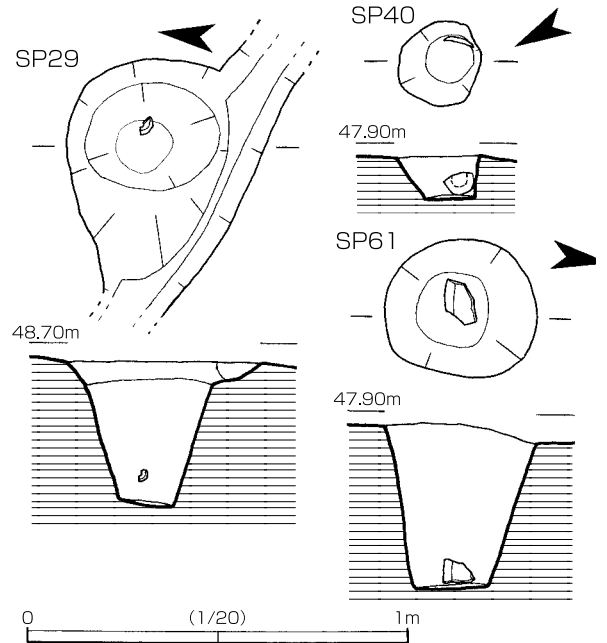
4 柱穴（第30・32図 図版12）

今回の調査では、約450個の柱穴が検出された。特に1地区の北東部および2地区の下段に集中している。全体の約2割の柱穴から遺物が出土している。出土遺物により、ほとんどの柱穴は、14～15世紀代に属するものと推定される。以下、遺物の出土状況に特徴のあるものについて述べる。

SP29（第30図 図版12） 長径60cm、短径42cm、深さ38cmの長円形の柱穴である。SD8を切る状態で検出された。土師器の皿（第19図6）が出土した。この柱穴は、SB5を構成する。

SP40（第30図 図版12） 長径23cm、短径21cm、深さ12cmのほぼ円形の柱穴である。土師器の皿（第19図7）が出土した。この柱穴は、SB12を構成する。

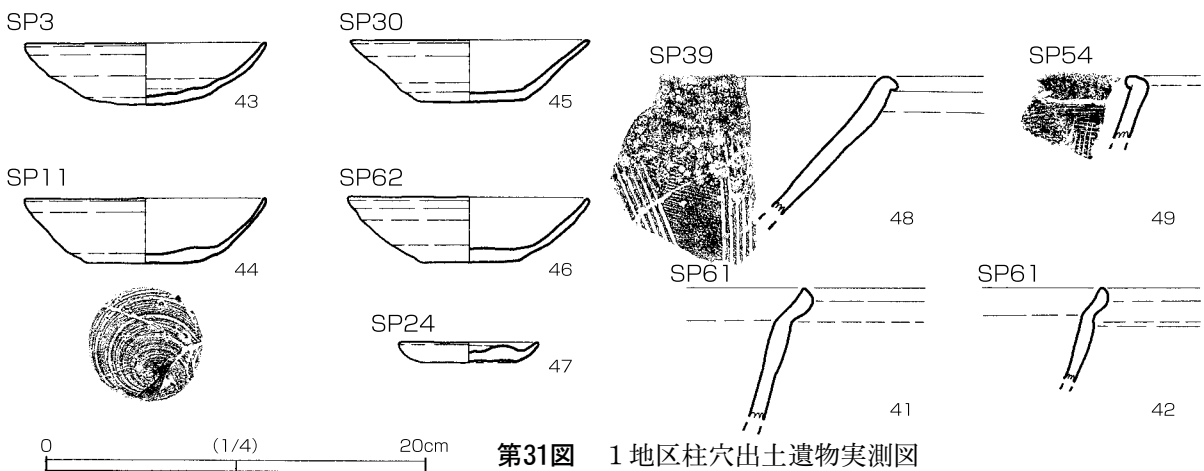
SP61（第30図 図版12） 長径40cm、短径37cm、深さ44cmのほぼ円形の柱穴である。柱穴の上部に、直径約30cm、厚さ約10cmの円盤状の石が柱穴をふさぐような状態で検出された。柱穴の底部から土師質の鍋片（第31図41）、瓦質土器の鍋片（第31図42）が出土した。石および土器の出土状況から、祭祀に伴う遺構である可能性もある。



第30図 SP29・40・61実測図

1地区柱穴出土遺物（第31図 図版17）

41は土師質、42は瓦質土器の鍋である。内外面ともにハケのちナデ。口縁部はやや外反する。43・44・45・46は土師器の坏である。内外面ともにハケのちナデ調整。底部に回転糸切りの痕跡を残す。47は土師器の皿である。ナデ調整で底部回転糸切りの痕跡を残す。器壁が厚く、口縁部の立ち上がりが低い。48は瓦質、49は土師質の挿鉢である。内面はハケ調整のち卸目。外面はハケのちナデ。



第31図 1地区柱穴出土遺物実測図

SP64（第32図 図版12） 長径24cm、短径22cm、深さ29cmのほぼ円形の柱穴である。北東側の柱穴と接する状態で検出された。土師器の皿底部（第33図51）と土師器片が出土した。

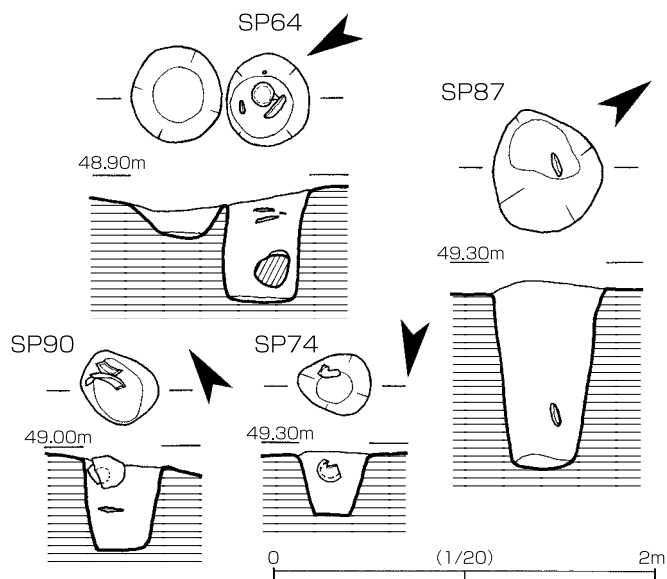
SP74（第32図 図版12） 長径19cm、短径16cm、深さ16cmの長円形の柱穴である。土師器の皿（第33図52）が出土した。

SP87 (第32図 図版12) 長径33cm、短径29cm、深さ49cmのほぼ円形の柱穴である。SD11を切った状態で検出された。土師器の皿(第33図50)が出土した。

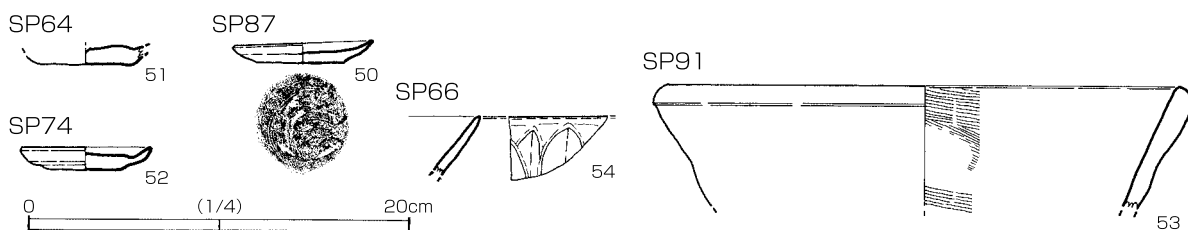
SP90 (第32図 図版12) 長径21cm、短径17cm、深さ24cmの長円形の柱穴である。土師器の皿(第19図8)と坏(第19図9)が出土した。この柱穴は、SB15を構成する。

2・3地区柱穴出土遺物(第33図 図版18)

50・51・52は土師器の皿である。ナデ調整で底部回転糸切りの痕跡を残す。底部が厚い共通した特徴を持つ。53は土師質の鉢である。内面はハケのち横ナデ。外面はハケのちナデ。54は龍泉窯系青磁碗口縁片である。色は明緑灰色。内外面とも釉が施してあり、外面には鎗蓮弁文をもつ。



第32図 SP64・74・87・90実測図



第33図 2・3地区柱穴出土遺物実測図

5 遺物包含層

① 1地区の遺物包含層(第3図 図版14)

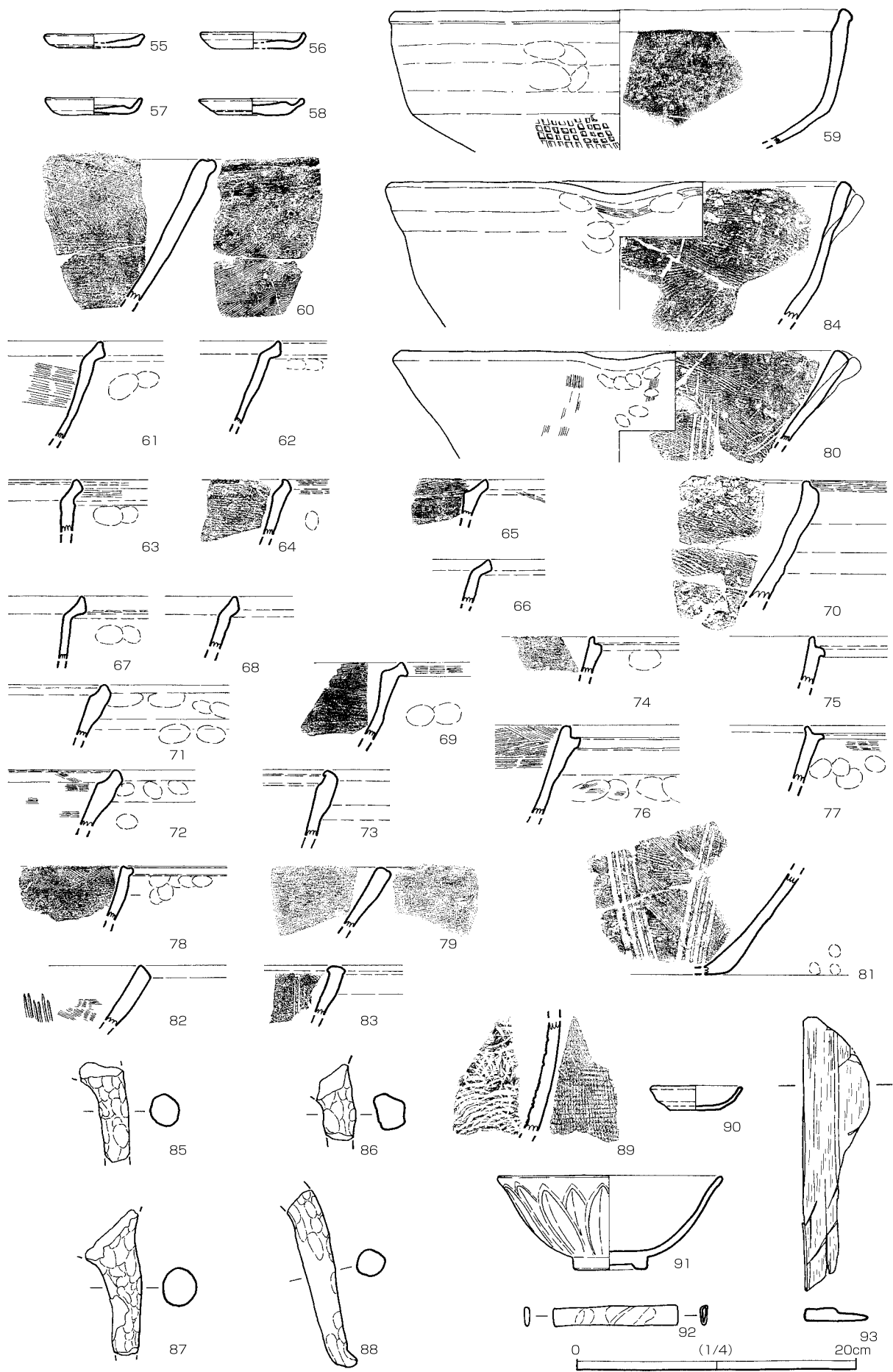
1地区の北部では、河川の淀みもしくは灌漑用の溜池であったと推定される粘質土層が検出された。約500㎡にわたるこの層の下に周辺の遺構面が潜り込んでおり、遺構面を辿りながらこの層を掘り込んだところ、縁辺部においては数多くの遺物が出土した。遺物は全て粘質土層下の遺構面直上において検出され、さらに同じ面において杭列がこの層の東端に沿って確認された。

粘質土層は暗灰黄色の上層と黒褐色の中層、青灰色の下層に大きく分けられ、上層はここにあった淀みの上に水田を開発した時の耕土であろうと思われる。出土した遺物は14～15世紀代のものが中心であり、水田の開発は近世以降に行われたと考えられる。

1地区遺物包含層出土遺物(第34図 図版18・19)

55～58は土師器の皿である。口径6.8～7.4cm、器高1.0～1.2cm。内外面にナデを施しており、いずれも底部に回転糸切り痕が認められる。

59～79は鍋であるが、このうち60・62～64・70・73・76は土師質であり、その他は瓦質土器と思われる。59は内面に横方向のハケメが残り、口縁部とともにナデ調整を施す。外面は指頭圧痕が顕著に認められ、底部には格子目叩きを施す。60は外面に炭化物が付着するが、外面上部に指頭圧痕、全体



第34图 1地区遺物包含層出土遺物実測図

にハケメ、内面下半に回転ナデが明瞭に認められる。61は内面にハケを施したのちナデ調整、外面を指頭押圧のちナデ調整している。62は口縁近くに指頭圧痕が見られ、内外面ともハケのちナデ調整、口縁部はナデ調整している。63～65は内外面ハケのちナデ調整、63・64は外面に指頭圧痕が認められ、64は内面のハケメが明瞭に残る。66は内外面ともに剥離が激しく調整は不明である。67～69は内面にハケ、外面にハケのちナデ調整を施し、67・68は口縁部にナデ、67・69は外面に指頭圧の痕跡が残る。70は片口鍋である。内面にはハケメが残り、外面は剥離が著しいものの指頭押圧、ハケおよびナデ調整を施した痕跡がある。71・72は内外面ともハケ調整のちナデを施しており、外面には指頭圧痕が認められる。73は内面にハケ調整のちナデ、外面にナデ調整を施す。74～77はいずれも豊前系の特徴を持つ鍋もしくは釜である。いずれも口縁部にナデ、内外面にハケのちナデ調整を施すが、74・76は内面のハケメが顕著に残り、74・76・77は外面に指頭圧痕が残る。78は内面にハケのちナデ調整、外面に指頭押圧のちナデ調整を施す。79は口縁部に貼り付けに伴う指頭圧痕が残り、内外面にハケのちナデ調整を施す。

80～83は播鉢である。80は片口の口縁から胴部にかけて、81は胴部から底部にかけての破片で、同一個体かと考えられる。いずれも黄褐色の胎土を持ち、内面にハケメと卸目が明瞭に残る。外面は指頭圧による凹凸が顕著で、ハケメがわずかに残り、口縁とともにナデ調整を施す。82・83は内面に卸目があり内外面ハケのちナデ調整を施していると思われるが、外面のハケメは不明瞭である。播鉢はいずれも土師質であるが、82が軟質である以外は比較的硬質といえる。

84は瓦質土器の片口鉢である。内面にハケ、外面にナデ調整を施し、片口の部分に指頭圧痕が残る。

85～88は鍋の脚である。全体に指頭押圧を施したのちナデによって調整している。

89は須恵器甕の胴部と思われる破片である。内面の当て具痕と外面の擬格子目叩きの痕が明瞭に残る。

90は陶器の皿である。口径6.4cm、器高1.8cmと小さく、灰色に焼きしめられており、無釉である。内外面にナデ調整が施されている。

91は龍泉窯系の青磁碗である。口径16cm、器高6.8cmで、外面に鎬蓮弁文が刻まれ、高台の内側と接地面を除いて釉が施されている。色調はオリーブ褐色である。

92は銅製の小柄の柄である。長さ9cm、幅1.4cm、厚さ0.5cmで、3箇所折れ曲がっている。

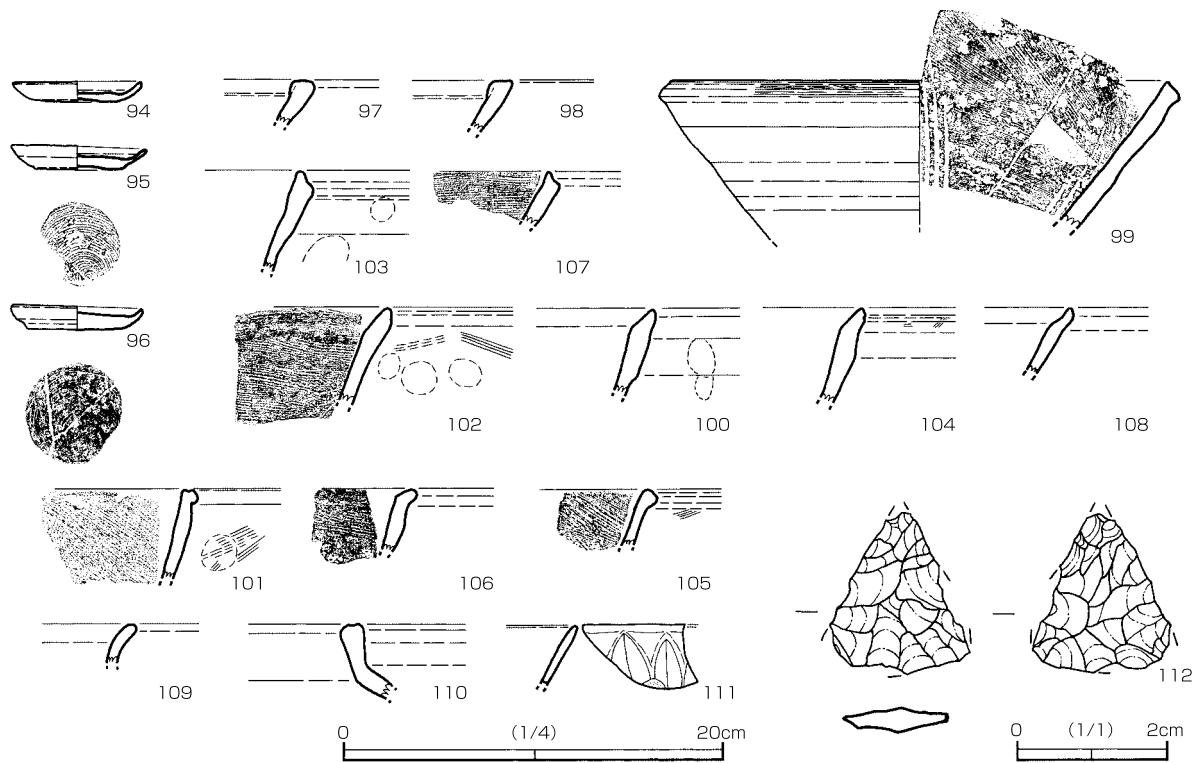
93は木製の味噌籠である。長さ20cm、幅4.8cm、厚さ約1cmの片刃の籠で、刃部は長さ約9cm、厚さ約0.5cmで半円形をしている。

② 2地区の遺物包含層（第4図 図版15）

2地区下段の中央部北寄り、東に傾斜した遺構面に約50㎡にわたって暗褐色の層が広がっており、この層から14～15世紀代のものと考えられる遺物が出土した。遺物包含層は暗褐色の上層と褐色の下層に分類することができ、下層面とさらにその下の面から柱穴、土坑、溝などの遺構が検出された。

2地区遺物包含層出土遺物（第35図 図版20）

94・95・96は土師器の皿である。口径6.6～7.1cm、器高1.1～1.3cmで、内外面にナデ調整を施しており、底部に回転糸切り痕を残す。97・98・99は瓦質の播鉢である。97・98はナデ調整を施しているが、98はハケメが残る。99は内面にハケメと卸目が明瞭に残り、外面にハケのちナデ調整を施してい



第35図 2地区遺物包含層出土遺物実測図

る。

100～108は鍋であるが、このうち100と104は瓦質土器で、その他は土師質である。103は外面に貼り付け突帯に伴う指頭圧痕が見られ、内外面にハケのちナデ調整を施す。107は内面にハケ、外面にナデを施す。102は内面にハケ、外面に指頭圧痕が見られ、口縁から外面にかけてハケのちナデ調整を施す。100・104はハケのちナデ調整を施し、100は外面に指頭圧痕が残る。108は内外面ナデ調整を施す。101は内面をハケ調整、外面は指頭押圧のちハケ及びナデ調整を施し、玉縁状の口縁はナデでひねり出している。106はやや剥離が進んでいるが、内面をハケ調整、外面と口縁部はナデで調整している。105は内面をハケ調整、外面をハケのちナデ調整し、口縁をナデでひねり出している。

109は陶器の壺の口縁と思われる。内外面に横ナデ調整が認められる。

110は瓦質の壺である。内外面を横ナデ調整している。

111は龍泉窯系青磁碗の口縁である。外面に鎬蓮弁文、全体に釉が施され、色調は明緑灰色である。

112は打製石鎌である。平基無茎式で石材はチャートである。基部と右側縁部を欠損。残存部の長さ2.0cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量0.9gを測る。

6 石組遺構（第36図 図版13）

3地区中央区東寄りに位置する。掘り方の平面形は270cm×130cmの長方形をなし、軸方位はN20°Wである。灰色の埋土の下から第36図①のような不規則に落ち込んだ集石が検出され、遊離した石を除去していくと第36図②のような長方形の石組みが確認された。深さ40cmの挿鉢状の土坑の壁に数cm～30cm大の石を敷き詰めているが、底面の敷石は確認できなかった。石組の長さは内法で約150cm、幅は20～30cmである。平面形および規模などから子供か女性の埋葬跡であると推定される。中世に見られ

るような屋敷地内に作られた墓地である可能性も考えられるが、後世の削平のためか周辺に遺構が乏しく、遺物も一切出土していないため、確証を得るには至っていない。

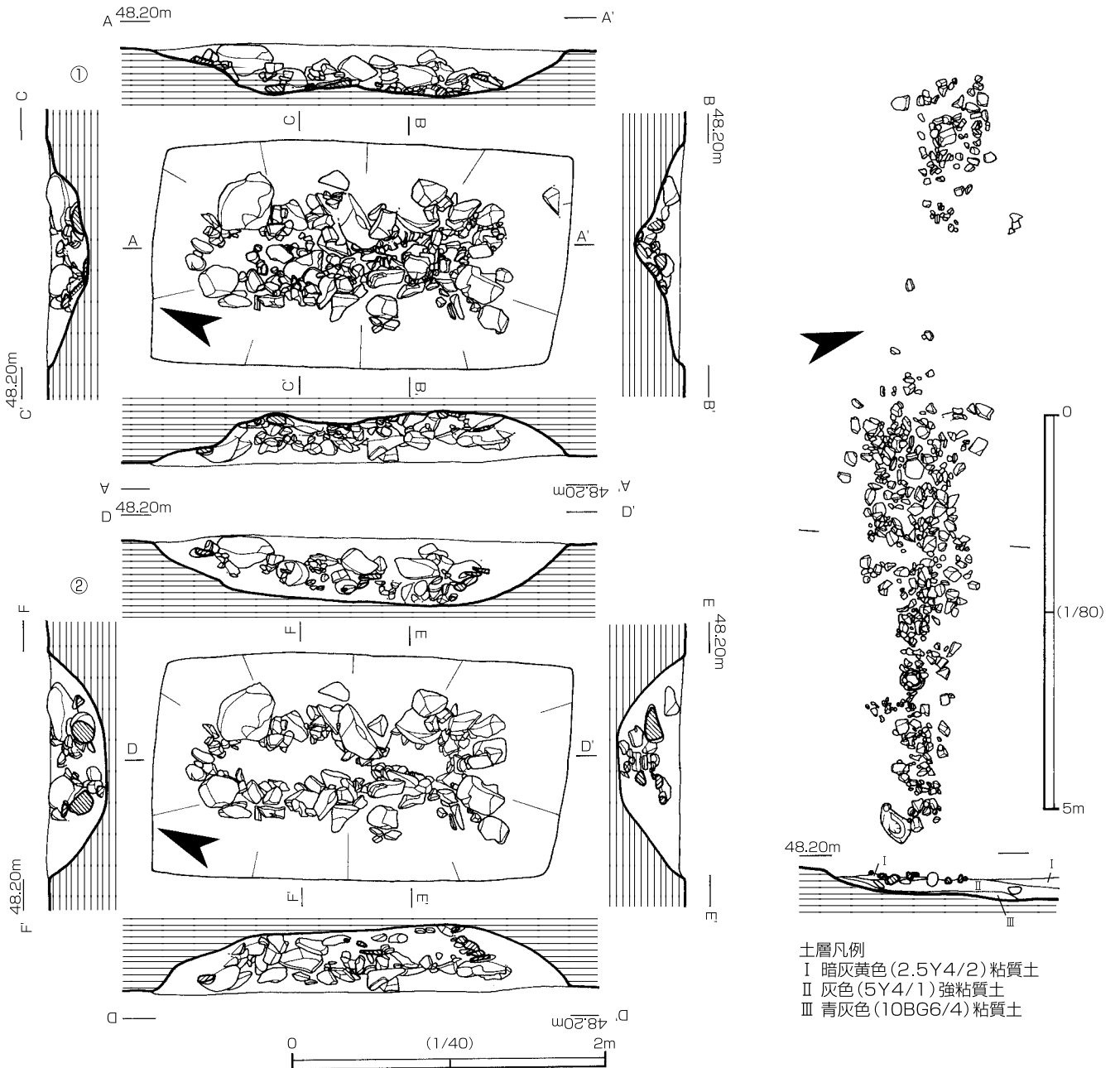
7 その他の遺構

① 集石遺構 1 (第37図 図版13)

1地区遺物包含層南側のSD1と接する地点において検出された。湿地帯の縁辺に沿って東西に長く伸びている。長さ9m余り、最大幅は1m80cmあり、湿地帯の外縁上位に薄く並べられていることから、生活上の足場を確保する敷石とも考えられる。遺物は出土していない。

② SX1 (第38図 図版13)

3地区中央区下段で検出された。直径80cm、深さ60cmほどの円形の土坑に10~20cm大の石を詰めており、図面中の網掛けで示した範囲は被熱を受けて赤黒く変色している。遺物は出土していない。



第36図 石組遺構実測図

第37図 集石遺構 1 実測図

8 遺構外出土遺物 (第39図 図版21)

以下にとりあげるのは、トレンチや盤土、客土中より出土した遺物および遺構面検出中に出土した遺物である。

113・114は鍋の口縁である。113は土師質の鍋で、1地区北端の盤土中より検出された。内外面を回転ナデ調整しており、外面に指頭圧痕が残存する。114は瓦質土器の鍋で、1地区の遺構面検出の際に出土した。内外面を回転ナデ調整している。

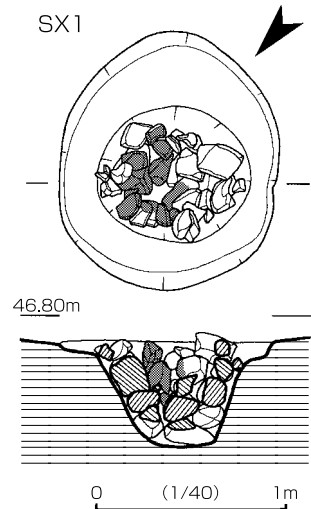
115～118はいずれも1地区の遺構面検出の際に出土した青磁である。115は碗の口縁で、内面に劃華文、内外面に釉が施されている。色調は灰オリーブ色である。116は碗の底部である。削り出し高台の接地面から内側を除いて内外面とも釉が施されている。色調はオリーブ灰色である。117は碗の口縁である。外面に鎬蓮弁文、内外面に釉が施され、色調はオリーブ灰色である。118は壺の口縁である。内外面に釉を施しており、肩部との接合面にも釉の流れ込みが認められる。色調は明オリーブ灰色である。

119は3地区の遺構検出の際に出土した凹石である。長径8.7cm、厚さ3.3cmで、表裏両面の中央部を中心に敲打痕が明瞭に確認できる。石材は砂岩である。

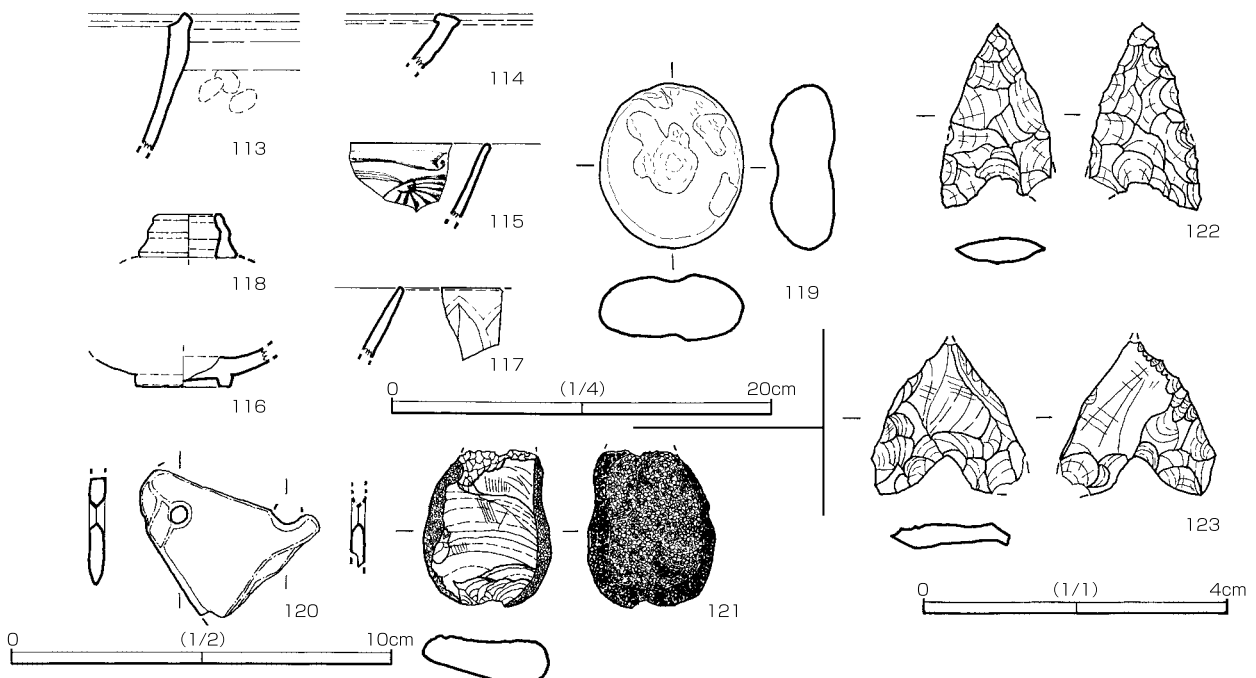
120は3地区のトレンチ調査の際に遺構面付近で検出された石庖丁である。二つの穿孔を持ち、左下に刃部を持つ。石材は安山岩である。

121は松脂岩（黒曜石）である。3地区の客土層から検出された。重量は19.9gを測る。

122と123は打製石鏃である。122は2地区の遺構面検出の際に出土した。凹基無茎式で石材は安山岩。基部の片側を欠損。残存部の長さ2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量0.9gを測る。123は3地区の遺構面検出の際に出土した。凹基無茎式で石材は黒曜石。先端部と基部の片側は欠損。残存部の長さ2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重量1.2gを測る。



第38図 SX 1 実測図



第39図 遺構外出土遺物実測図

IV まとめ

下太田遺跡は、太田川と粟野川が合流する少し手前の、太田川左岸の河岸段丘の小高いところに所在する。豊北町内の周知の遺跡としては、土井ヶ浜遺跡をはじめとする弥生時代の遺跡が、響灘沿岸部を中心として数多く存在する。また、田耕地区内においては、下太田遺跡の北東に甲殿遺跡がある。しかし、中世を中心とする遺跡の発掘調査報告および、内陸部においての本調査は非常に少なく、甲殿遺跡からみて粟野川対岸の肥後屋敷遺跡が知られているくらいである。今回の発掘調査の結果、竪穴住居1軒と住居に伴う遺物として、弥生時代末～古墳時代初期頃の土器・石製品が出土した。また中世の掘立柱建物18棟とこれらに伴う柵列2条、溝状遺構12条、土坑34基等の遺構と土師器、土師質土器、瓦質土器等の遺物が出土した。これらのことから、下太田遺跡周辺では、弥生時代から人々の生活が営まれはじめ、中世を中心として栄え現在に至るまで、人々の生活が連続と営まれてきたことが確認された。

これまで弥生時代における当地域の交流ルートについて、粟野川沿いの甲殿遺跡の調査報告では、山陰側から粟野川を通り、豊田盆地を抜け木屋川沿いに田部盆地の下七見遺跡までの文化流入経路と、滝部盆地を通して土井ヶ浜遺跡との文化交流経路を指摘している。今回の下太田遺跡での弥生時代の遺構、遺物が確認されたことは、これらのルートとは別に、田耕盆地より太田川沿いに遡り、宇賀を抜けて響灘へ至る経路が存在したことを新たに示唆するものである。田耕と土井ヶ浜の集落の間で現在も7年に一度行われている浜出祭という祭事の他に、現在では行われなくなっているが、宇賀本郷までの荒津の浜出祭という祭事があったということも、このことを間接的に裏付けているものと思われる。

下太田遺跡から出土した遺物のほとんどが、土師器の皿と坏、土師質あるいは瓦質の鍋、釜である。土師器の皿と坏類について、皿も坏も底部に回転糸切り痕がすべて残っていることから11世紀以降のものである。坏の口縁部は尖っており総じて器壁は薄い、大内氏館跡から出土する直線的な外開きのタイプよりも古い様相を呈し、吉母浜遺跡から出土したタイプに類似している。坏の口径は12～13cm、器高3～4cm、口縁部が尖るという形態から、吉母浜遺跡の編年にあてはめると、Ⅱ類～Ⅲ類の間に対応する。皿については、口径に対して底径が広いものが多い。口径7.2cm以下、器高1.2cm以下のものが約8割を占める。総じて底部は厚く、底部よりやや内湾気味に短く立ち上がる。これらは、皿のⅢ類～Ⅳ類に対応する。坏も皿も色調は灰白色系と黄橙色系で、77だけが赤橙色であった。これらの土師器は、大まかではあるが14～15世紀代を中心とするものとみられる。

土師質、瓦質の鍋、釜類は、大きく2つのタイプに分類される。Aタイプは、山口県域を中心として出土例の多い足鍋である。防長型と呼ばれている型で、8は瓦質で底部に格子叩き痕を持ち口縁は短く体部は脚部付近で屈曲する。また、脚部で先端まで残存していたのは、1点のみで、先端部がわずかに屈曲する。他の口縁部は、一部口縁端が折り返されるものがあるが、やや厚手で短く、わずかに内湾気味である。これらは、防長の足鍋の編年のⅡ型～Ⅲ型を中心とするものであり、時期は14～15世紀代に比定されるものである。

Bタイプは口縁部に羽釜のような鏝状に肥厚した特徴を持つもので、Aタイプの鍋類とは違う形態を持つ。下太田遺跡では、これらの鍋類を総称して鍋B類とした。土師質あるいは瓦質の鍋や釜の口縁部の中で、口縁部外側を引き出して鏝状の肥厚した部分を持つものである。下太田遺跡とほぼ同時

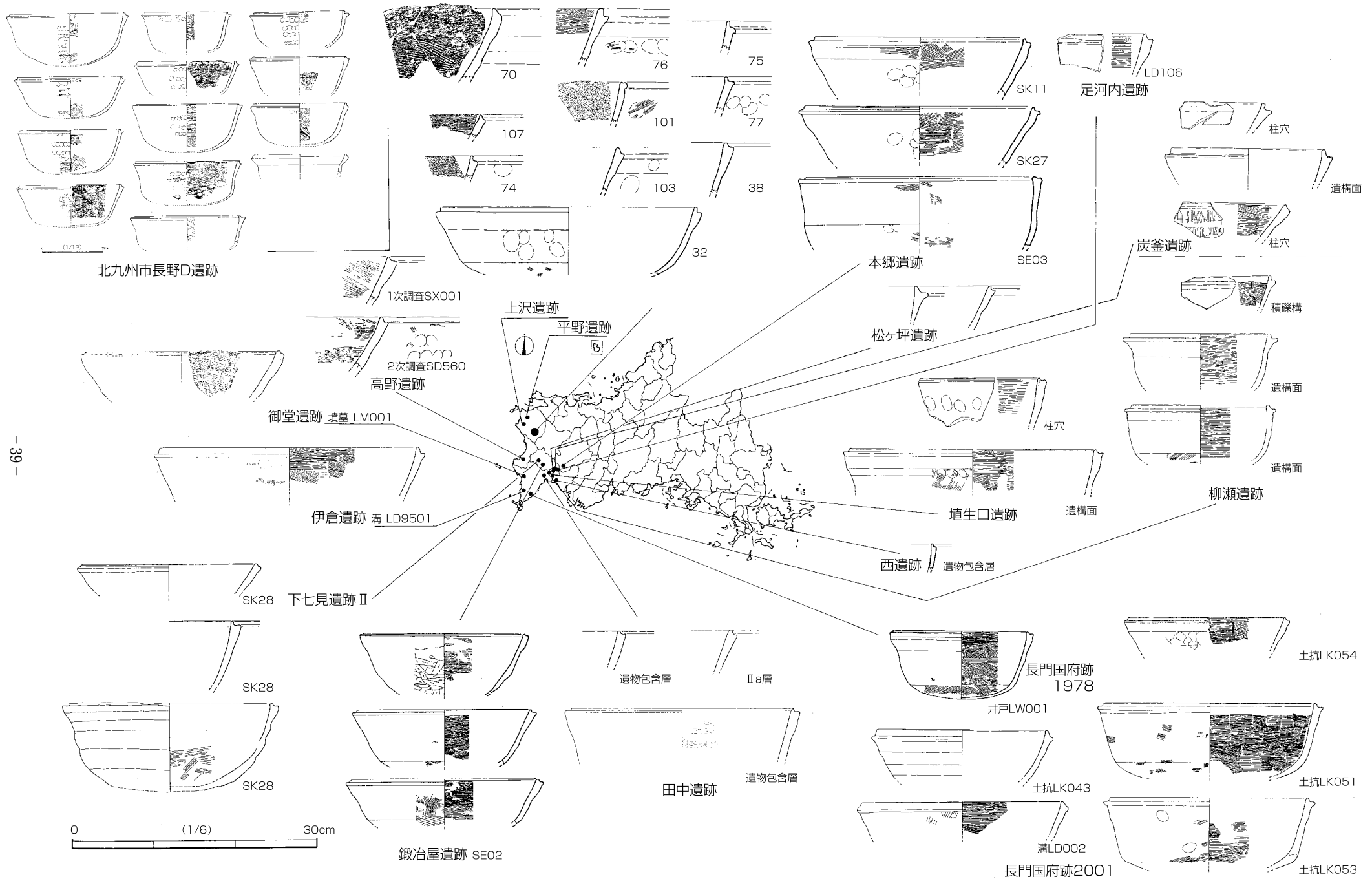
期と比定され、近年発掘された瓦質土器の生産地である原遺跡や岩淵遺跡からは、同形状の口縁部の出土例はない。両遺跡から出土しているのは1～1.2cm幅の鏝を貼り付けたもので、器形としては羽釜である。32や38、103のように鏝部を引き出しその下部を肥厚させたものとは明らかな違いを見せている。B類の山口県内での出土例は、15遺跡（第40図）にとどまり下関市を中心にして、県内西部域に集中しており、下太田遺跡は出土例の中で最北端に位置している。また、下太田遺跡と同じ年に発掘された豊北町内の平野遺跡、上沢遺跡（未報告）からも、同じ形態を持つ遺物が出土している。これらの遺跡の中から出土したもので、時期が明確に比定されているのは、長門国府の井戸LW001出土例であり1309年の火災に際して直後に投棄された遺物とされている。下太田遺跡の鍋B類は、県外では北部九州に出土例が多く、北九州の長野D遺跡から出土したものを中心に、豊前系中世雑器として考察がなされている。これらとも対比すれば、下太田遺跡からの出土例は、主として、14～15世紀代に比定することができよう。

これらの遺跡の分布状況で特徴的なのが、江戸時代初期に整備された赤間関街道沿いに広がりを持つ点である。赤間関街道は萩と下関の間を結ぶ3本の道筋からなり、響灘沿岸を通る北浦道筋、小月より西市を抜けて山陰に至る北道筋と、小月から吉田、大嶺を抜け秋吉、絵堂を通過して萩に至る中道筋がある。この道筋と遺跡を照らし合わせると、長門国府を起点として、伊倉・御堂・高野・上沢・平野の各遺跡を通る北浦道筋と、小月から内陸に向かって田中・鍛冶屋・下七見の各遺跡を通る北道筋、埴生口・柳瀬・松ヶ坪・炭釜・足河内・本郷の各遺跡を通る中道筋と、各道筋沿いに遺跡が点在することになる。これらのことから、下太田遺跡の鍋B類は、豊前地域で生産されたものか山口県内で生産されたものかはっきりとしないが、山口県内では下関を拠点として、赤間関街道沿いに伝わっていったことが想定される。また、山口市から途中西市・滝部を通過して肥中まで抜ける肥中街道は、中世大内氏の時代に盛んに利用された街道であり、西市で赤間関街道の北道筋と交差する。そのため西市以北では、県央の文化圏と下関中心の文化圏が混在する結果を招いたものと思われる。そのため下太田遺跡からは県央部文化の鍋A類と、豊前・下関文化の鍋B類の出土が見られるのであろう。

豊北町内の他の遺跡からの出土例が少ないのは、中世の遺構の発掘事例が少ないこともあり、今後の発掘調査の結果、多くの報告がなされその分布ももっと明確なものになってくるであろう。また、今回の調査は、豊北町内において空白になっていた弥生から近世の期間をうめる遺跡として、肥後屋敷遺跡とともに、史的事実の解明の手がかりとなる貴重な資料の提供ができたことに、重要な意義を見いだすものである。

参考文献

- | | |
|--|---|
| 山口県教育庁文化課『歴史の道調査報告書 赤間関街道』1997 | 豊北町史編纂委員会『豊北町史二』1994 |
| 豊浦町教育委員会『高野遺跡（南地区）』1999 | 菊川町教育委員会『下七見Ⅱ』1992 |
| 下関市教育委員会『御堂遺跡』1991 | 下関市教育委員会『足河内遺跡』1993 |
| 下関市教育委員会『埴生口遺跡』1991 | 下関市教育委員会『松ヶ坪遺跡』1994 |
| 下関市教育委員会『長門国府跡』2001 | 下関市教育委員会『長門国府跡』1978 |
| 下関市教育委員会『伊倉遺跡』2001 | 下関市教育委員会『田中遺跡』1998 |
| 下関市教育委員会『炭釜遺跡』1993 | 下関市教育委員会『柳瀬遺跡』1997 |
| 山口県埋蔵文化財センター『甲殿遺跡』1993 | 山口県埋蔵文化財センター『鍛冶屋屋敷遺跡』1995 |
| 山口県埋蔵文化財センター『本郷遺跡』1996 | 山口県埋蔵文化財センター『岩淵遺跡』2001 |
| 山口県埋蔵文化財センター『原遺跡』2001 | 山口県埋蔵文化財センター『西遺跡』2002 |
| 山口県埋蔵文化財センター『肥後屋敷遺跡』『陶埴 第14号』2001 | 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」『山口考古 第17号』山口考古学会 1988 |
| 財団法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室『長野D遺跡』1980 | |
| 谷口俊治「豊前地域の中世雑器」『研究紀要 第3号』財団法人北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 1989 | |



第40図 山口県内 鍋B類出土遺跡

図版 1



1 地区全景（東から）



1 地区①中央部（東から）



1 地区③東側（東から）



2地区全景（東から）



2地区中央部（東から）

図版 3



3地区全景（南から）



3地区中央部（南から）



2・3地区遠景（東から）



1地区②全景（東から）

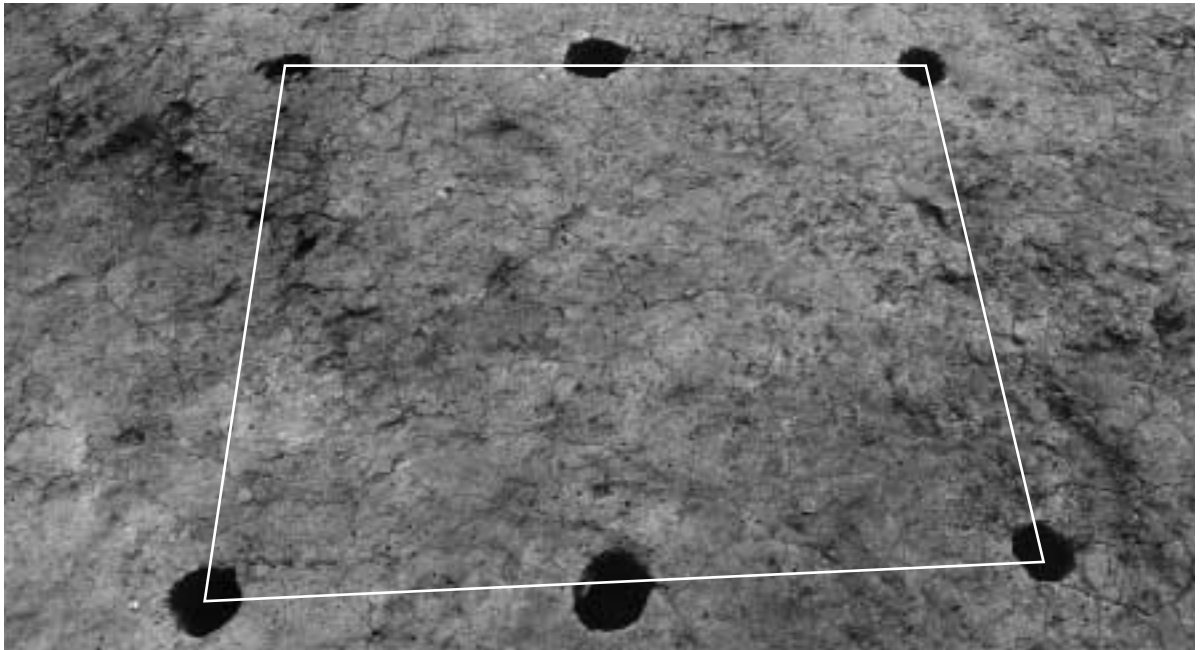
図版 5



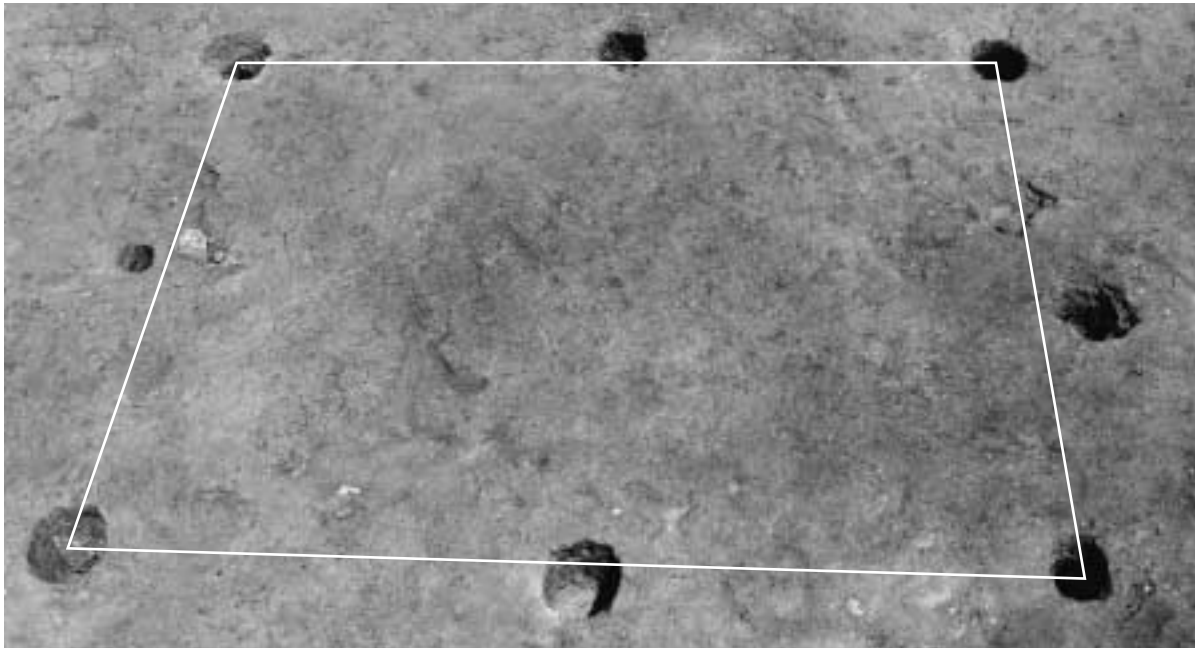
S B 1 (西から)



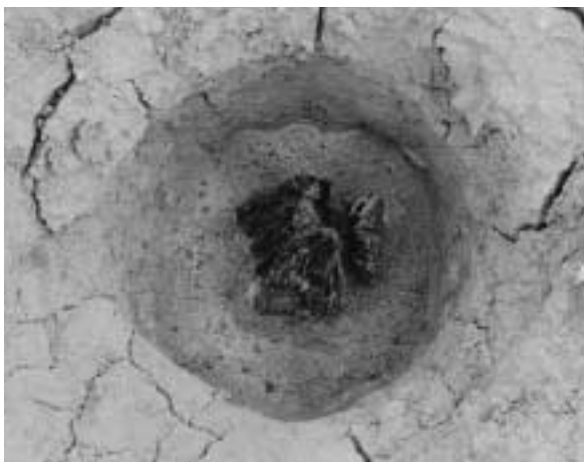
S B 1 遺物出土状況 (北から)



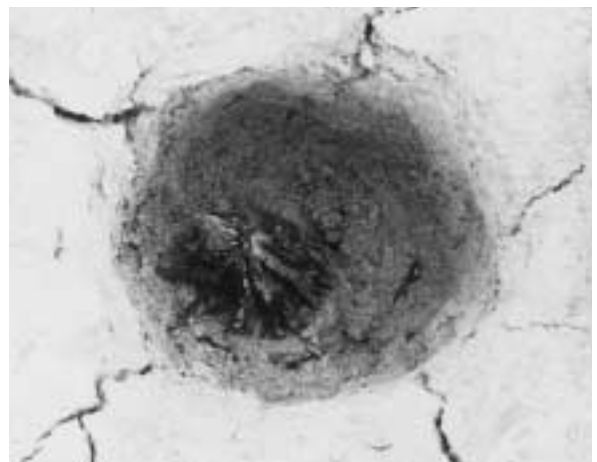
S B 2 (西から)



S B 3 (西から)



S P 17内柱痕検出状況 (北から)

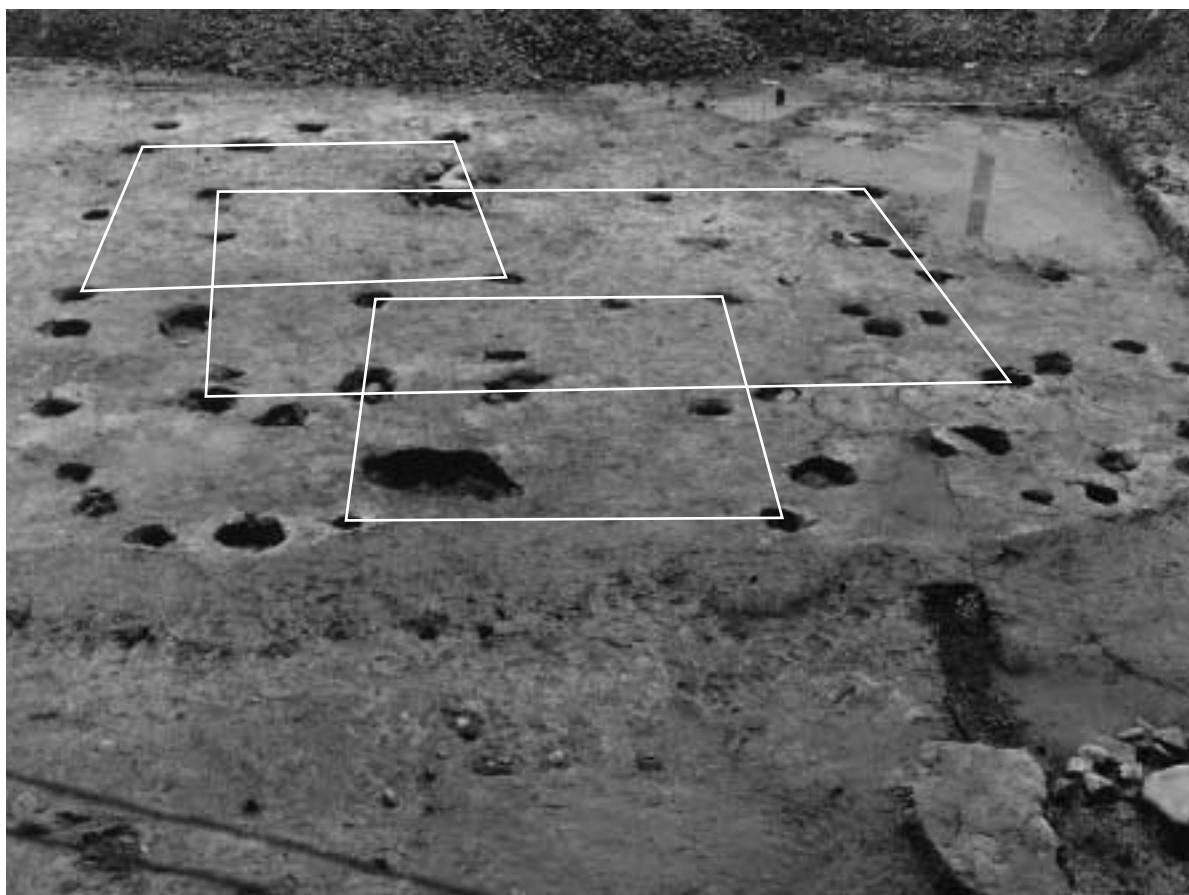


S P 27内柱痕検出状況 (北から)

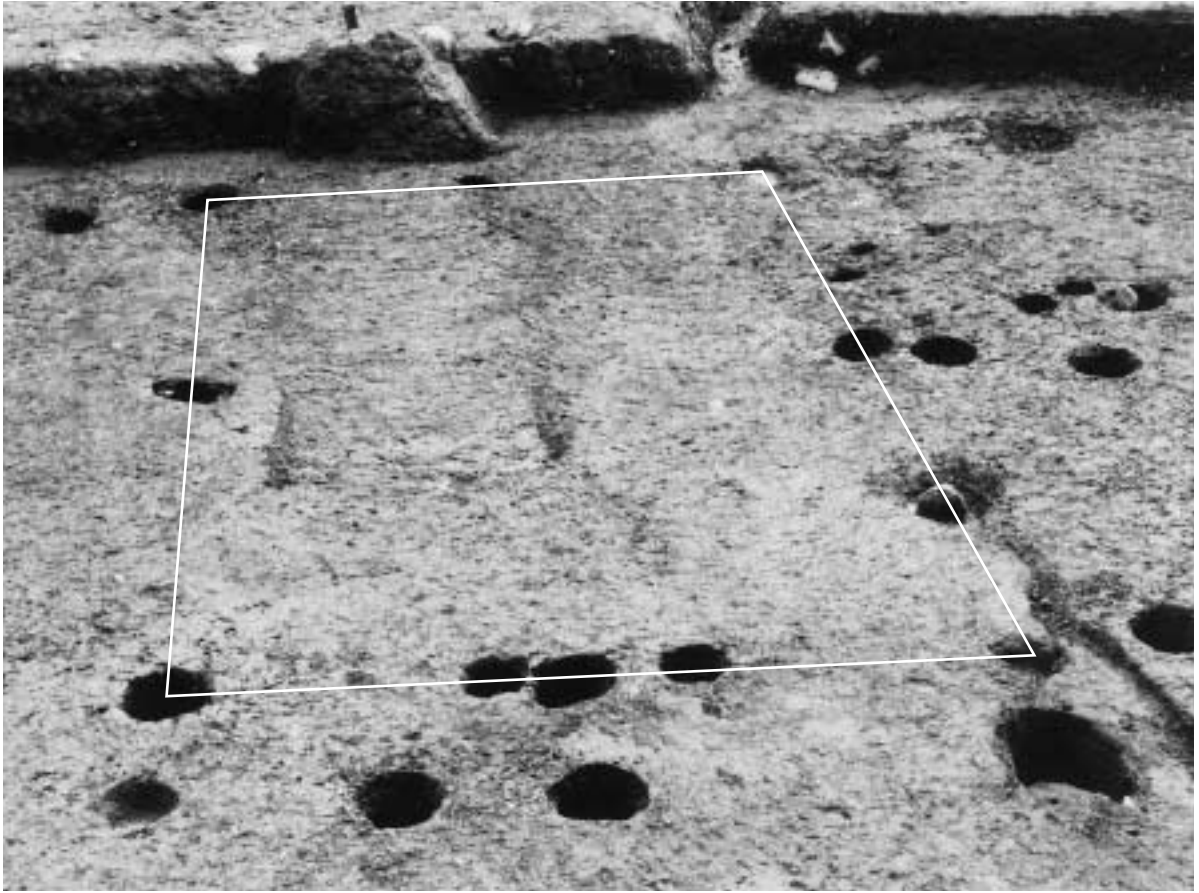
図版 7



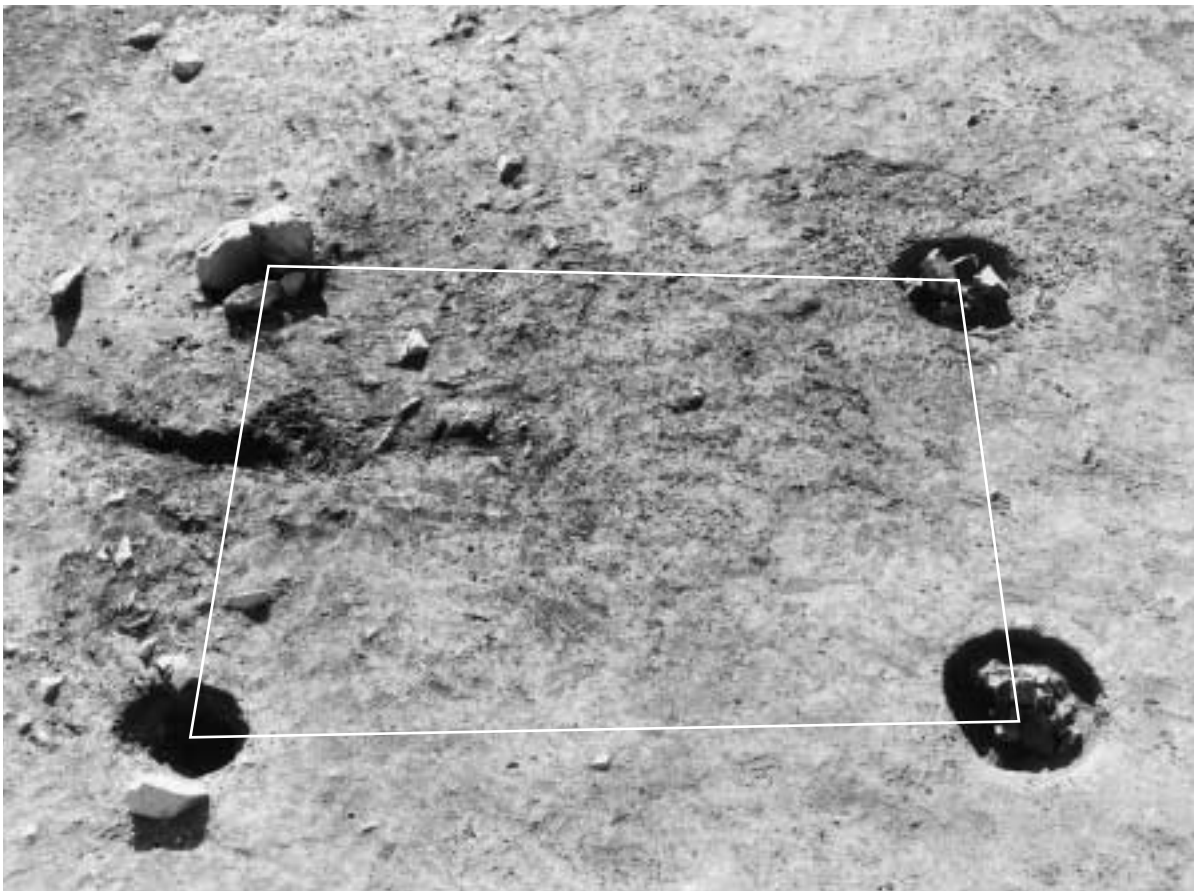
SB7.SA1・2.SD3・4 (北から)



SB10・11・13 (西から)

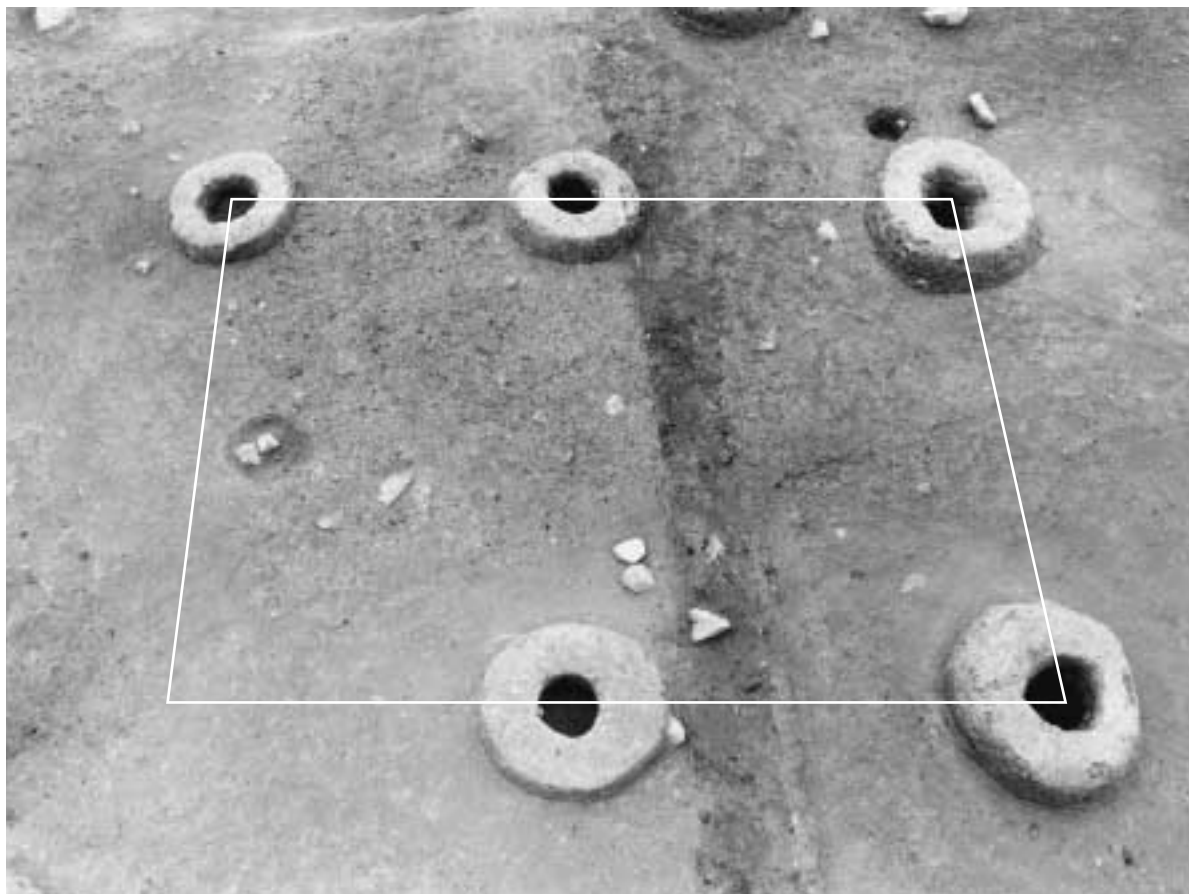


SB14 (西から)

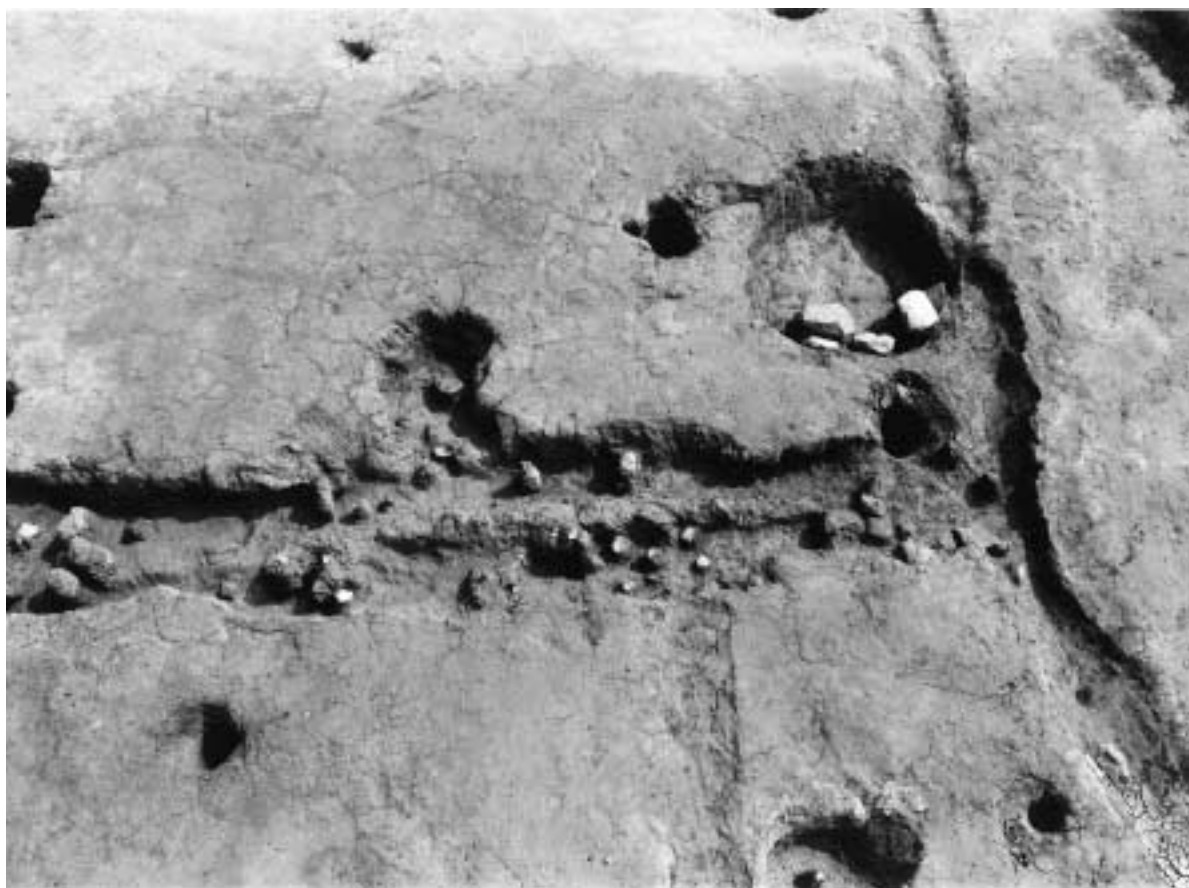


SB18 (東から)

図版 9



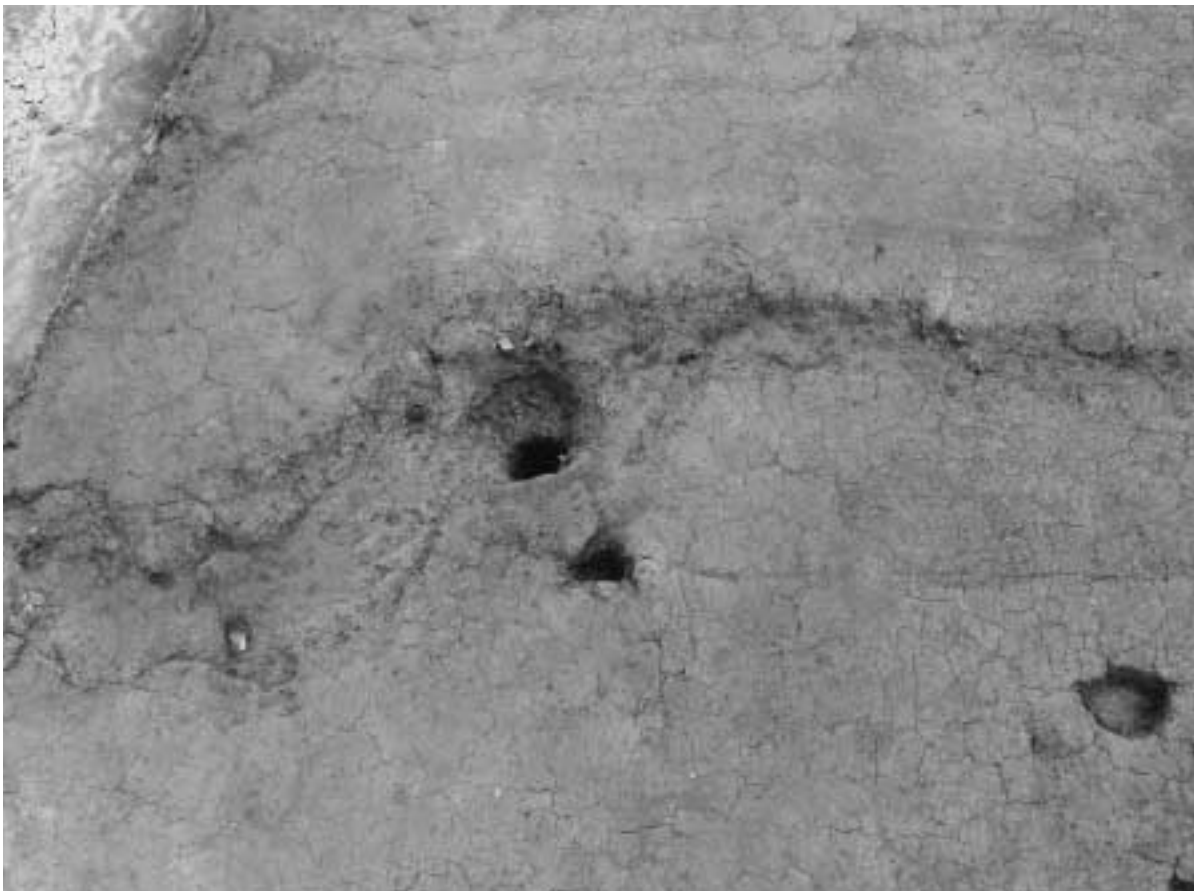
SB19 (北から)



SD 2・3・4 合流部遺物出土状況 (北から)



SD 3・4 (北西から)



SD 8 (北から)

図版11



S K 5 出土状況 (東から)



S K 6 出土状況 (南から)



S K 14 遺物出土状況 (西から)



S K 18 遺物出土状況 (東から)



S K 22 完掘 (東から)



S K 23 遺物出土状況 (北から)



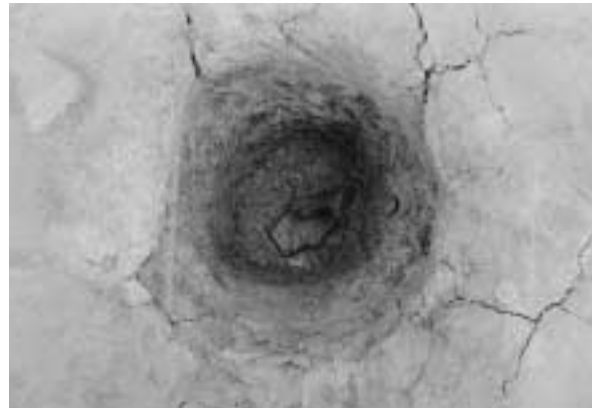
S K 24 出土状況 (南から)



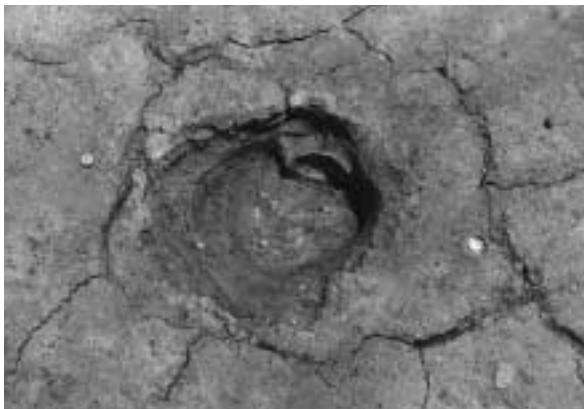
S K 29 遺物出土状況 (東から)



S P 29遺物出土状況（西から）



S P 61遺物出土状況（北から）



S P 40遺物出土状況①（西から）



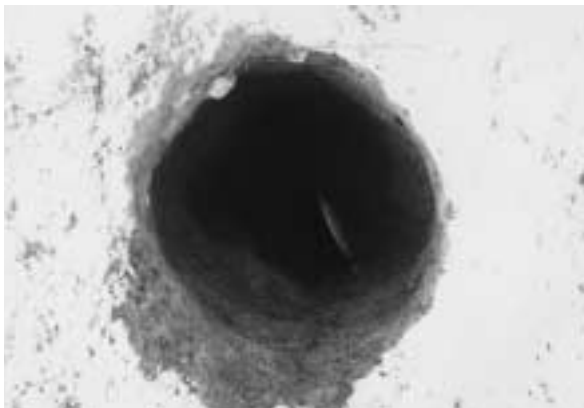
S P 40遺物出土状況②（西から）



S P 64遺物出土状況（西から）



S P 74遺物出土状況（北から）



S P 87遺物出土状況（東から）



S P 90遺物出土状況（西から）

図版13



石組遺構検出状況（西から）



集石遺構1 検出状況（北から）



集石遺構1 トレンチ土層（東から）



S X 1 検出状況（北から）



1 地区遺物包含層検出状況（南から）



1 地区遺物包含層内トレンチ土層西側（南から）



1 地区遺物包含層内トレンチ土層東側（南から）



1 地区遺物包含層遺物出土状況（東から）



1 地区遺物包含層遺物出土状況（西から）

図版15



2地区遺物包含層遺物出土状況



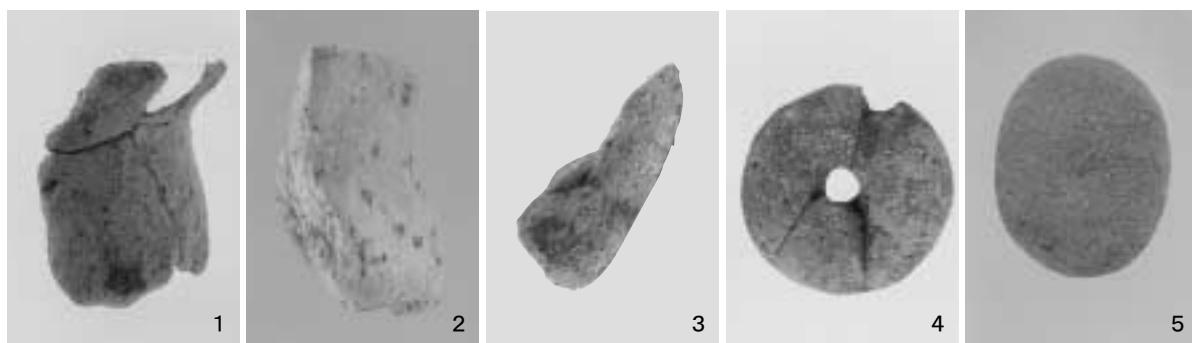
2地区下段土層壁（南から）



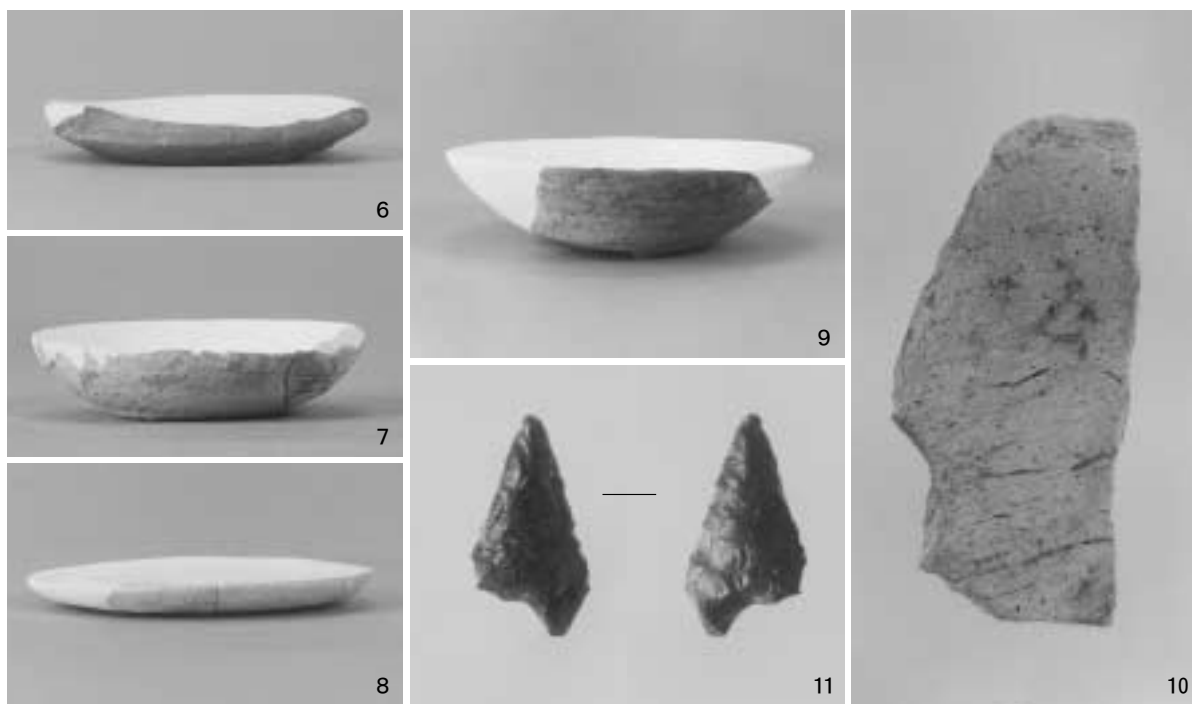
3地区東端部杭列検出状況（西から）



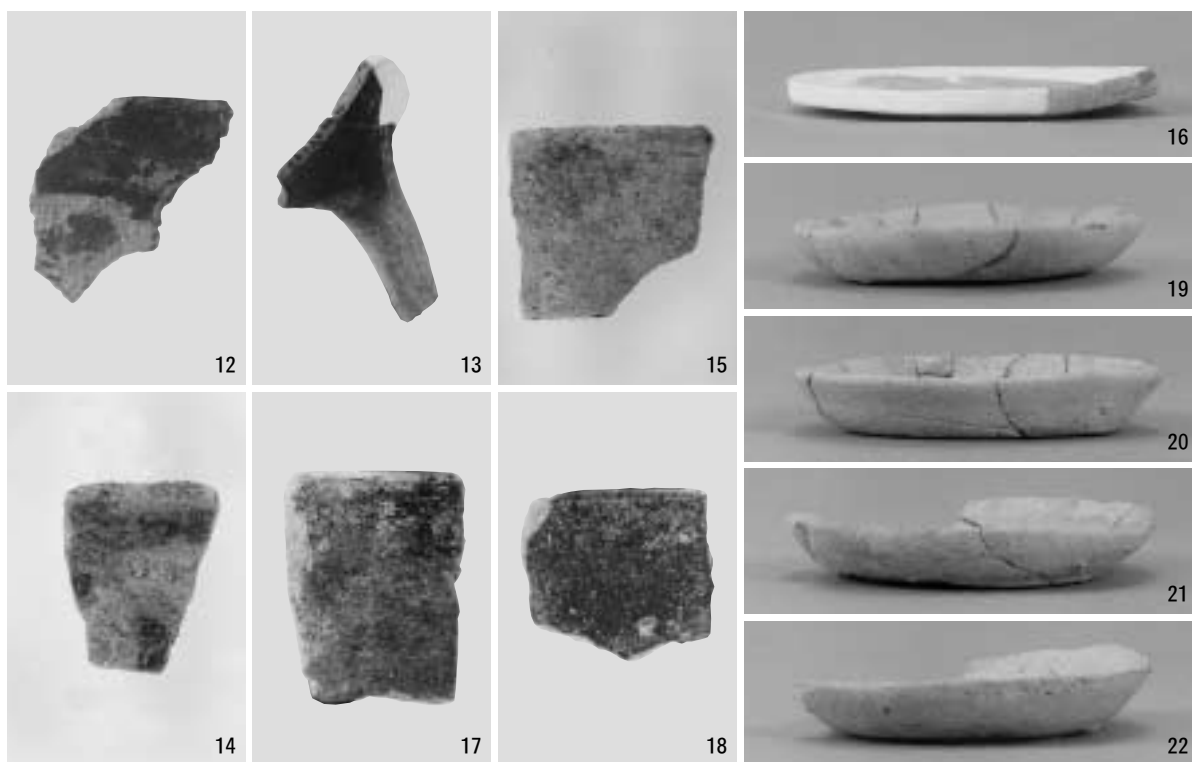
1地区①杭列検出状況（南から）



SB 1 出土遺物

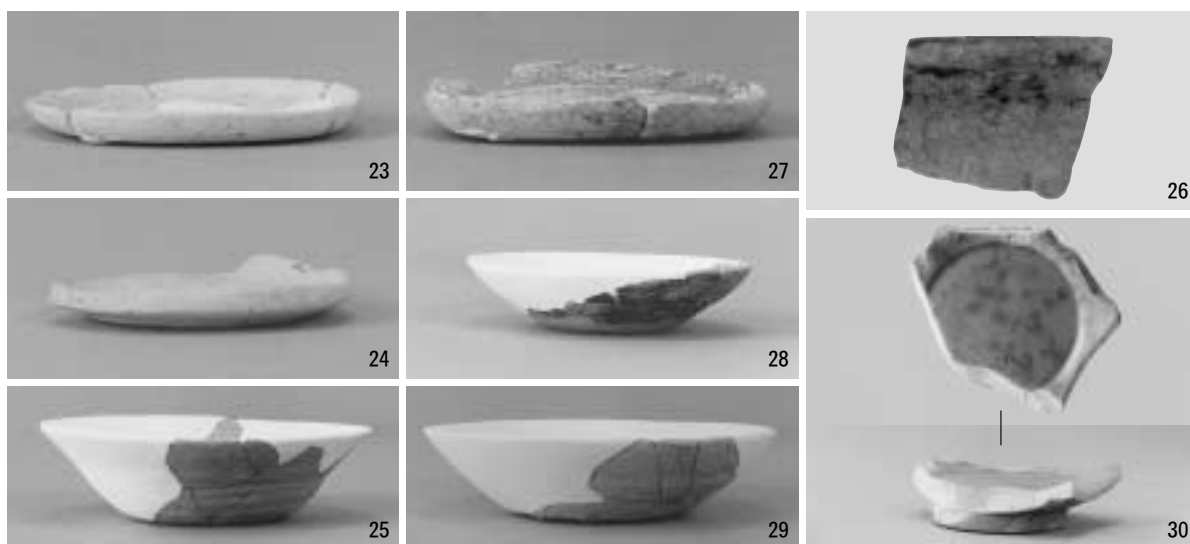


掘立柱建物出土遺物

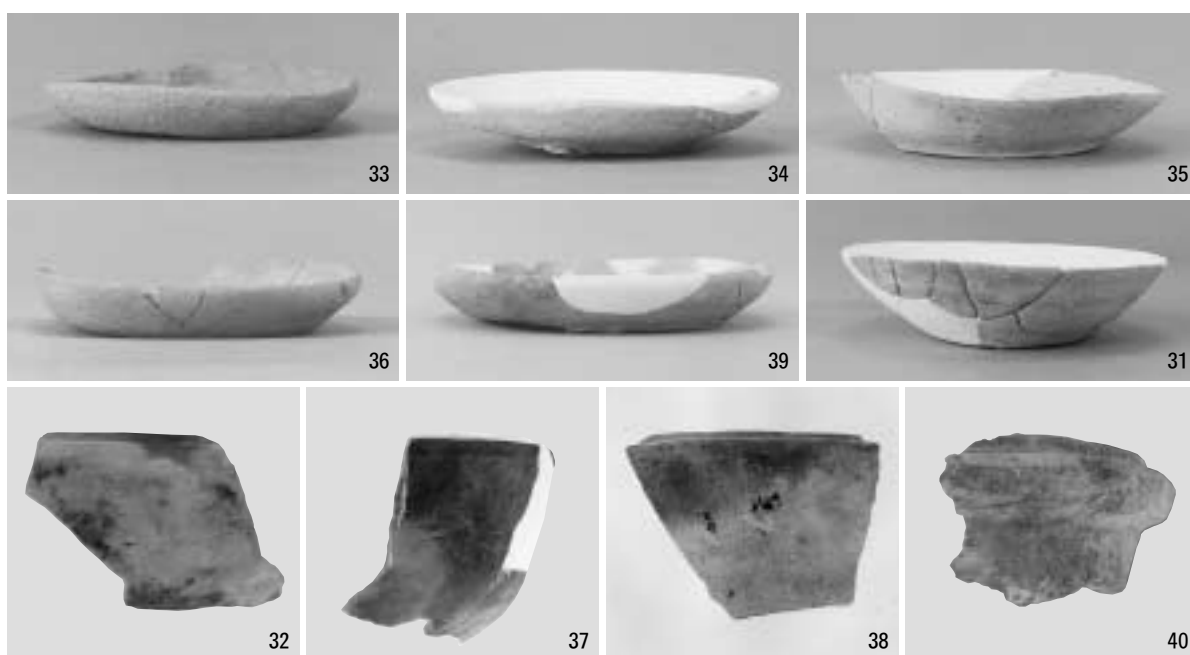


溝状遺構出土遺物

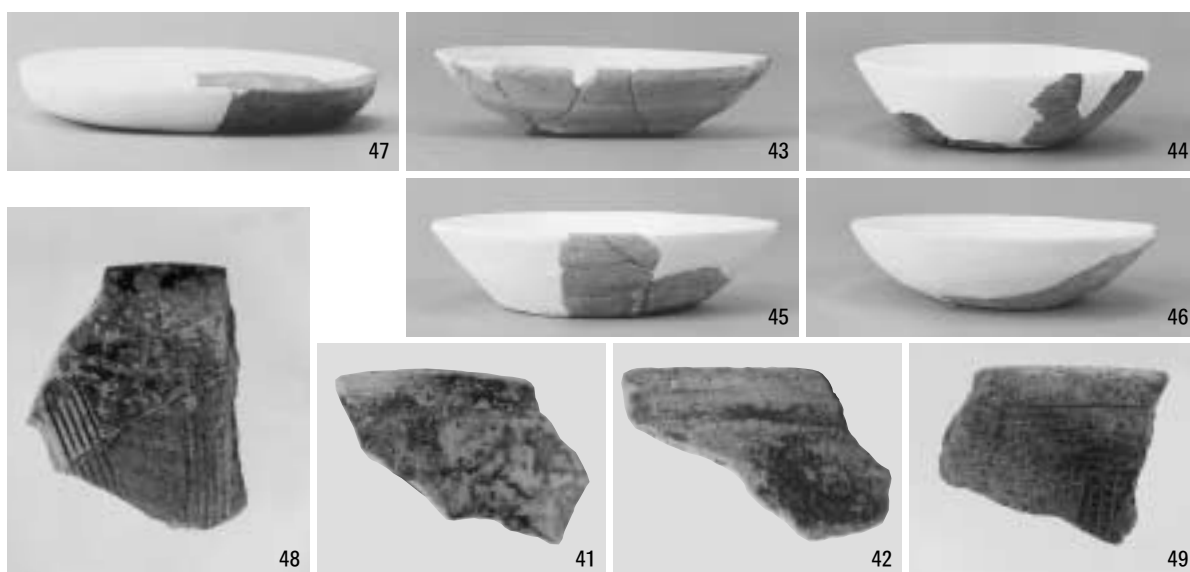
图版17



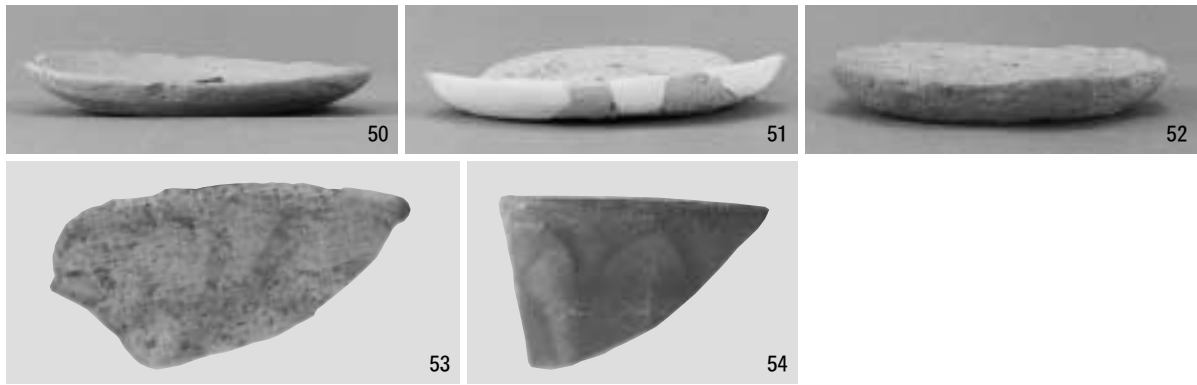
1 地区土坑出土遺物



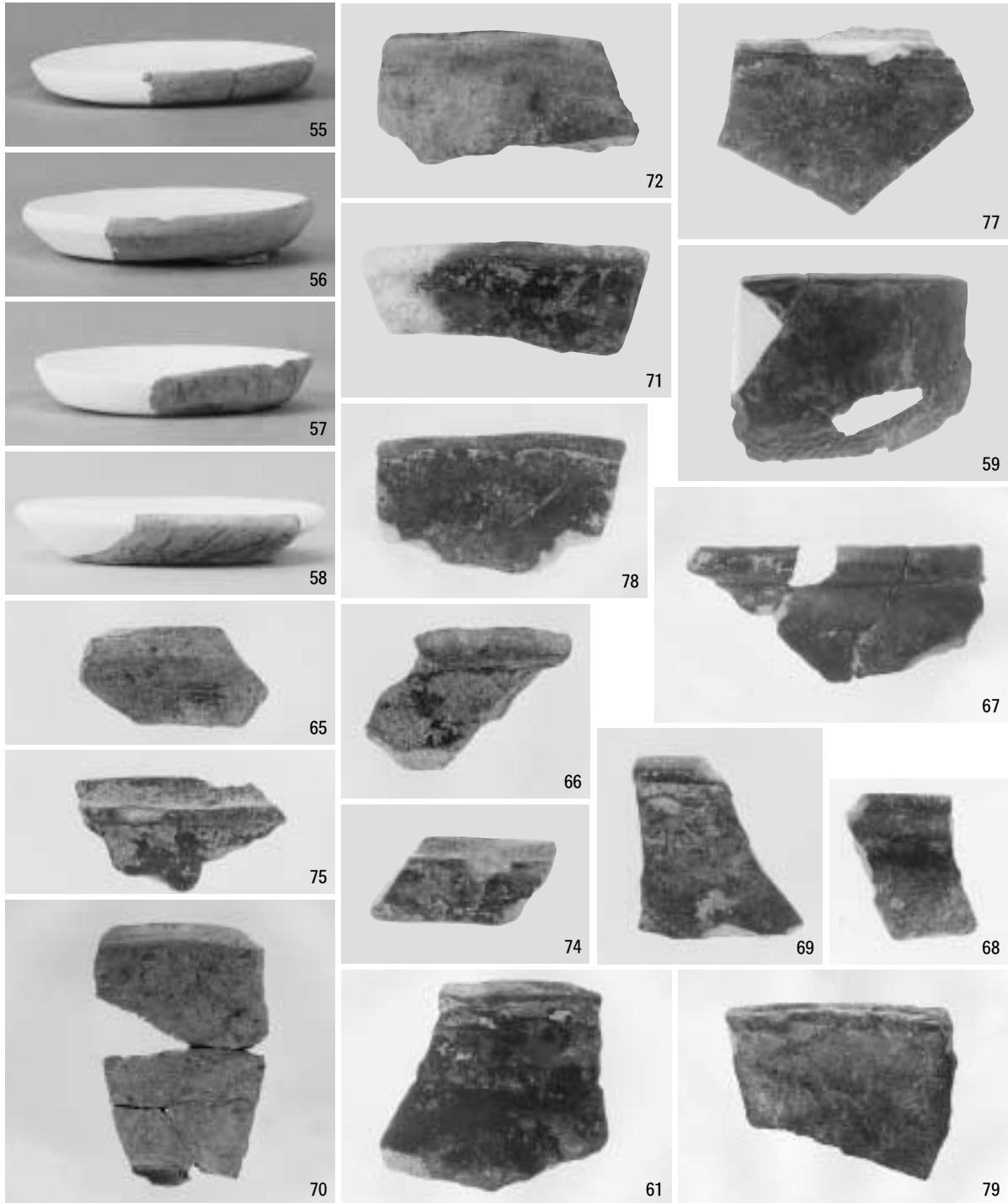
2 地区土坑出土遺物



1 地区柱穴出土遺物

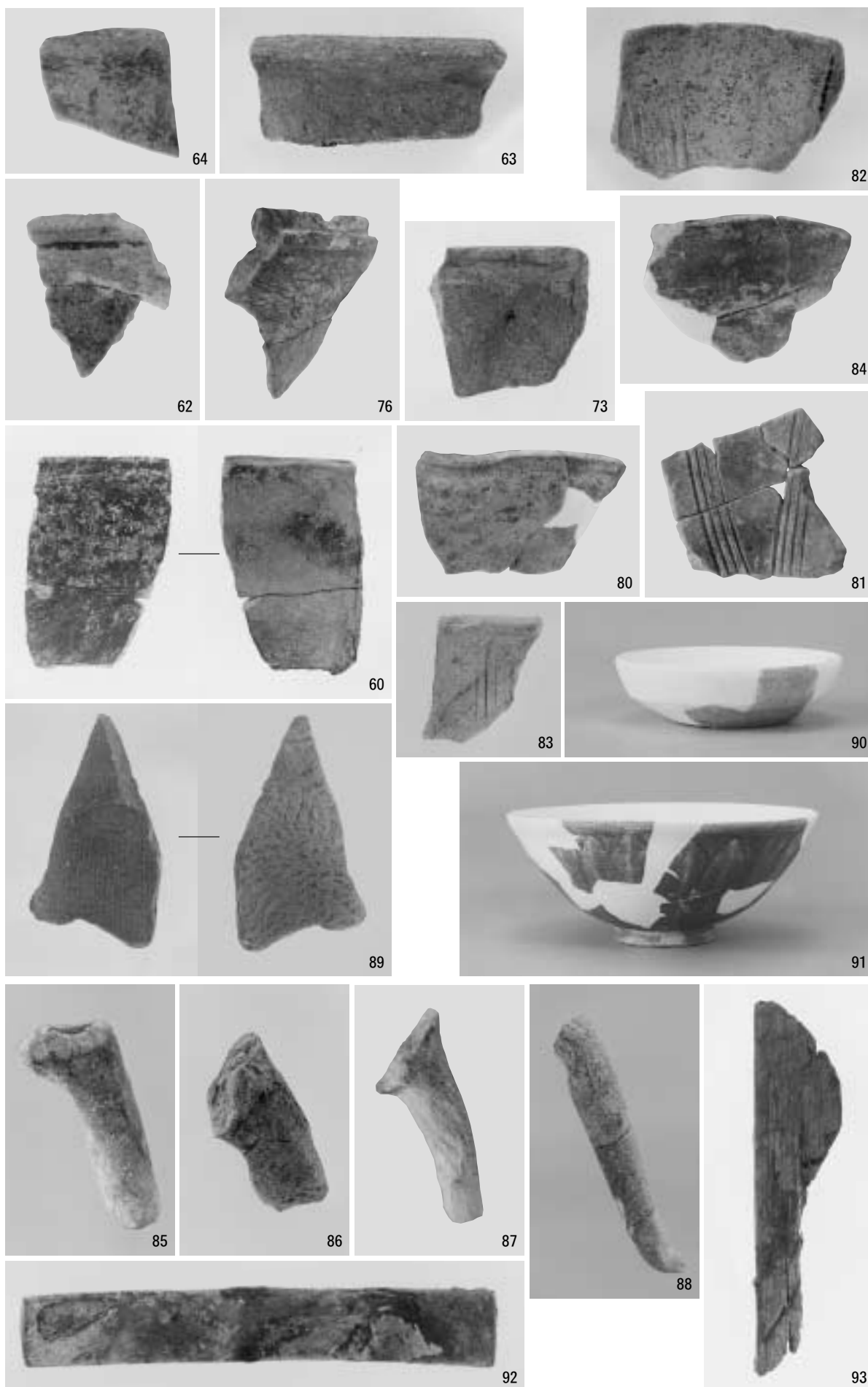


2・3地区柱穴出土遺物

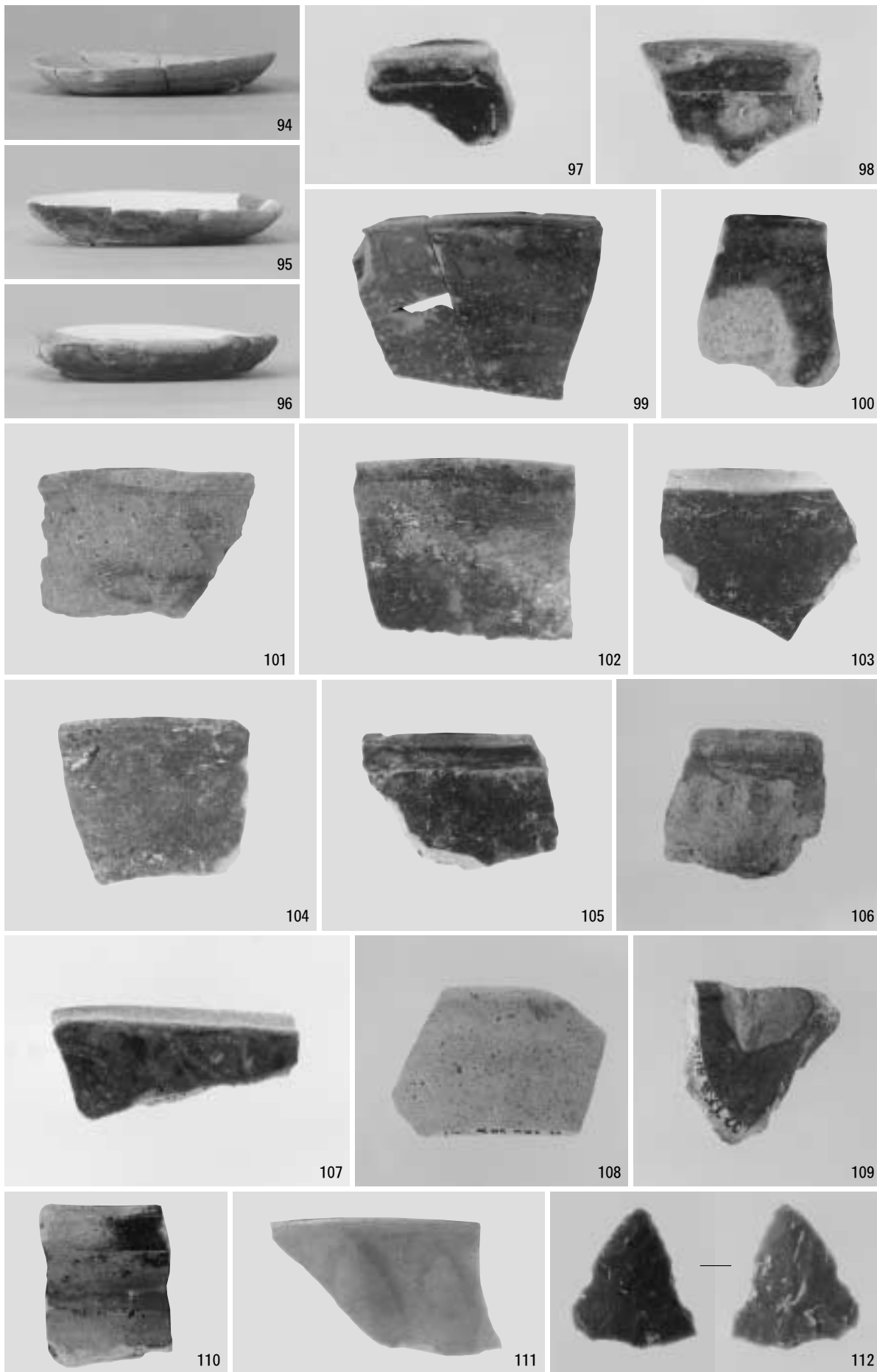


1地区遺物包含層出土遺物①

图版19



1 地区遺物包含層出土遺物②



2地区遺物包含層出土遺物

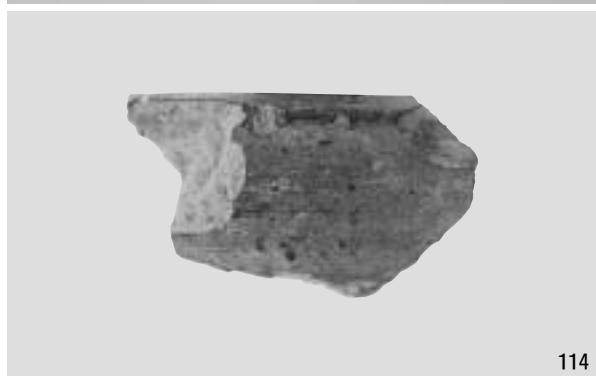
图版21



113



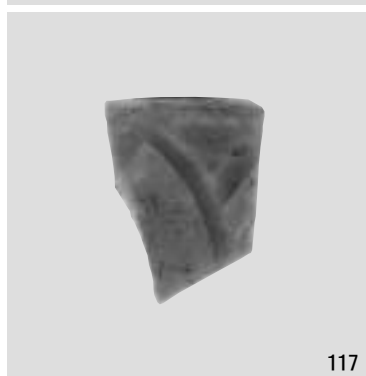
115



114



116



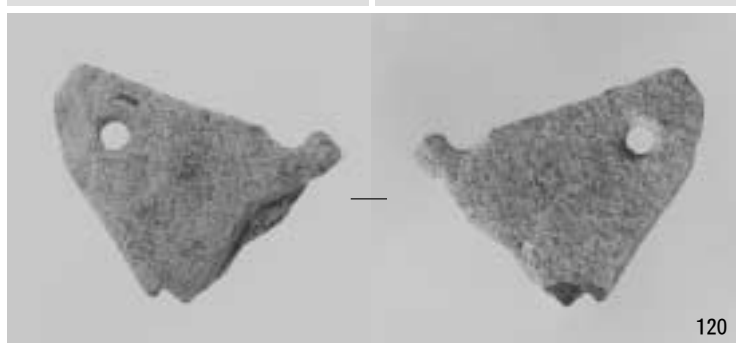
117



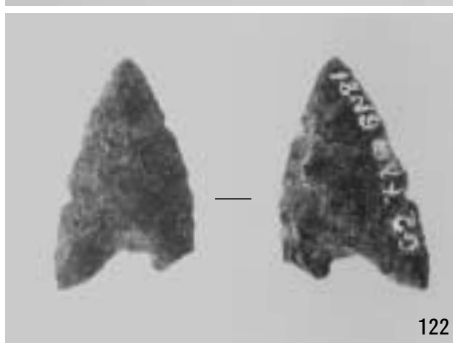
118



119



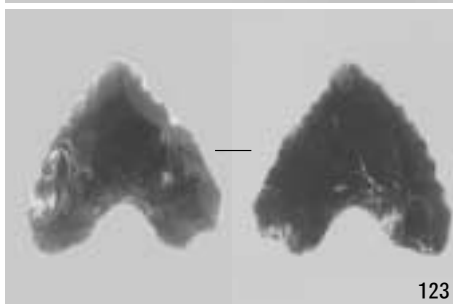
120



122



121



123

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもおたいせき	
書名	下太田遺跡	
副書名		
巻次		
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告	山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集	第22集
編集著者名	内山 雅司 桑原 豪夫 城島 史朗	小林 善也
編集機関	山口県埋蔵文化財センター	豊北町教育委員会 (土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060	〒759-6121 山口県豊浦郡豊北町神田上891-8 TEL 0837-88-5007
発行年月日	西暦2003年3月24日(平成15年3月24日)	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもおたいせき 下太田遺跡	やまぐちけん とよらちぐん 山口県豊浦郡 ほうほくちょう おおあざたすき 豊北町大字田耕	35444		35° 15' 42"	130° 59' 14"	20020501) 20021120	5,500	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下太田遺跡	集落跡	中世	竪穴住居 1軒 掘立柱建物 18棟 溝状遺構 12条 柵列 2条 土坑 36基 柱穴 約450個 石組遺構 1基 集石遺構 2基 不明遺構 1基	弥生土器 須恵器 土師器 瓦質土器 土師質土器 青磁 石庖丁 砥石 凹石 石鏃 石製紡錘車	弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴住居 中世の溝状遺構で区画された掘立柱建物群

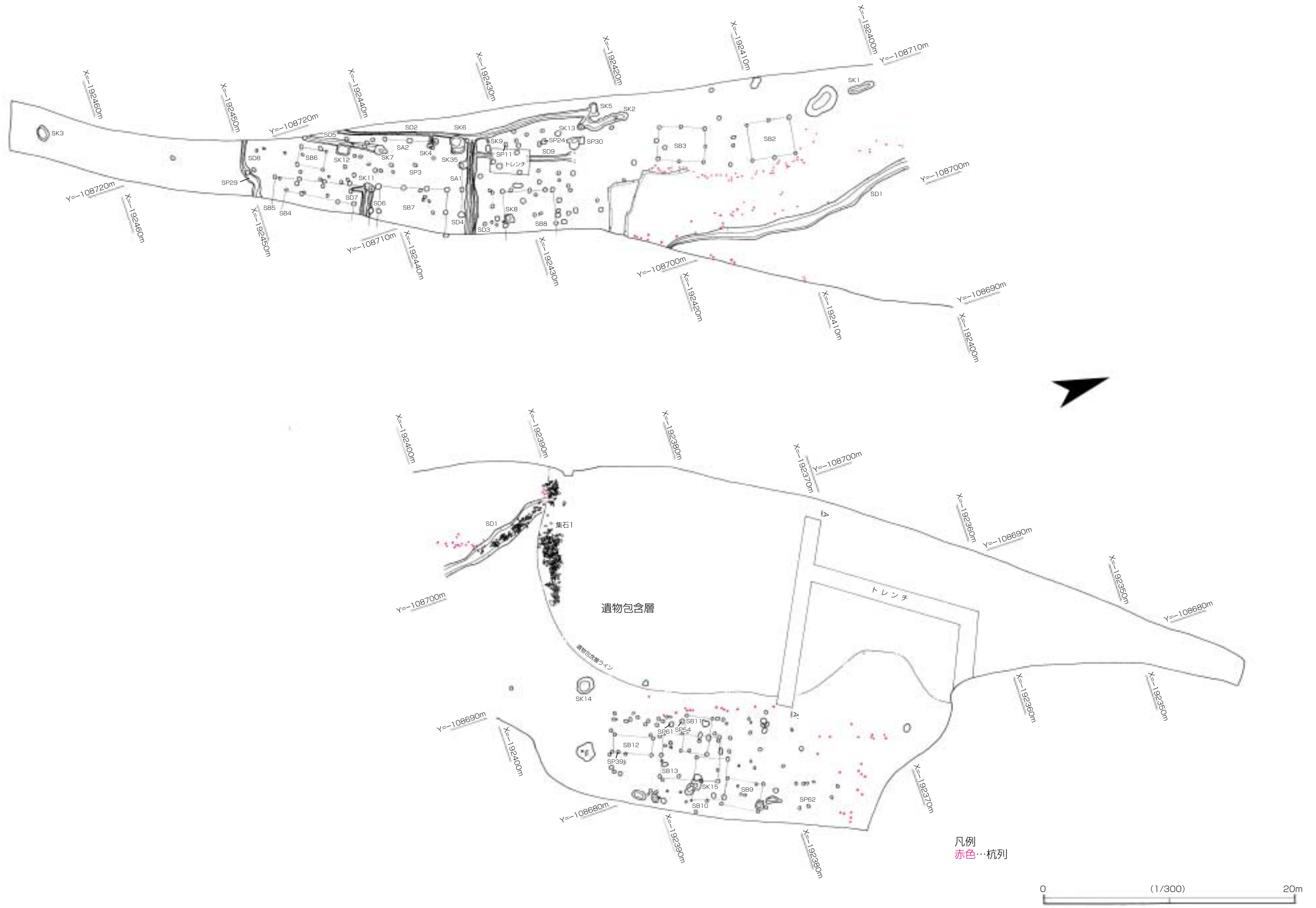
山口県埋蔵文化財センター調査報告 第39集
山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書 第22集

下 太 田 遺 跡

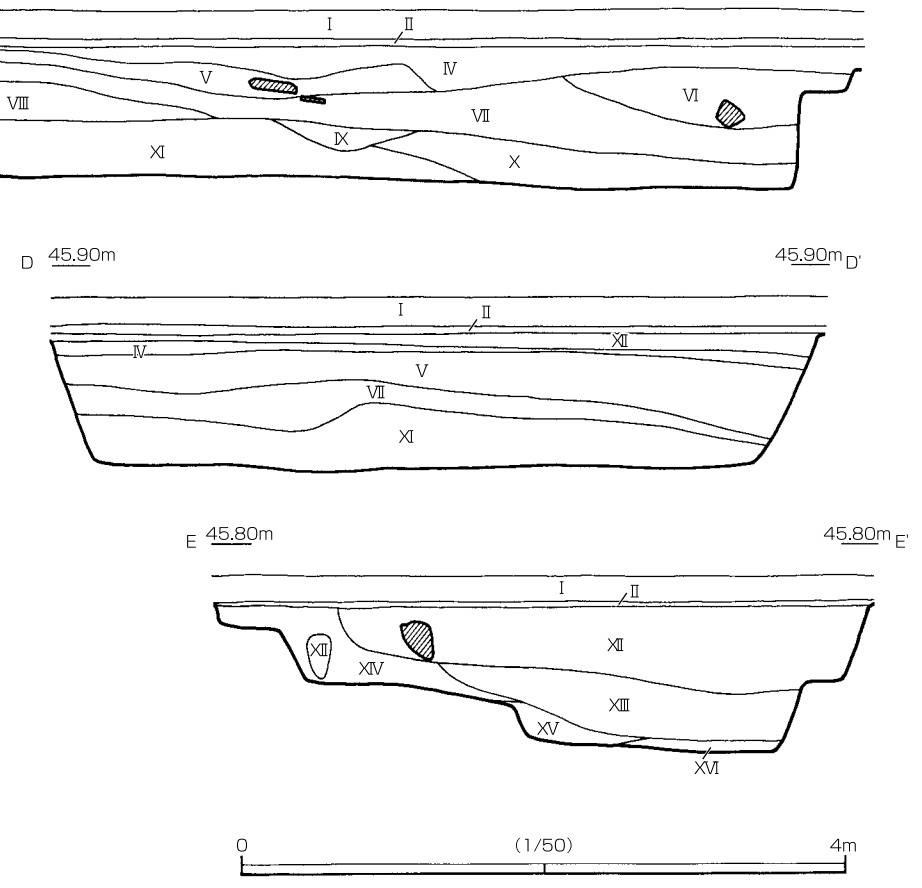
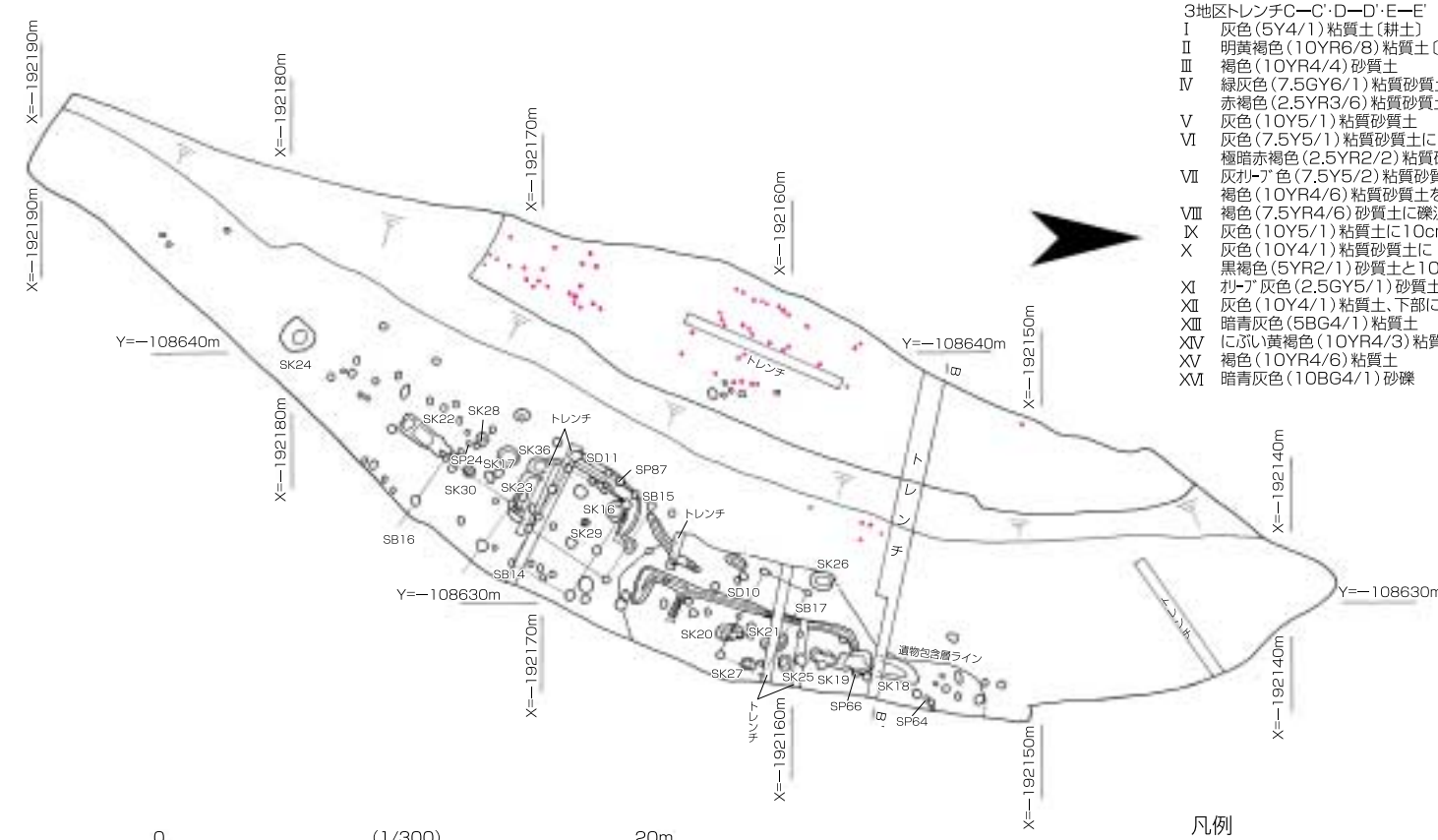
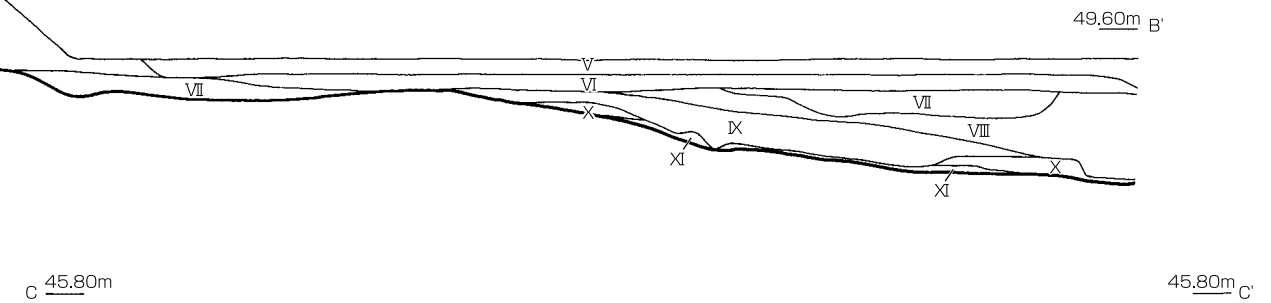
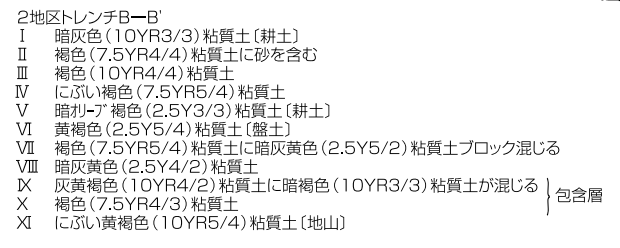
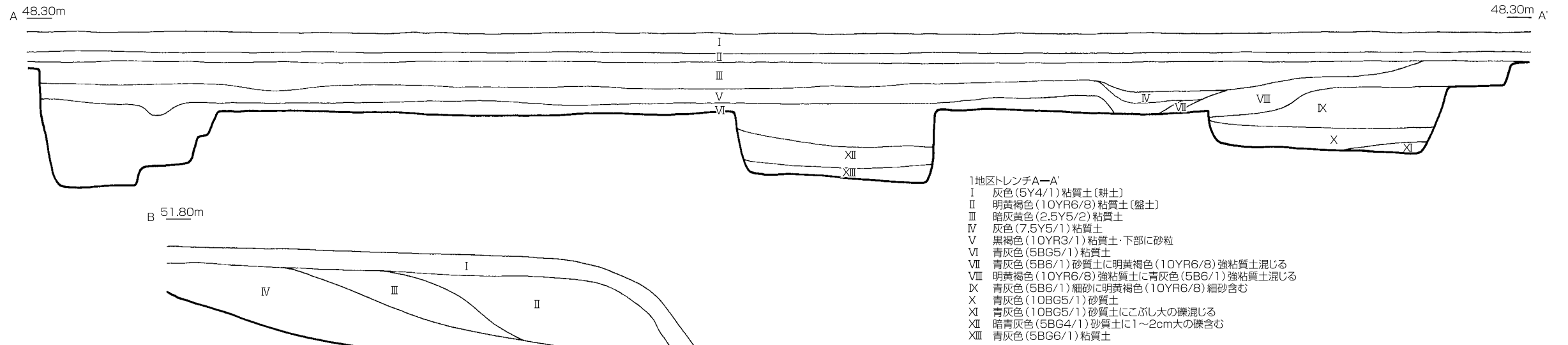
2003年3月

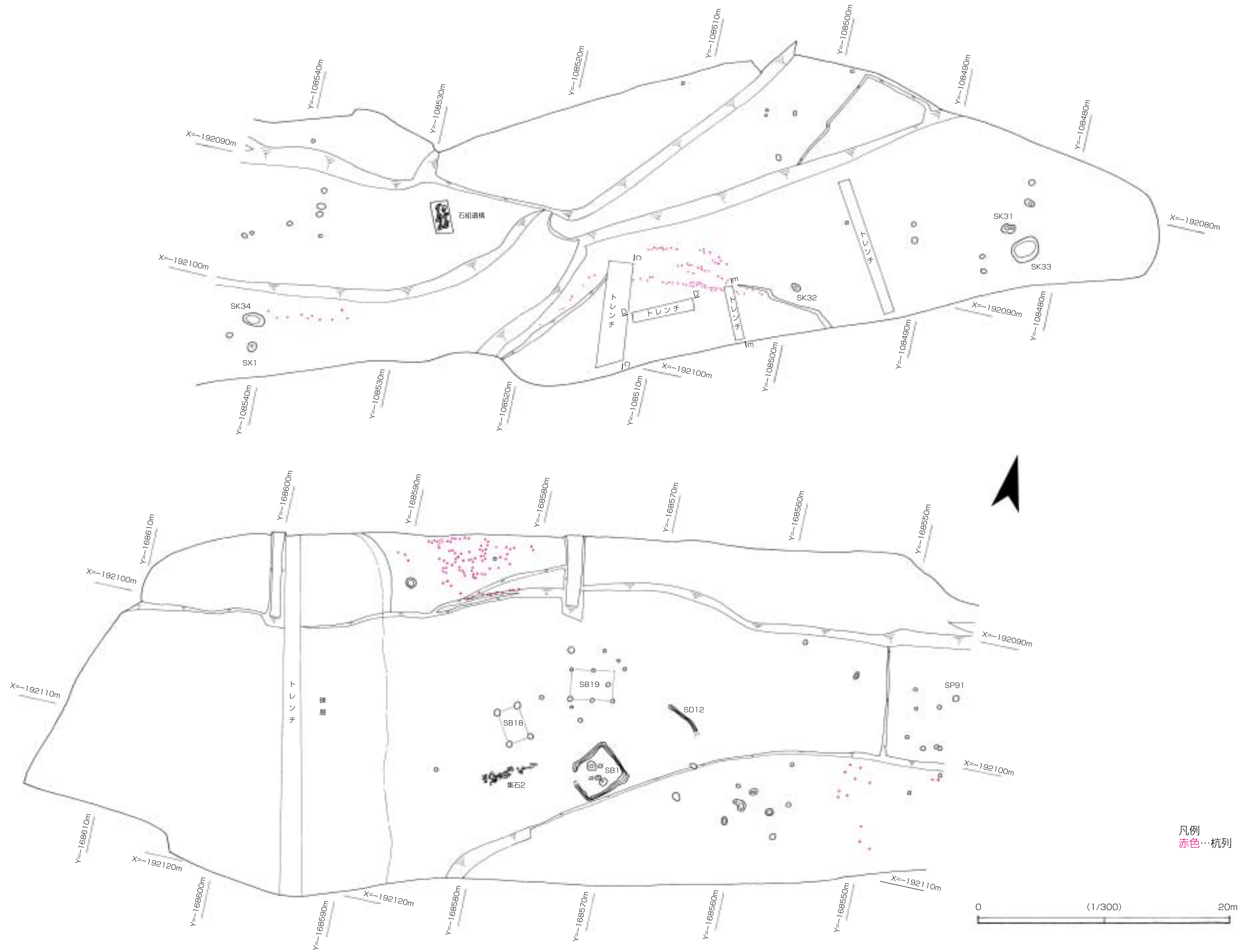
編集・発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口市春日町3番22号
豊北町教育委員会
(土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)
〒759-6121 豊浦郡豊北町神田上891-8

印刷 児玉印刷株式会社
〒755-0008 宇部市明神町3丁目4-3



第3図 1地区遺構配置図





第6图 3地区遺構配置図